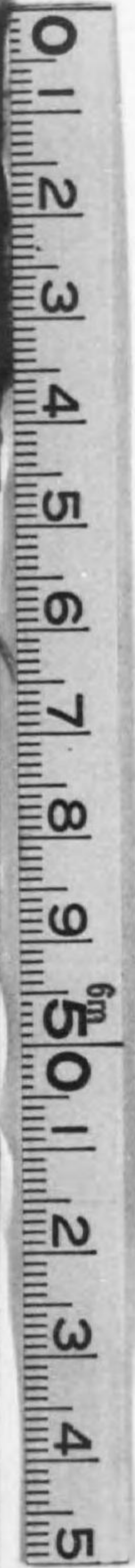


910.8-Ko45ウ



1200500754827

9108



始





47

910.23  
~~494~~  
910.8  
K045  
(15)



文學博士 吉澤義則著

朝  
文  
學  
概  
說

東京 日本文學社





610-200

# 王朝文學概説

## 目次

序説……………一

本論

第一章 王朝文學の胎生

第一節 和歌の暗黒時代とその復興……………一〇



第二節 假名の創生……………二〇

第三節 **散文の母胎とその展開**……………二八

第二章 和歌の伸展とその傾向

第一節 古今集の先驅者……………三五

第二節 古今集以前の傾向……………四六

第三節 古今集勅撰の壯舉……………六二

第四節 古今集の歌人……………六五

第三章 **初期の散文文學**

第一節 伊勢物語……………九六

第二節 竹取物語……………一〇四

第三節 宇津保物語……………一一一

第四節 落窪物語……………一二七

第五節 大和物語……………一二三

第六節 蜻蛉物語……………一二九

第四章 和歌の衰頹とその轉向

第一節 後撰集について……………一三四

第二節 後撰集の歌とその人々(一)……………一四〇

第三節 後撰集の歌とその人々(二)……………一五六



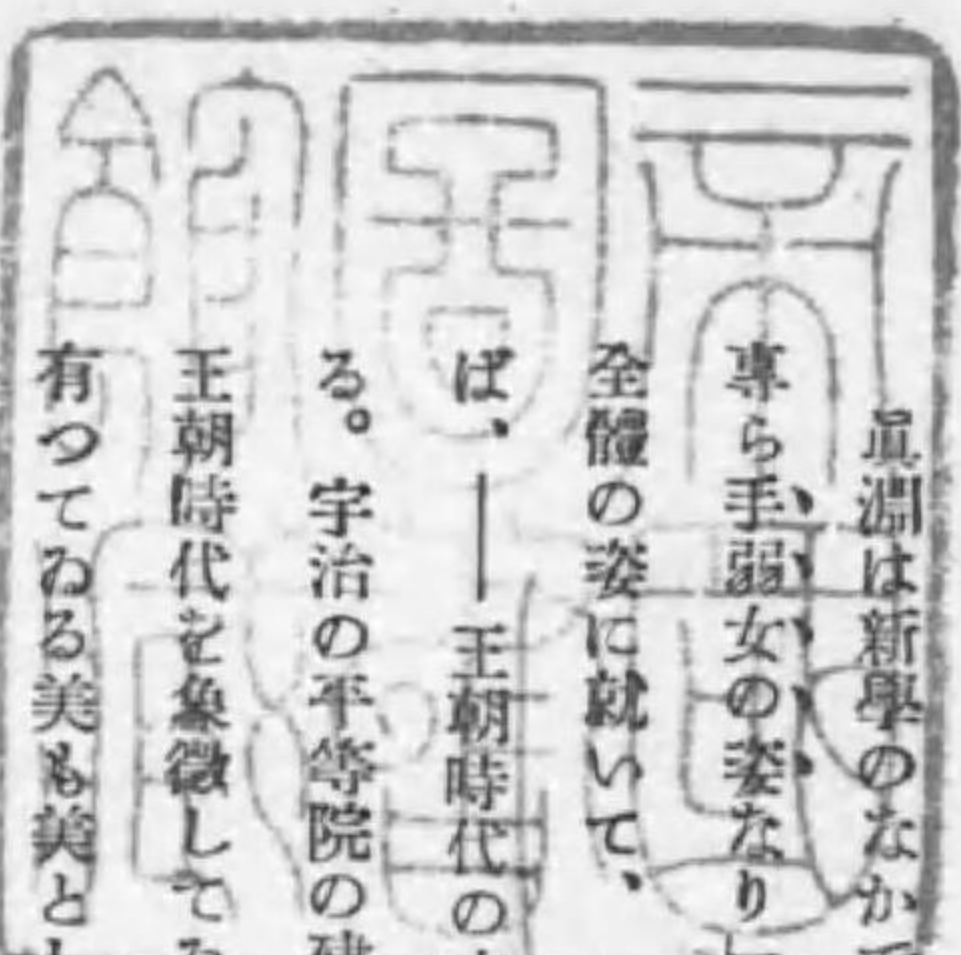
第五章 拾遺集の時代と叙景的詠風…………… 一七九

第六章 王朝文學における「あはれさ」と散文文學への轉機…………… 一八八

結語…………… 一九九

## 王朝文學概説

### 序 説



眞淵は新學のなかで古今集に就いて「山背國はたをやめ國にして、丈夫もたをやめをならひぬ。かれ古今集の歌は専ら手弱女の姿なり」と言つてゐる。これはたゞ古今集の歌ばかりでなく、彼の心にぼんやり描かれてゐた王朝時代全體の姿に就いて、その一端を漏らした言葉として解釋してもいゝかと思ふ。もしかういふ風に解釋できるとすれば、――王朝時代の文學が女性的であることの主なる理由を、自然の性格によつて解釋してゐるのは彼の卓見である。宇治の平等院の建築を見たものは、誰でもあの柔かにして線の細い、しかも整つて沈着してゐる姿が、いかにも王朝時代を象徴してゐることを思はないものはなからう。しかもあの建築が、京都を背景としてのみ調和もし、その有つてゐる美も美として萬幅に生きて來るのであつて、他のどこの自然にもつて行つて見たところで、京都の自然を背景としたやうな美が表はれないとしたならば、畢竟、寢造殿といふやうな、柔かな細い線で左右均齊に組み立てられた建築は、京都の自然が生んだものであるといふことが出来るのである。眞淵が山背國はたをやめ國であつて、丈夫もたをやめの風に化せられたので、古今集の歌が女性的になつたのだといふ立論は、實に肯綮にあたつてゐると言はなければならぬ。しかしながら、たゞこれだけの理由では王朝文學の特質を闡明しつくすことは出来ない。何



故に王朝文學が女性的であるかを明かにしながら、王朝時代を概観して見ようと思ふ。

王朝時代の文學を觀ようといふものが、まづ忘れてはならないのは、王朝時代が和歌を先驅として復興し、和歌を基調として展開した時代であるといふことである。こゝに和歌の復興といふ意味は、『萬葉時代には百花爛漫と咲きほつた國風の花が、藤原氏の興隆と共に依然として隆運を致した詩文の勢に壓倒されて、まったく「色ごのみの家に埋木の人しれぬこと」なつて「まめなる所には花すゝき穂にいだすべきことにもあらず」なつたのであるが、この約百年の暗黒時代を隔て、「治きおほんうつくしみの波八洲の外まで流れ、廣きおほんめぐみの蔭、筑波山の麓よりもしげくおはしまして、よろづの政を聞き召すいとま、もろもろのことをすて給はぬあまりに、古へのことをも忘れじ、舊りにしことをもおこし給ふとて」遂に古今集が勅選されるまでに、ふたゝび國風の盛運を致した事實を指してゐるのである。

かういふ風にして復興した和歌が、どうして古今集と萬葉集との間に横はるやうな大きな溝梁を作るに至つたか。どうして眞淵をして萬葉集は丈夫の姿で、古今集はたをやめの姿であると言はしめるやうな相違が生れたか。眞淵は一にこれを環境の差異によつて説明しようとしてゐるのであるが、前にも言つたやうにそれだけの理由では説明し得られないのである。これは和歌復興の事情を明かにすることによつてのみ解決し得られる問題でなければならぬ。詳しくは本論に述べる機会があるから、こゝには簡単に、暗黒時代に於ける和歌の生活が、「色ごのみの家に埋木の人しれぬ」ことゝなつてゐたといふこと、すなはち婦女子の間に戀愛の媒介者として命脈を保つてゐたのであるといふことを言ふにとどめる。

もちろん眞淵のいふやうに、自然の環境が王朝文學の特質を支配してゐることは、見のがすことの出来ない問題であるが、王朝文學の展開が、和歌の復興を先驅として、婦女子の手によつて營まれたものであるといふことは、更に見のがしてはならぬ問題である。しかも眞淵は、萬葉集の歌が大陸文化の影響をうけてゐることを認めてゐたかも知れないが、極端に支那を排斥しようとした餘りに、これを肯定することが出来ないで、その雄渾壯大の風を、一に環境の支配に歸着せしめようとしてゐるのである。萬葉集が大陸の影響をうけてゐることは、その形態の上にも、思想上にも、歴々と指摘し得るところであるから、到底これを否定することは出来ない。萬葉集の歌が丈夫ぶりである所以を環境によつてのみ説明することが出来ないのは當然である。かくて王朝時代の文學が、和歌の復興を先驅として、婦女子の手によつて營まれ、展開して行つたといふ事實のうちには、王朝文學の特質を説明すべき重要な要素を包んでゐるのであるが、特に注意しなければならぬのはことに草假字の制作である。

萬葉時代には漢字の音訓を借りて自由に國語を寫し得るまでに發達してゐた。歌ばかりでなく、散文の上にも利用されて、すでに東鑑體、宣命體の文章を綴り得るまでに至つてゐたのである。このいはゆる萬葉假字が、草假字に發達して、自國の文字として自國の言葉を自由に記載し得るに至つたのは、暗黒時代に於ける和歌の生活が、婦女子の家に撫育され醗酵されてゐたからである。萬葉假名が婦女子の手によつて書き崩されたものが、すなはち草假名である。宇津保物語などに見える男手、女手といふ女手は、この書き崩された姿のものを指してゐるのである。貫之は土佐日記の冒頭に「男もすといふ日記といふものを、女もして見んとするなり」とかいてゐるが、漢文は男子専有の姿であつて、草假字をあやつり、假名文の世界に日本文學の天地を拓いたものが女子であつたことを、物語つてゐる



といふべきである。

草假名の流布とともに拮据な漢字の世界から解放されて、自由に自國の言葉を記載する便宜を得たことは、まことに日本文學を有利に展開し得た最も大きな原因であつて、和歌が純粹な日本の姿として王朝時代をかざるに至つたばかりでなく、やがてまた自國の文學として散文文學の出現をも容易ならしめた唯一の原因である。もちろん一般の思想界が、すでに道眞の和魂漢才の言葉に暗示されてゐるやうに、大陸文化の影響から離れて、日本精神に復歸しようとして、一ぱいにその風潮を孕んでゐたことは、草假名の弘通と相俟つて、和歌の復興や、散文文學の出現を助長したことを認めなければならないにしても、なほかつその主動力となつたものは草假名の制作と弘通でなければならぬ。かくて女性の手によつて拓かれた王朝時代の文學が、その用語に於ても、句法に於ても、女性の生活を反映して、優に艶なる世界を展開してゐるのであるが、王朝時代の文學を、女性の生活を中心として観るとき、一應は瞥見しなければならぬのは、その日常生活と佛敎の浸染とである。

王朝時代に於ける女性の日常生活は、その戀愛生活を明かにすれば王朝文學のうへに漂ふ情趣は、おほむねこれを明かにすることが出来るやうかと思ふ。もちろん清少納言が枕冊子に「おひさきなく、まめやかに、えせ幸見てゐたらむ人は、いぶせく、あなづらはしく思ひやられて、なほさりぬべからむ人の女などは、さしまじらはせ、世のなかの有様も見せならはさまほしう、内侍などにもしほしあらせばやとこそおほゆれ」といつて宮廷生活の華やかさを誇り、讚美してゐるやうに、婦女子の宮廷生活が、どんなに華かで、望ましいものであつたかは、想像にあまりあるところであるが、それとても、宮廷生活を背景として舞臺として演ぜられた、あはれな戀愛の、いかにも劇的な種々相があつたればこそである。男の戀のたはむれが、たとひ旅にすてゆくやうなはかない情であつたにしても、華やかな宮廷生活を背景として咲きいでゝは、あまりはかない花ながらも、ひと時の榮は美しくもまたあはれなものであつたにちがひない。薄暮の世界にほのかに明るく描き出された花であるかのやうにさへ思はれるのが王朝時代の戀愛生活である。

王朝時代には、女は文字通り深窓に育つて顔を見られるといふことがない。人に應對するにしても、常に扇で顔をかくしてゐる。男はたとひ人傳てにあそこにはかういふ娘があるといふことを聞くに過ぎない。男が思ひをよせるにしても、まつたく見ぬ戀である。さうして歌をおくる。歌をもらつたら返しをするのが禮儀になつてゐたので、必ず返歌をする。母親や女房が代つてする場合もいくらもある。これが度重つて遂に結婚するやうになる。結婚したといつても男が女のもとに通ふのである。女はどこまでも受身で、男の通つて來るのを専らに待つのみである。だから女は男に何時捨てられるか知れない。不安のうちにもたとひ男の愛の久しからむを祈るのみである。従つて女はあらゆる男の態度、言葉から、男の心を伺はうと努める。結婚前はもちろんのことである。

安倍清行が小野小町に

つゝめども袖にたまらぬ白玉は

人を見ぬ目のなみだなりけり

と言つてやると、小町は

おろかなるなみだぞ袖に玉はなす



われはせきあへずたぎつ瀬なれば

と返してゐる。あるひは敏行が業平の家にある女のもとへ

つれづれのながめにまさるなみだ川

袖のみぬれて逢ふよしもなし

と言つてやると、業平がその女に代つて

あさみこそ袖はひづらあなみだ川

身さへながるときかばたのまむ

と應酬してゐるなどは、どこまでも男の眞實を掴まなければゆるさなかつたことを物語つてゐるものである。だから男の眞實を確めるためには、あらゆる言葉の端にも、卑動にも注意する。王朝時代の女性が、針のやうな敏感さを持つてゐたのは、彼等が自らを守るために自然發達しなければならぬ武器であつたのである。かくてあだし男の袖の香にも、他に女のあることをかぎつける程であつたのは當然である。

さつきまつ花たちばなの香をかげば

むかしの人の袖のかぞする

といふ歌がある。香の合せ方が、人々の家によつて違つてゐて、それをまた家傳としてその家のみ傳へて他には絶対に秘してゐたから、敏感であつたら衣に薫きしめた香の匂ひによつて、直に誰とわかつたのである。あるかなきかに朝じめりの空に橘の花がさき匂つてゐる。その匂ひがぼんやり聯想を誘つて、何處かで経験した匂ひであること

を思ひおこす。何處かで逢つたことのある、人の袖の香である。ほのかな匂ひのうちに、遠い昔の人を想ひしのである。王朝文學の全面に漲つてゐる空氣は、彼等が戀愛生活によつて養はれたものゝあらゆる心持であると言へる。模糊としたものゝうちに、針の尖のやうに冴えたものがあり、秋の空のやうに澄んだものゝうちに、柔かく激蕩としてたなびいてゐるものが、すなはちそれである。

落窪物語に少將の君の母北の方が、

「二條殿に人すゑたりと聞くはまここか、さらば中納言殿には、などよかなりとはの給ふぞ」

と少將の君が二條殿に落窪の君をすゑながら、報復の下心から中納言の四の君に婚約を諾したこゝを少將の君になじると、少將の君は

「御消息きこえてと思ふ給へしかど、人も住み給はぬうちに、唯しばしと思ふ給へてなん。問はせ給へる中納言は中にもさいふと聞き侍りしかば、男は一人にてやは侍る、うち語らひても侍れかし」

と答へて笑つてゐる。母北の方はさらに

「いであなかく、人あまたもたるは敷き負ふなり、身も苦しげなり、な物し給ひ、その居ゑ給ひつらむに思しつかば、さてやみ給ひね、今とぶらひ聞えん」

といつてそれから落窪の君にいろいろ物をおくつたり、手紙の往復したりする。さうしてふたゝび少將の君に

「この人よげに物し給ふあり。御文かき、手つき、いとをかしかんめり。誰がむすめぞ、これにてさだまり給ひね、女子もたれば、人のおぼさんこもいとほしう心苦しうなんおほゆる」



と人の上も同情されて多妻をいましめると、少將の君は笑つて、

「これもよも忘れ侍らじ、またもゆかしう侍り」

と答へる。母北方は

「いかでか、けしからず、更に思ひ聞ゆまじき御心なめり」

とやさしく叱つてゐるところがあつた。これによると少將の君は、男がいくたりかの女を持つことを、自分の母の前で恥としないばかりか、むしろ公然と主張してゐるのである。母北方さへたゞ「人あまた持たるは歡き負ふなり、身も苦しげなり」といふ理由によつて、あるひは「女子もたれば、人のおほさんことも、いとほしう苦しうなむおほゆる」と自分の身につまされるからさういふより外に、多妻をいましめる理由がなかつたのである。これによつても、王朝時代に多妻が道徳的に認められてゐた事實を伺ふことが出来るのである。だから女は、男が女から女に轉々移つてゆくのが、不安でたまらない。いつ捨てられるかも知れない。たゞ親のもとにあつて、男の通つて来てくれるのを、ひたすらまつてゐるのみなのである。和泉式部のやうに戀人と車で出あるいて得々としてゐるのなどは、まったく例外といつてよい。戀をいのちとしてゐる女の生活が、かういふ男を相手にしてゐては、男の心が葛の葉のやうにうらがへり易いのを歎き、もみぢのいろのひとときでうつりやすきをかこち、または

なかにらむ心もしらす黒髪の

みだれてけさはものをこそおもへ

とか

あまのかる藻にすむ虫のわれからと

ねをこそなかも世をばうらみじ

といふやうに身も世もあらぬ歎きをしたり、

秋風にあふたのみこそかなしけれ

わが身むなしくなりぬと思へば

と悲しみの底に辛い涙の盃を掬んでは

あしびきの山のまにまにかくれなむ

うき世のなかはあるにかひなし

と、この世のなか々、たゞはかないものに思ひなされるは當然である。またはあらゆる男の心が

ふる里にあらぬものからわがために

人のこゝろのあれに見ゆらむ

といふやうに親しめなくなるのも止むを得なかつたであらう。かくて世のながはかなく憂いものに思はれては、頼るものとはたゞ佛の手があるのみである。源氏物語にも、女が男の無情をいかつて、その腹いせに出家をすることが、簾木の巻にかいてある。出家しないでも、自分の力によつて、自分の運命を拓いてゆくことが出来ない境遇にあつては、頼まるゝものはたゞ佛である。他力にすがるより外に道がないからである。もちろん王朝時代の佛敎が、いかに彼等の生活と深い交渉をもつてゐたかを考察する視點は他にもある。それは今までに幾人かの人によつてくりか



へされてゐるからこゝにいふ必要もなからう。

かうして佛敎的の空氣がしだいに濃く彼等の生活を包んだために、彼等の感情生活はいやがうへにもあはれに幽玄な世界を拓くに至つたのである。王朝文學がたゞ貴族の享樂的の氣持から生れたとするものは、その表皮をかすめた觀察にすぎない。あかるく華やかな空氣のうちにつゞまれた、重苦しい、陰鬱な情趣や、あはれに深いセンチメンタリズム、あるひは、悲しくもすみわたる笛の音よりも細い清澄さは、享樂のうちにつゞまれた、底知れぬ深い人間の魂が生んだ感情でなければならぬ。むしろ享樂のうちに包まれた惱ましさが、佛敎的の氣持と抱きあつて、そこから醗酵された感情であると言つた方が、あるひは適切であるかも知れぬ。

和歌を先驅として日本の目覺めた王朝時代の文學は、かくて婦女子の手によつて營まれながら、百花燦爛とさき飛つて、わが國文學史上に偉觀を呈してゐるのである。

## 本論

### 第一章 王朝文學の胎生

#### 第一節 和歌の暗黒時代とその復興

萬葉集の絢爛は、あたかも錦繡を織りなせるやうである。奈良朝時代のあらゆる文化が、大陸の影響をうけて一般に輪奐の壯大なるはいふまでもないが、萬葉集の歌が雄渾壯大の風あるは、ひとしくこれを大陸の風をうつしたものと解釋してよいのである。支那の文物が輸入されるとともに覺醒して來た國家的精神は、修史の事業としてまづ現は

れて來たのであるが、この機運は我國の古い文化に對する興味を刺戟するとともに、文藝の價值が認められて來た。復古の精神が盛んになつて來た事實は、萬葉集卷六にある

天平六年冬十二月十二日歌儔所之諸王臣子等、集葛井連廣成家宴歌二首

比來古儔盛興古歲漸晚、理宜共盡古情、同唱此歌、故擬此趣、願獻古典二節、風流意氣之士、儻有此集之中、爭發念力、心和古體、

といふ文章によつても明かに察することが出来る。かうして古い歌謠が省みられるやうになつたのは、一方にいかに文藝の價值が認められるやうになつたかを物語つてゐる。かくて大陸の文化によつて文藝の價值を教へられ、歌人が歌人として認められるとともに、大陸の影響は萬葉時代の歌人のあらゆる方面に現はれて、こゝに歌は長足の發達をするに至つたのである。長歌の形態の發達について言へば、長歌の終りに必ず短歌を添へることは、支那の賦の形を模倣したものである。賦の終りに添へられる反辭を學んだのがすなはち反歌である。長歌が對句を連ねてゆくことは、詩に於ける技巧を學んでゐることもまた明かである。文鏡秘府論の論對に、

文詞研麗良由對囑之能、筆札雄通寔安施之巧、若害不對語必徒申、云々  
といつたり

或曰、夫爲文章詩賦、皆須屬對、不得令有跛眇者云々  
と説き

跛者、謂前句双聲後句直語或復空談



と論じて對句を成さないものを直語、あるひは空談といつてゐるほど對句を重んじてゐたことから考へても、詩賦に  
 いかに対句が重大な役目をもつてゐたか、察せられる。従つてその詩賦によつて發達した萬葉集の長歌がこの影響を  
 受けない筈はない。かういふ風に詩文の影響に導かれて發達した萬葉集の歌が、大陸の風をそなへてゐるのは當然の  
 勢と言はなければならぬ。眞淵が萬葉の歌は、丈夫ぶりであると言つたのは、この大陸風の雄渾壯大な姿を指して  
 ゐたのであらうと思はれる。しかしさしも咲き誇つた萬葉の歌も、天平寶字三年をもつてまったく消息を斷つてしま  
 った。鬱勃として詩文が興隆して來たからである。この機運が約百年の間つゞいたことは序説に少しのべたが、この  
 暗黒時代を明かにすることは、王朝文學の母胎を明かにする所以でもあるから、やゝ詳しく述べて見たいと思ふ。

●普通の文學史には、萬葉を終つて古今集の生れるまでの間を日本文學史の暗黒時代と言はれてゐる。この暗黒時代  
 の歌の生活、言ひかへれば萬葉集と古今集との間にはいかなる連續があるか。はたして暗黒時代と稱せられるやう  
 に、和歌の生活が斷たれてしまつたかどうか。萬葉集の終りから古今集にいたる百數十年間、まったく和歌の生活が  
 斷絶してしまつたものとは考へられない。これはかなり精細に觀察して見なければならぬ問題である。そも／＼暗  
 黒とはどういふことを意味してゐるか、古今集の序文に

いまの世のなかいろにつき、人の心花になりけるより、あだなる歌はかなき詞のみいでくれば、色好みの家に  
 埋木の人知れぬこととなりて、まめなるところには花薄ほにいだすべきことにもあらずなりたり  
 といひ、さらにをばりに

そのはじめを思へばかゝるべくなむあらぬ。古の代々の帝春の花のあした秋の月の夜ごととにさむらふ人を召して

ことにつけて歌をたてまつらしめ給ふ

といつてある。これによつて暗黒を意を明かにすることが出来ると思へるのである。

萬葉集を見ると、事にふれて天子の御前で歌を詠み、何かの宴會と言へば歌を詠み合つてゐる。しかしながら人心  
 が浮華にながれ、質實さを失つては、これが歌に反映して、うつり氣な不眞面目なものになるは當然である。さうして  
 また色このみの家に埋木の人しれぬことに推移してゆく経路である。かくて色このみの家に姿をかくし、戀愛の世界  
 にたて籠つて、眞面目な場所、公の席には顔を出さなくなつたのである。貫之の言葉はかういふ風に解釋できるのであ  
 る。したがつてまた戀愛の世界に、たゞ戀愛の媒介をすることが歌の唯一の使命となつたといふことが、暗黒といふ  
 ことになるのである。しかしながら人心がうつり氣になつたといふことが色好みの家に姿をかくした原因であるとい  
 ふのではない。公の席、眞面目な世界から歌が却けられたのは、はかなき詞が出て來たからである。言ひかへれば和  
 歌が詩文に壓倒されたからである。公の席が詩文に蔽はれてしまつたからである。かうして和歌は仕方なしに戀愛の  
 世界に立て籠らなければならぬ運命に陥つたのである。すなはち和歌の暗黒時代は和歌が公の席からしりぞいた時  
 代である。暗黒といふ意味をかういふ風に解釋して歴史を見ると、和歌が暗黒だつた時期はよほど短くなるのであ  
 る。

しかしながら、萬葉集より古今集までは、政史の上にあられた片鱗によつて和歌の生活、推移を想像するより外手  
 がかりとなるものがないのである。歴史によつて何ふに、桓武帝は歌を好まれたやうである。歴史のうへに、宴席で  
 歌はれた桓武天皇の御歌が數首のこつてゐる。宴席で歌を詠むことは、萬葉集の頃は盛に行はれた。萬葉時代には各



自が歌を詠むばかりでなく、古歌をうたつたり、これに和した歌を作つて楽しんだことも度々見えてゐる。桓武天皇もまたさういふことを遊ばされたのである。歴史によると延暦十四年四月十一日

いにしへの野なかふるみちあらためば

あらたまらむや野なかふる路

といふ古歌をよまれて、内侍のかみ從三位百濟王明信に、これに和する歌を詠めと勅あつたが、明信が出来ないので、天皇御みづから

きみこそは忘れたるらめにぎ玉の

たをやめわれはつねのしら玉

と御代作になつたことが見えてゐる。

これによつて見ると、歌の風がまつたく萬葉調であつて、少しもかはつてゐない。従つて桓武天皇時代はまだ萬葉の繼續と見られるのである。

平城天皇は桓武天皇ほど歌を好まなかつたやうである。歴史によれば、政治上の改革に努力せられた様子で、身體がお弱く、政治に没頭されたため、歌をよまれる御閑暇もなかつたのではないかと想像される。しかしながら、天皇が神泉苑に行幸されて皇太子嵯峨帝と唱和されたり、臣下から歌を奉らせられたことが見えてゐるから、和歌はまだ色好の家にかくれてはゐない。この平城天皇の御代に古語拾遺や大同類聚方が編纂されたことは、時代の思潮がどういふ風に動いてゐたかを知るに足るものである。

古語拾遺は大同二年忌部廣成に命じて奉らせられたものである。その序文によると、近代は一般に調子が浮つて我國の歴史古實を忘れ、たゞ新にのみ走る傾向を憤慨してゐるのである。廣成が不平の人である爲、あるひは藤原氏に對する不滿不平がかゝる言をなさしめてゐるのかも考へられるが、しかし時代の真相にふれたものと見られるのである。忌部の家は中臣の家と共に神に仕へる家で、祭政一致のわが國に於ては同様に政にあづかる家である。中臣氏が鎌足以來勢力を得たために、忌部氏は壓倒されて不滿々たるものがあつたことは、察するにたかくないところである。この忌部廣成に命ぜられて、古語拾遺を奉らしめられたのは、そこにおのづから深い事情がなければならぬ。天皇には、藤原氏があまり新氣分を煽りたてるのを喜び給はず、あまり支那にかぶれすぎて、我國の根本を忘れようとするやうな新思潮に對して、御憂慮のあまりに出た御企ではなかつたかと考へられるのである。

大同類聚方が編纂されたのは大同三年である。これは今傳はつてゐないから内容を詳にすることが出来ないが（今あるものは後世の模作である。）その上奏文が日本後記のなかに見えてゐる。それによるとこの大同類聚方は、我國固有の醫藥の方をかいいたものらしい。當時支那の文物が輸入されると共に、醫藥の方なども盛にはいつて來たものであらう。どんなものでも支那風でなければならぬといふやうな當時の風を想像することが出来る。かくてかういふ時流に反抗し、國粹の亡びてゆくのを保存しようといふ考から、漢方に對する和方が大同類聚方として編纂されたのである。極端に支那模倣、支那かぶれに對してかういふ國粹運動が起された根源が平城天皇の御憂慮にあつたとすれば詩文に對して和歌を保存しようといふ努力がなかつた筈はない。しかるに御在世はづかに四年で退かれたことは惜しき極みである。長く御位にあつたとすれば、和歌の運命は餘程ちがつてゐたらうと想像される。次の支那すきの嵯峨



天皇に至つて和歌の暗黒時代は初まるのである。

嵯峨天皇は御父桓武帝の和歌すきの御血を承け繼がせられて和歌の修養も相當におありなされた。平城天皇と唱和されたことは前にも述べたが、弘仁四年四月皇太弟淳和天皇の邸に行幸あらせられて右大臣藤原園人と唱和されたことが見えてゐる。御讓位後、天長七年正月良岑安世の死に對して追悼された歌二首も見えてゐる。かういふ風に和歌に對する御趣味も深かつたのであるが、和歌よりも詩に一層御堪能であらせられたことは今更いふまでもなからう。淳和帝に至つては和歌を詠まれたといふ事實が歴史に見えない。たゞ詩賦のみが隨所に散見するだけである。この方は御年も若く、桓武天皇の影響をうけることも少なかつたのだらうと思はれる。この二帝は御歴代中殊に詩文を好まれた方であつて、この御代に詩集の多く出てゐることは他に類例を見ない。

凌雲集 延暦元年より弘仁五年までの作者二十三人九十首を集む

文華秀麗集 凌雲集にもれたる當時の作者二十六人百四十八首を集む

經國集 一部分のみ傳はつて全部傳はらず、目錄によりて全體の姿を推察するに、いかに彪大なりしか想像にあまりあり。慶雲四年より天長五年まで、五十八年間の作、賦十七首、詩九百十七首、序五十一編、對作三十八編、作者百七十八人なり。

文華秀麗集は現代作者、凌雲集は當時生存してゐる作者のみを、經國集は作者を観察することは出来ないが、前の二集から考へて、やはり現代の作者を集めたものと思はれる。淳和天皇の御代にこの大部の詩集が編纂されるほど材料の多かつたことを考へると、どんなに詩文が盛んだつたかは想像にあまりあるものである。

かくて和歌はまつたく公の席を退いてしまつた。和歌の暗黒時代は嵯峨天皇の御代にはじまり、淳和天皇の御代にいたつてその絶頂に達したものと考へられるのである。

仁明文徳二朝はこの情態を持続して、和歌復興の曙光がやうやく見え初めたのは清和天皇の御代である。もつとも、僧正遍昭、文屋康秀、安倍清行、小野貞樹、小野小町等といふ人達が生存してゐたのは仁明天皇のころから光孝天皇の頃へかけてであるし、小野篁が隱岐へ流されて

和田原やそ島かけてこぎいでぬと

人にはつげよあまのつり舟

と詠んだのが仁明天皇の承和五年であるとすれば、復活の曙光とまでは行かないまでも、すでに復活の黎明は動いてゐたと見なければならぬが、とにかく史實によれば、復活の曙光のさしそめたのは清和天皇の御代でなければならぬのである。

清和天皇の貞觀十一年に編纂された續日本後記のうちに、興福寺の僧が、仁明帝の四十歳になられたのを賀して、長歌を奉つたことが見えてゐる。その奥に

季世凌遲、斯道已墜、今在僧中、頗存古語、可謂禮失者則求之於野、故探而載之、

といふ文句があり、その長歌全部を載せてゐる。斯道といふのはもちろん長歌のことであらう。長歌に對する追慕の情が動いてゐるのを見のがすわけにはゆかない。

古今集のうちに清和天皇が、萬葉集の出來た時代を問はせられたのに對して、文屋有季が、



かみな月しぐれふりおけるならの葉の

名におふ宮のふることぞこれ

と歌をもつてお答へ申上げてゐる。また古今集中に、貞観の御時に綾綺殿の前に櫻の木があつて、西の方の枝が紅葉しかけたのを、殿上に出仕してゐる人達が詠んだ序に、藤原勝臣が

おなじ枝をわきて木の葉のうつろふは

西こそ秋のはじめなりけり

と詠んでゐる。宮中で歌を詠むことが、奈良朝時代とまったく同じになつてゐることが知られるのである。上の好むところは下これにならふ例で、清和天皇が和歌を好まされたことが動機となつて、やうやく動かうとしてゐた和歌復興の氣運は俄然として勢を得て來たものらしい。しかも復興の歩みは早くすでに陽成天皇の御代には歌合が行はれるまでに至つてゐる。歌合のはじまりは何時からかは知れないが、今日最古のものとせられてゐるのは在民部卿家歌合である。在民部卿行平が、民部卿になつたのは元慶八年三月で、四年の間を置いて仁和三年四月致仕、寛平五年七月七十六歳で薨じてゐるから、たとひ民部卿の時代でなかつたにしても、凡そこの歌合の時期は知られるのである。鎌倉時代のはじめに、顯昭が、歌合のはじまりは在民部卿家歌合であると言つてゐるから、これより早いとは思はれない。かういふ風に短い間に歌合をするまでになつたことを思へば、復興がいかにか早かつたか知られるのである。

竹取物語、伊勢物語の出來たのもこの時である。これ等の作をよほど古く考へてゐる人もあるやうであるが、竹取物語が今日の姿となつたのは、醍醐天皇后と考へられる。伊勢物語は古今集以後に出來たといふ説もないわけではないが、その骨子となつたものは業平の日記であること明かである。従つて當時の作と言ふことができるのである。かういふ風に和歌ばかりでなく、散文まで出來るほどの勢であつて、當時國語に對する憧憬が、いかに強いものであつたかを想像できるのである。この時代はたゞに文學の方面ばかりでなく、あらゆる方面に復興の氣運の見えた時代である。

この復興の氣運をことに速かに運び、完成するに都合がよかつたものとして注意すべきは、寛平六年菅原道眞の献策によつて三百年以上もつゞいた遣唐使が中止されたことである。これは、**支**那に内亂があつたり、他にいろんな事情もあつたことであらうが、第一支那に對する憧憬がさめたからであると思へられる。この時代の精神を物語るとも思はれる和魂漢才といふことが、よしや道眞によつて唱へられたことでないにしても、道眞の詩が和臭に富んでゐるところから考へると、道眞でもなければ言ひ出さうもない事である。いつの時代にあつても時代の寵兒は時代を代表してゐるものとすれば、この國粹氣分の權化が道眞であると見られないことは無い。とにかく遣唐使の中止が道眞の献策によつて行はれ、しかもそれが國粹尊重の氣運を煽つて復興への歩みを速かならしめたことは注意すべきである。

この頃とて支那を排斥したわけではない。詩文は依然として男子の間に尊重せられてはゐたのである。たゞ國風がより以上に尊重され、詩文と並んで愛用されるに至つたまでである。忘れられた國風が意識に上つたまでである。和歌はかくして復興したのである。桓武、平城、嵯峨三帝のころには、用語はもちろん、その姿、その調子、すべてが



萬葉集時代であつた歌は、暗黒時代を経て六歌仙の頃には、全く古今集的のものとなつた、約四十年間を色好みの家に埋れ、生活してゐる間に、歌風が自然變つてしまつたのである。言ひかへれば詩文の觀賞の出来ない女の世界をいのもとし、戀愛の媒介者として生活してゐる間に、和歌がおのづから女性的になつたのである。かくて復興の和歌がその用語を女のものに學び、調子が女性的となり、眞淵をして「男の國より女の國へ」と言はしめるやうにもなつたのである。

## 第二節 假名の創生

こゝにいふ假名はもちろん草假名のことである。簡単に言へば、假名の創生もまた和歌復興とその事情を一にしてゐるのであつて、前節に述べて來たことのように、當然説明せられるべきであるが、便宜上これを分けて説明しようと思ふのである。

萬葉集時代には漢字の音調を借りて國語を寫してゐた。いはゆる「假字」である。「かな」とは、國語を寫すために用ひられた漢字の謂である。國語を寫すためにその音調が借用せられるだけで、漢字が表はしてゐる漢字の意味は全然顧みられないのである例へば霜といふ字は、露、霜などいふ霜といふ漢字本來の意があるから、さういふ意味に使はれるが、

吾大玉者君之隨所 聞 賜而 刺竹乃大宮此跡定異等霜

わが大ぎみは君のまにきこし給ひてさすたけの大宮こゝと定めけらしも

といふ歌に於ては、けらしともを異等霜で表はしてゐるので、このうちのしとも、いふ音を寫すためにたゞ霜が假り

られてゐるのである。鴨いふ字が咏歌の<sup>か</sup>もを表はすために假りられ、兼が過去の推量けむを、あるひは稱が假定條件を表はす助詞ともを表はすために用ひられてゐる例など枚擧に遑がない。しかしこれは二音を表はすために假りられた漢字であるが、一音を表はすために假りたものは更に多い。これが「假字」であつて「かな」である。いはゆる萬葉假字である。萬葉假名といふ名前は後の草假名、片假名と區別するために、しかも萬葉の歌がかういふ方法でかゝれてゐるからつけられた名前であるに過ぎないのである。この萬葉假字が、(一音一字のものが)草體に書き崩され書き崩されて、殆んど原形とは似もつかない體になつたのが平假名である。弘法大師が作つたといふのは俗説で、決して一人の手によつて出來たものではないのである。

この假字あるひは平假字はどうして生れたか。古く假名のこゝを女文字さいひ、漢字のこゝを男文字といつてゐるのは、假名がいかにして作られたかを物語つてゐるのである。しかしこれには、少し説明を要する。

平假名はもと女文字、女手といつてゐた。草假名といふ名も枕冊子に見えてゐるから、これも古い名ではあるが、女文字、女手といつたのがはじめのやうである。土佐日記や宇津保物語のやうな古い物語に見えてゐるのは、みなこの女文字女手である。平假名といふ名稱は徳川時代になつてからの名で、古くは平假名とよんだ形跡はないのである。この女文字、あるひは女手といふ名稱は、使用した人を暗示してゐるものであり、草假名といふはその發達を暗に物語つてゐるとも言ひ得るのである。しかし土佐日記に安倍仲磨が唐で

あをうな原ふりさけ見ればかすがなる

三笠の山にいでし月かな



といふ歌を詠んだことをかいて

かの國人聞きしるまじくおぼえたれど、ことの心を男文字にさまを書き出して、こゝの詞つたへたる人に言ひし  
らせければ、こゝろをや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむ愛でける。

と書いてゐる。この男文字はもちろん漢字のことを指してゐる。かく男文字といふ名があつたとすれば、それに対し  
て女文字といふ名があつた筈である。さうしてしかも漢字に對して平假名を呼んだ名でなければならぬことも明か  
である。それでは平假名をどうして女文字といつたのであらう。これは平假字が専ら女に使はれたからであるが、何  
故に平假名が女に専用されるやうになつたかといふに、當時女はある迷信から漢文には手を觸れしめなかつた爲、自  
然假名をもつて綴られた國文の世界にとちこめられなければならなかつたからである。しかし支那すきの嵯峨天皇の  
王女有智子内親王が、御父嵯峨天皇の御血を承けられて詩文に堪能であらせられたことは有名であるが、かういふ風  
に例外はもちろん認めなければならぬにしても、當時和歌が戀の使者として男女間を往復し、假名文の消息がとり  
かはされてゐたとすれば、男とても女に言ひ送る消息文は、假名でなければならぬ筈である。落窪物語を見ても男  
女間にとりかはされた消息文が、いかに頻繁に行はれたかを想像出来よう。かういふ風に男子が假名を用ふるといふ  
のも女の世界を舞臺とすればこそである。して見れば平假名をもつて女文字といふ資格は十分であるのである。女文字  
を女手といつてゐることは、宇津保物語や源氏物語に見えてゐるが、一歩進んで見るに平假名全部を女手と言つてゐ  
るのではないやうである。これについて少し考察して見るに、宇津保物語の國讓の巻に

かゝる程に右大將殿よりとて、手本四卷いろいろの色紙にかきて、きはみたる色紙にかきて山吹につけたるは、

しの(眞の)手はるの詩、青き色紙にかきて松につけたるはさう(草)にて夏の詩、赤き色紙にかきて卯の花につけ  
たるは假名、はじめに男にてもあらず女にてもあらず天地、その次男手はなちかきに書きて、同じ文字をさまざま  
まにかへて書けり

といふ文章がある。この文章にあらはれたる假名は二種類あるわけである。すなはち男にてもあらず女にてもあらず  
るものと、男手のものとの二種である。しかし當時男手と、女手と、そのいづれにもあらずるものと三種なければ、  
かういふ文章は出来ないわけである。

男手といふのに就いて考へるに、土佐日記にある男文字とは全然内容を異にしてゐる。土佐日記の男文字は、支那  
人のために用ひられたものであるから、漢字漢文でなければならぬ筈である。しかるに宇津保物語にかゝれてゐる  
男手といふのは假名の一種と考へられるのであるが、男といふ文字の用例から漢字そのままの姿をした文字と思はれ  
る。従つてこの男手といつてゐる文字は、萬葉假名でなければならぬ。伴信友も矢張り同じやうに解釋してゐる。  
「男手はなちかきにかきて」とあるのは、つゞけ書きでないものをいつてゐるのである。「男にてもあらず、女にても  
あらぬ手といふのは、前に言つた男手といふのが、完全に漢字の姿をしてゐるものとすれば、これは完全に漢字の  
姿をしてゐないものと解釋せられる。信友はこれを、行の體を指して言つてゐると解釋してゐるが、余もまた同様に  
考へたいと思ふのである。現存中の筆跡にこれを求むれば、秋萩帖の書體がこれに該當するやうに思はれるのであ  
る。詳しく言へば、眞草の間の書體ではあるが、行の體とは言へず行書以上に崩れたものである。であるから漢字の  
眞よりは草であり、假名より言へば行書といふことが出来る程度のものである。



つぎに女手について考へて見るに、これは假名のうち、右二種類以外の草書を指してゐるものと思はれる。すなはち源氏物語にある女手といふのは、今日の平假名に相當するものと呼んでゐたものと思はれるのであるが、土佐日記の女手といふのは、假名を總稱してゐること明かである。しかるに宇津保物語の女手といふのは、假名のうちの草書であつたと解釋しなければならぬやうである。かくて宇津保物語時代には片假名は別として、假名に三體があつたと考へなければならぬし、また男文字、女文字の使ひ方に二通りあつたと考へなければならぬのである。王朝時代に書かれた最古のものは、北白川家に傳へられてゐる、貞觀九年二月十六日に書かれたといふ、讃岐國の戸籍謄本である。これは清和天皇の御代で、國民精神覺醒の第一期である。この文書のなかに、大屬有年といふ人の書き添へが假名でかゝれてゐる。この書添を宇津保物語の三體にあてゝ考へて見るのに、行の部に屬すべきものゝやうに考へられる。女手といふよりも漢字本來の姿に近いからである。これを見たゞけでも、この時代にはまだ女手までには發達してゐなかつたといふことが想像せられるのである。しかしかやうにたゞひとつの材料によつて、これを斷言することは出来ない、なぜといへば、婦人は男子よりもむしろ大膽に書き崩してゐたらうと考へられるからである。女は漢字を漢字としてから機會がなかつたのであるから、それだけに漢字としてもとの字割に拘泥したり、顧慮したりする必要が無い。したがつて漢字のもとの姿を忘れ、その字割に拘泥することなしに、假名として、自分の趣味にまかせて、自由に大膽にかいたらうと想像せられるのである。男子は反對に漢字を漢字として書く機會が多かつたのであるから、自然もとの字に掣肘せられて、大膽に崩すことは出来なかつたのではないかと考へられる。であるから女手の完成者は女であつたと考へるのである。

貫之自筆と稱する土佐日記があつて、それを定家が影寫したと傳へられてゐるものがある。定家が見たといふ元本が、はたして貫之の自筆かどうか、今日から確めることは出来ないが、臨模せられたものゝ一部の假名遣から見ると、貫之時代のものではないと否定する理由は無いのであつて、書體は女手に屬するものである。今日傳はつてゐる古筆のうちには貫之筆と稱せられる女手のものが多い。高野切といふのがそれである。この高野切には三種あつて、文字としては品格の高い立派なものであるが、假名遣のうへから見ると、貫之時代のものといふことは出来ない。貫之筆と稱せられるものゝうちで、假名遣のうへから貫之時代までさかのぼることの出来るものは、寸松庵色紙だけである。もつともこのうち

ほとゞぎすながなく里のあまたあれば

なほうとまれぬ思ふものから

といふ歌の、なほが、なをになつてゐる。これは後に入墨の際まぢがつて、ををとしたことが明かになつてゐるから、寸松庵色紙には假字遣のまぢがひは無いことになるのである。これは字體も非常に古雅である。しかしこれ等の傳へが貫之のものかどうか、今日から適確に確かめ得ることは出来ない。たゞ假字遣のうへから、貫之時代のものかどうかを確かめることが出来るだけなのである。すくなくとも、それだけに満足してをらなければならぬ現状である。

繪に於て寫生派を完成した巨勢金岡は、清和天皇から五代に仕へた人であつて、國風の復興期から完成期まで生きてゐた人である。この畫風がどこまで獨立したものかはわからないが、當時の思想から考へて、この傳へはある程度



まで信じていゝかと思ふ。文字に於てもこの時代に於て、支那傳來の草書から一步進めて、女手とよばれた國字にまで發達してゐたといふことは、まことにあり得べきことである。だから宇津保物語の出來た時代よりも五六十年前に、女文字として女手が發達してゐたと考へられる事情は十分あるのである。

かういふ風にして平假名が發達したのであるが、この平假名の出現が、王朝文學の展開を滑かにしたのである。平假名と王朝文學との關係は、どうしても離るべからざる關係にあると言はなければならぬ。すなはち草假名の創始者、使用者が女であつたといふことを思へば、この文字とその書いた人との間に、用語の上に於て、當然關係がなければならぬ筈である。かくして、前にも言つたやうに、眞淵が新學のなかで言つてゐる「山城の國はますらををもたをやめの姿」になつたと言ふのには深い意味があることになるのである。

男性的で、線の太い、雄渾な、萬葉集の歌が、暗黒時代を離れて、まつたく女性的で線の細い、巧麗な姿に豹變してしまつたといふことは、暗黒時代に於いて歌を甦育したものが、女性であつたといふことを認めなければ、説明することは出來ないのである。歌の上に於いてかういふ事實が認められるとすれば、散文のうへにおいても、同じ事實を念頭に置いて考察の歩を進めなければならぬ筈である。

土佐日記の「男のすなる日記といふものを女もして見んとするなり」といふ書出しによつて、土佐日記は明かに女として書かれてゐるものであることは言ふまでもない。しかもかうして女として書かれた土佐日記は、女の用語をもつて書かれた筈でもある。土佐日記にかぎらず、女手がかゝれた文學は、少くとも初めの時代は、土佐日記の作者が學んだ同じ道を歩まうとしてゐたであらうと考へられる。

王朝時代の傑作が、大抵女の手になつてゐることも、その用語が女のものであつたと考へることによつて、説明し易くなるのである。女のもものは女によつて成し遂げられるものであると考へられるからである。かういふわけで、王朝文學の語脈はどうしても女の語脈でなければならぬのである。もつと言ひ換へれば女官を中心とした宮廷生活の用語が、すなはち王朝文學の用語と考へられる。たとひ、作者が男子であつたとしても——文學といふものはどうしても歴史の力にひかれ易いものであるから、かういふ歴史の力にひかれて、洗練されきつた女の用語で筆が運ばれてゐる筈である。すくなくとも女を念頭に置いて筆は運ばれたらうと想像出來るのである。野守鏡に藤原保昌が、歌をうらやんで

早朝におきてぞ見つる梅の花を

夜陰大風不審不審よ

と詠んだところが、和泉式部がこれをきいて、歌の詞はかういふ風に詠むものだと言つて

朝まだきおきてぞ見つる梅の花

夜のまの風のうしろめたさに

と和けたが、同じ心を歌つた歌とも思はれないほど、おもしろく聞えるやうになつたといふやうな話がある。この話の眞偽は別として物語の用語が女を中心としたものであつたといふことの傍證にもならうかと思ふのである。むしろ、暗黒時代に女の間にはぐゝまれ、育てられた平假名の發達と直接な關係のもとに和歌が完全に、女性のものとなり、女性<sup>の</sup>姿となつて、それが和歌<sup>の</sup>本來の姿と考へられるまでになつたことを物語つてゐるとも言へるのである。



### 第三節 散文の母胎とその展開

二八

暗黒時代に、和歌が女の世界、戀の世界に立て籠つて、戀愛の媒介者として飛びまはりかけまはつて、その使命をはたすのに、あくせくとしてゐたことが、やがて古今集時代に、たをやめの姿として、巧緻な艶にやさしい装を凝らして出現して來たのであるが、この古今集時代を作り出した同じ作者が、同じ戀の世界にあつてとりかはした戀の消息文は、やがてまた王朝文學の母胎となつたのであると考へても、さまで無理とは思はれない。

もつとも散文の母胎として考へられる二つの源泉がある。ひとつはこの消息文の展開であり、ひとつは和歌の詞書の伸張である。

女子の手によつて育まれた和歌は、國風復興の魁となつたのであるが、國風復興の機運とともに、文學界に於ける和歌の地位が自ら高まり、それまで詩文に壓倒されて、日かげものゝやうな状態にあつた和歌の價値も、十分認められるやうになつたことは前にも述べた。かうして和歌がさしも隆運を極めた詩文と、肩を並べるやうになつた時代に、伊勢物語のやうなものが、最初の散文文學として表はれるのは、當然の成ゆきと考へられる。和歌のはしがきそのまま展開せられて、散文文學の母胎となつたといふことは、自然の順序であるからである。伊勢物語はまつたく和歌の詞書の延長と考へられるのである。

昔男ありけり。懸想じける女のもとに、鹿尾菜といふものをやるとて  
おもひあらば葎のやどに寝もしなむひじきものには

袖をしつゝも

二條後の、まだ帝にも仕うまつり給はで、たゞ人にておはしける時のことなり。

昔男ありけり、京にありわびて、東にいきけるに、伊勢尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいと白くたつを見て  
いとゞしく過ぎゆくかたの戀しきにうらやましくも  
かへる浪かな  
となむ詠めりける。

昔男ありけり。京や住みうかりけむ。東のかたに行きて、すみどころもとむとて、友とする人、一人二人してゆき  
けり、信濃の國、淺間の嶽に、煙のたつを見て

信濃なる淺間のたけに立つけぶりをちこちびとの見  
やはとがめぬ

かういふ風に短いものももちろんのこと、

昔東の五條に、大后宮のおはしましける。西の對にすむ人ありけり。それを本意にはあらで、志ふかゝりける人行  
きとぶらひけるを、正月十日ばかりの程に、ほかに隠れにけり。あり所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざ  
りければ、なほ憂しと思ひつゝなむありける。又年の年の正月に、梅の花盛に、去年を戀ひて、いつきて、立ちて



み居てみれど、去年に似るべくもあらず。うち泣きてあばらなる板じきに、月の傾くまでふせりて、去年を思ひいでよめる。

月やあらぬ春やむかしのほるならぬ我が身ひとつは  
もとの身にして

とよみて、夜のほのぼの明くるに、泣く／＼歸りにけり。

といふやうにやゝ長いもの、更に一層長く優に一篇の短篇小説と見られる程のものに至るまで、要するに歌の詞書の延長である。すくなくとも歌の詞書によつて構成せられた一種の短篇なのである。

王朝時代における散文の世界は、かういふ風に歌の詞書から次第に發展してゐるのであるが、前にも述べたやうに、一方に國風の暗黒時代にあつて男女の間に往復された戀の消息文が、王朝文學の展開に、いかに重要な役目をつとめてゐたかといふこゝを見のがすわけにはゆかない。國風の暗黒時代に、和歌が女を中心とした世界にあつて戀の飛脚をつとめてゐたやうに、假字の消息文が、常に女の世界に交換されたばかりでなくて、ことに男女の間に立つて、重大な戀の使命をはたしてゐたのである。だからその消息文は、重大な戀の使命をはたすために、十分洗練せられてゐた筈である。すくなくとも、長い間この使命を負つて、女を中心とした世界に活躍してゐるうちには、十分洗練に洗練を重ねられなければならない。枕冊子に清少納言が、

わろきものは、詞の文字あやしう使ひたるこそあれ。たゞ文字ひとつに、あやしうも、あてにもいやしくもなるはいかなるにかあらむ。まして文をかきては言ふべきにもあらず。物語こそ惡しう書きなどすれば、言ひかひなく、

つくり人さへいとはしけれ。

と詞のつかひさまについて、非常に深い、こまかな注意と反省を語つてゐる。これは王朝時代において、詞の運用がいかに注意ぶかくせられてをつたか、實にその一語の運用の如何をすら、かりそめにはしなかつた敏感さである。

かういふわけで女手によつて書かれた假字専用體の文章は、まだ消息としてさう覺醒しなかつた時代にあつても、男女の戀を舞臺として、相當に活躍し磨かれてゐたのであらうから、國語に對する注意は、王朝文學が展開せられる以前において、相當に長い期間のあひだ、注意を拂ひならされてをらなければならなかつた筈である。

もちろん國語に對する注意、といふよりもむしろ國語に對する反省は常に歌によつて、培はれてゐたと見るのが適當ではあるが、すでに引用した枕冊子の文句でもわかるやうに、それが和歌を中心とした世界から次第に散文の世界にまで範圍をひろめて、和歌に於いて一語一音が問題にせられるやうに、散文に於いて一語一音が注意せられるやうになつたといふことは、和歌の生活といふことからだけではどうしても説明しつくされぬ。散文が消息として、歌とともにいかに活躍したかといふことを考へて、はじめにその事情を明かにすることが出来ると思へるのである。

かくて、消息として戀の舞臺に活躍した散文は、つひに王朝時代における女流文藝を生む源泉となつたのである。源氏物語に、物語の祖としてかゝれてゐる竹取物語は、まづ物語の最初のものとしてよからう。しかし、かういふものが突如として表はれようとはどうしても思はれない。國語に對する目が覺めてからでなければならぬ。

和歌を魁として復興した國風は、まづ國語に對する目を覺ました。この覺醒は、鬱勃として漲つてゐたいろんな要求を充たすために、國語の活動をますます熾んならしめたことは想像にかたくない。だから、竹取物語の表はれたの



も、國語を見る目が醒まされた後でなければならぬ。制作年代に就いていろんな説があるけれども、まづ國語覺醒期の初めと考へられる。といつても、かういふ物語は、伊勢物語のやうなものが出てから後に出ていゝやうに考へられる。従つて竹取物語の出現はまづは國語覺醒の第二期でなければならぬと考へるのであるが、事實においてはたして伊勢物語が後であるか、竹取物語が始めに表はれたかは知るよしもない。實世間の出來事は、必ずしも理窟通りには行かないから、たゞ事實を事實とするより外仕方がない。それはともかくとして、かういふ事情のもとにあつて、第一期に表はれる文學は、何等先例がないのであるから、舊慣に引きづられるやうな事情がなく、従つてまたその用語は、當然當時の口語でなければならぬ筈である。しかも消息文は問題が概して簡單で、受授の問題が相互に共通對あるから、その事情は、ちやうど對話の場合と似てゐるのである。かういふわけで、その用語の記載様式でも、また話の場合の口語に似てゐて然るべきである。試みに落窪物語から消息文の用例を引用して見ると

おん文御覽じつれどもまめやかに苦しげなるみけしきにてなむ。おんかへりごとも。さていと長げにはなどか。いつのほどにかはみじかさも見え給はむ。またたのもしげなくともうしろやすくの給ふらむ。

といふ手紙がある。これは次の手紙の返事である。このたびだに御かへりなくば使なかりなむ。いまはたゞあひおぼせかし。御心はいと長げになむ見奉りの給はする。

少將の従者帶刀から、帶刀を夫としてゐる阿漕のもとにやつた手紙である。阿漕は落窪の君に仕へてゐる女房で、帶刀から阿漕に、主人少將の君のやうすを知らせて、少將と落窪の君との戀の媒介をしようとしてゐるのである。「長

けになむ見奉りの給はする」といつても、誰が見たとも、言つたも言はない。お互に理解されきつてゐるからである。「さていと長げにはなどか」と言つてゐるのは、帶刀の手紙にはある「御心はいと長げに見奉りの給はする」に對した言葉であつて、昨夜逢つたばかりなのに、少將が落窪の君に對して、いつまでも心が變らないでゐるものかどうか、あてになるのですか、といふ意は通じてゐるのである。だからまた「いつのほどにかみじかさは見え給はむ」も昨夜一度御逢ひ申したばかりなので、變り易い御心であつたとしても見られようはずがありませんよといふ意が明瞭である。かういふ風にお互に了解してゐる間柄の手紙であるから、省略せられるだけ省略せられてゐるのである。

さらに便宜のためにこれと對話とを對照して見ると、

くちをしうかしこにはえ行くまじかんめり。この雨よ。との給へば、ほどなく、いとほしくぞ侍らむかし。さ侍れどあやくなる雨はいかゞはせむ。心のおこたりならばこそあらめ。さる御文をだに物せさせ給へ。

これは少將の君が、落窪の君のもとに出發しようとしたときに、帶刀とかはした問答である。残念ながら彼處には行けない。この雨よ。に對し、「通ひはじめて間もないのに」が「ほどなく」である。これにも主語いふべきものがなく、まつたく省略されてゐる。

枕冊子に「下司は文字あまりしたり」と言つてゐるのは、教養のないものは言葉數が多いものである、といふことを言つたもので、言はないでよいことはなるべく言はないでおくのが、平安朝の氣のきいたものであり、教養あるものとせられてゐたのである、それだから、王朝文學に於いては省略出來るだけ省略してゐるのである。源氏物語を見て、一度言つたことは、一語でも繰返しをさける方法があれば繰返さない。瑣細なことは手爾乎波一字でそれを表は



すようにさへ努めてゐる。これが王朝時代の文學を讀むのに、細心の注意を要する點である。とにかく王朝時代の人達は非常に鋭い感覺を持つてゐて、言はなくともわかる程度のことは口に出さない。またわかるまで説明するやうな暢氣な感情をもつてゐるものはなかつたのである。かういふわけで對話と似た事情の手紙の文が、省略されるだけ省略せられたのは、當然すぎるほど當然のことなのである。さうしてまたさういふ事情のもとに、手本のやうにして表たはれ物語が、同じ筋をたどつてゐることも見易いことである。西洋文學をした人の目では、この邊の味は到底わからないのが、自然であるかも知れない。

けれども、消息文とても、必ずしも以上述べて來たやうに簡単な場合ばかりではない。時には、纏綿とした情を充分に訴へるやうな場合もあるのである。當時は逢つて話すことも出來ず、幾多の障壁を隔て、情を通はす必要もあつたからである。これが後の物語文の下地としていゝ修練となつたのである。源氏物語にある、伊勢にゐる六條御息所から、須磨に貶適されてゐる源氏に宛てた手紙を例として舉げて見よう。

なほうつゝとも思へ給へられぬ御住居をうけたまはるも、明けぬ夜の心まこひかとなむ。さりとも年月は隔て給はじと思ひやり聞えさするにも、罪ふかき身のみこそ、また聞えさせんこともはるかなるべけれ。

うきめかる伊勢をのあまを思ひやれもしをたるてふ

須磨の浦にて

よろづに思ふ給へみだるゝ世のありさまも、なほいかになりはつべきにか——後略——

かういふ風に消息文にも、いろんな場合があるべきである。しかもかういふ各の場合に注意ぶかく書かれたのであ

る。注意ぶかい贈答が交はされてゐる間に、口語も磨かれて、立派な文章語としての資格を具備し、何時でも物語文が書けるやうな状態で、機會を待つてゐたと考へられるのである。

草假字が一方發達して自國の國語を寫す便宜が十分出來て來るとともに、一方にはかういふ風にして言語の修養がつまれて、散文文學が展開される準備がちゃんと出來てゐたのである。

## 第二章 和歌の伸展とその傾向

### 第一節 古今集の先驅者

女の世界を中心として戀の舞臺にひとり活躍してゐたと考へられる和歌が——貫之の言葉を借りて言へば、色好みの方に埋木の人知れぬことゝなつてゐた和歌が、はじめにまめなる所にも、花薄の穂にもいづるやうになつたのは、すなはち戀の隠家から、大手をふつて公の席に表はれるやうになつたのは、清和天皇の御代からであるといふことは前にも述べたところである。この事實によつて、貞觀前後いかに國語の活動が壯んになつて來たかといふことを想像するに足るのである。國語に對して目が覺めて來た人達が、いまゝで拮据な漢詩文の世界にとちこめられて、煩瑣な規則に束縛されて來た詩情の吐き口を、國語に求めるやうになるのは當然の勢でなければならぬ。どんなにまだ唐風が吹きすさんでゐたにせよ、支那風を振りまはしてあつれば當世の才人を氣取つてゐたにせよ、彼等の詩情がそれで充たされたとはどうしても考へられない。遣唐副使にまでなつたほど詩文に堪能だつた小野篁さへ、正使と争つて嵯峨上皇の逆鱗にふれ、隱岐に流されてゆく時は



和田のはら八田島かけて清きいでぬと

人にはつけよあまの釣舟

と感慨を歌つてゐる。悲壯な感懐は到底よその國の言葉では表はし得ない。これがしかもまだ三十六七歳、若い血は一ぱい胸に燃えてゐるのである。

數ならばかゝらましやは世の中に

いと悲しきはしづのをだまき

美辭麗句を繰つては唐詩人をも凌駕すまじきほどの筆も、胸にわだかまる戀のつらさは、國語によつてはじめて熱い息を吐く思ひがあるのである。この歌の調子はすでに萬葉集のものではない。用語も調子も女性の手によつて、くだく／＼に揉まれ揉まれて柔かに革されきつた姿である。

仁明天皇の采女であつた小野小町は、王朝時代の黎明を彩る唯一の花形役者である。

あかつきのしぎの羽がきもゝはがき

きみが來ぬ夜はわれぞ數かく

の歌によつて有名になつてゐる深草少將百夜通ひの傳説の主人公深草少將は、深草のみかどすなはち仁明天皇ではあるまいかと疑はれるふしが十分あるのである。それほど深草のみかどと縁の深い小野小町が、いかなる人であつたかは、暫くおくとしても、平安朝の和歌黎明時代を嚮導するためには、六歌仙の一人として、遍昭業平とよもに、是非とも瞥見しなければならぬ。平安朝の和歌黎明時代を見て、誰しもこの三人が、殆んど時代を背負つて立つてゐ

るかの感があるを思はぬものはおそらくあるまいと思ふからである。

仁明天皇の崩御遊ばされた時の歌として遍昭集に

なにくれといひありき侍りし程に、つかうまつりし深草の帝かくれおはしまして、かはらむ世を見むもたへがたく悲し、藏人頭中將などいひて、よるひるなれつかうまつりしなごりなからむ世に交らじとて、にはかに家の人々にも知らせでひえにのぼりて、かしらおろし侍りしにも流石に親などのことは心にやかゝりけむたらちねはかゝれとてしもぬば玉の

わが黒髪はなですやありけむ

といふ歌がある。仁明天皇のおかくれになられたのは、嘉祥三年で、遍昭三十五歳の時である。本朝皇胤紹運録や職事補任によつて見るに藏人頭、左少將、右中辨等には任官してゐるが、中將にはなつてゐないやうである。詞書のうちにある中將さいふのは中辨の誤であらう。それはともかくとして、この詞書によつて遍昭がいかに仁明天皇の御寵愛をうけてゐたか想像するに難くない。「かはらむ世を見むも堪へがたし」といひ、「よるひる仕うまつりしなごりなからむ世に交らじ」といつてゐる言葉には、見逃しがたいものがあるのである。もちろん

深草の山にをさめたてまつりしを思ひ參らせけむ心のほど思ひやるべし

うつせみはからを見つゝも慰めつ

けぶりだに立て深草の山

とよひ



世のはかなさいと思ひ知られて侍りしかば  
 すゑの露もこのしづくや世のなかの

おくれさきだつためしなるらむ

などの歌によつて、仁明天皇の崩御が、どれほど彼を動かしたかは知られるのであるが、余の見るところでは、たゞ崩御を悲しむ心だけではないのである。御寵愛の深かつたばかりの理由で「かはらむ世を見むも」堪へがたいとはどうしてもうけとれないのである。余はこの背景に藤氏を想像して見たいのである。前にも述べたやうに、支那文明をしきりに輸入したのが藤氏であつて、詩文流行の機運を致したのは、藤氏が自家のためにする政策だつたかも知れないのである。この藤氏の犠牲になつたものがどれほど多かつたか、藤氏に反抗しようとして、むちやくちやにふてくされ歩いたのは、ひとり業平にもかぎらなかつたであらう。余はかくて「かはらむ世を見むも堪へがた」と言つたり「よるひる仕うまつりしなごりなからむ世に」は交るまいといふ廻昭の心持を、藤氏の専横の世を見むもたへ難いことであるから、仁明天皇の御勢力が全く一掃されてしまつた藤氏一人の天下には交はるまいといふ風に解釋したのである。

仁明天皇の御母は橘氏であるから、藤氏も何とも手の出しやうがなかつたであらうが、皇太子文徳天皇の御母は、冬嗣の女順子である。文徳天皇の御代になれば、藤氏の勢力が俄然として世を風靡するは知れたことである。廻昭の出家はこの邊の消息を明かに物語つてゐると言はなければならぬ。

こゝで余は少しく小野小町について余の想像を語りたいと思ふのである、小町集にある

物をこそいはねの松も思ふらし

千代ふるすゑもかたぶきにけり

といふ歌は抑々何を意味してゐるのであらう。岩根の松の千代の齡を傾けるものは一體何か。これは藤氏をそれとなく諷刺してゐると見るより外に解のしようがないのである。はたしてしかりせば、この悲憤のこゑが一婦人の口をついて出てゐる所以を思はなければならぬ。

まへわたりし人に誰ともなくてとらせたりし

空をゆく月の光を雲居より

見てや暗にて世ははてぬべき

雲居のよそに月を見つゝ、自分は明るみへ出ることもなく暗から暗に世を終らなければならぬと、聞えよがしに人にとらせてゐるのは一體何のためか、さうしてしかも

やむごとなき人のしのび給ふに

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ

人めつゝむと見るがわびしさ

といひ、

夢路には足もやすめす通へども

うつゝにひと目見しことはあらず



よそにても見ずはありとも人心

わすれがたみをつみてしのばむ

と歌つてゐるやむごとなき人とはいかなる人か。しかも現には逢ひ得ない人である。さうしてたとひ逢はずによそながらをらうとも、忘れがたみを摘んで慰めてをらうといふのである。さうして人には

あやしきこといひける人に

結びきといひけるものを結び松

いかでか君にとけて見ゆべき

自分には心に堅く契つた人があるといつてゐる。だからどんなにおつしやらうとも決してあなたに心は許しませんと心を堅く閉ぢてゐるのである。しかし小町のこの戀はどうやら

妻こふるさを鹿の音にさよ更けて

わがかた戀をあかしかねつる

と歌つてゐるやうに、片戀に終つたのではないかしら。さうしてこの戀の對象となつた人がいづれの人かはわからないが

四のみこの失せたまへるつとめて風吹くに

今朝よりはかなしの宮の山風や

またあふ坂もあらじと思へば

と悲歎してゐる四の宮か。仁明天皇の四の宮ならば、光孝天皇の御弟四品彈正尹山科宮でなければならぬ。さうして御薨去は貞觀十四年である。しかし

あしたづの雲居のなかに交りなば(以下欠)

などいひて失せたる人のあはれなる頃

久方の 空にたなびく 浮雲の うける我身は つゆ草の 露の命も またきえて 思ふ事のみ まろうすげ

繁さぞまさる 新玉の ゆく年月は 春の日の 花の匂ひも 夏の日 木の下蔭も 秋の夜の 月の光も

冬の夜の 時雨の音も 世の中に 戀も別れも うき事も つらきも知れる 我身こそ 心にしみて 袖の

うらの ひる時もなく 哀れなれ かくのみ常に 思ひつゝ いきの松原 生きたるよ 長柄の橋の 長らへ

て せにゐるたづの 鳥渡り 浦こぐ舟の ぬれ渡る いつかうき世の くにさみの わが身かけつゝ かけ

はなれ つか戀しき 雲の上の 人にあひ見て この世には 思ふことなき 身とはなるべき

といふ長歌によると、この雲の上の人が、はじめ「雲居より見てや暗にて」と月に嘘へられた人ではないかと想像される。かういふ風に余の小説的興味を走らせると、小町の戀の相手が深草のみかどのやうに思はれて、想像は想像を生んで果つるを知らないのである。しかし今は憶測や想像がゆるさるべき時でないから、想像の筆をとめなければならぬ。ましてや遍昭集と同様、小町集がどれだけ信用出来るか、すでに景樹が疑つてゐるほどであるから、これを根據として遍昭や小町の生涯を云々することは慎まなければならぬ。たゞこゝに擧げて來た歌は作者の歌として充分論ぜられる資格をもつてゐるのである。それはともかく、余が遍昭小町について自分の憶測や想像を述べたのは、



何の理由あつてのことか。余はたゞ遍昭小町ふたりとも、仁明天皇と決して浅くない關係のもとにあつたことを、多少想像して見たかつたのである。さうしてこの想像は、遍昭にせよ、業平にせよ、あるひはまた、たとひ小町が一小婦人であつたにしても、藤原氏によつて社會的地位を褫はれた事實を裏書することになるからである。

前にも述べたやうに詩文の横行によつて女性の世界に押し籠められてゐた和歌は、女の手に撫育されながら、國語の黎明を待つてゐたのであるが、かうして藤原氏のために社會的地位を褫はれた人達は、少くも政治的地位に失望した人達は、詩文の横行によつて和歌が女性の世界に隠れたやうに、和歌のうち彼等の快よき棲家を見出したのではないかと考へる。すでに嵯峨帝の御代以來詩文に活躍して來た有數の人達も次第に亡くなつて、國風の和歌が次第に勢力を得つゝあつた時であるから、和歌はまたかゝる人達の出現を待つてゐたのである。古今集の先驅者として活躍した遍昭小町にしても、さらに業平にしても猶さういふ風に解釋すべきではないかと思ふのである。

業平が

惟喬のみこのもにまかりかよひけるを、かしらおろして小野といふ所にはべりけるに、正月にとぶらはむ  
とてまかりたりけるに、ひえの山のふもとなりければ、雪いとふかよりけり、しひてかのむろにまかりいた  
りてをがみけるに、つれづれとしていともの悲しくて歸りまうできてよみておくりける

忘れては夢かと思ふおもひきや

雪ふみわけて君を見むとは

と詠んでゐる歌をもつて、藤岡博士のいふやうに必ずしも「これをもつて後人或は付度して謂へらく、業平は單に

花の香を偷むの貴公子にあらず、眞に世を憂へ國を思ふの大忠臣にして、深く藤家の跋扈を憤り、これを壓へて皇室の勢を張らむとせしものにして、二條の後の若かりし時これと契りぬといふは、その入内を妨げんの謀、東下りは東國有志の徒を語らはんが爲なりしなり。企畫意の如くならず、憐むべし、鞘唾してわづかに煩悶を和歌に遣り、遊子の名を後世に止めたれど、「思ふこといはでぞたゞにやみぬべきわれとひとしき人しなれば」の詠は、その衷情を露出して餘あるにあらずや」といふ程にも言はれないかも知れないが、「思ふに業平が惟喬と親しみしは、深き魂膽」はなかつたにしても、たゞ單に「一は多情多恨の性より親王の逆境を憐みしが爲、一は彼我姻戚相通せしが爲なり」といふはあまり速断に過ぎやしないかと思ふのである。惟喬親王が藤原氏の爲にしりぞけられて、悲憤のあまり出家するほどの心情に對して同情してゐる業平の心持を、たゞ「多情多恨の性より親王の逆境を憐みしが爲」ぐらゐにはどうしても思はれぬ。それはこの歌が有力に物語つてゐるところに聽かなければなるまい。まさかかういふ世のなかにならうとは思はなかつたといふ歎息の聲の奥に、藤原氏に對する忿懣の情の燃えてゐるのを、見逃がすわけにはゆかないのである。もちろん惟喬親王の狩に御伴をして

狩くらしなばたつめに宿からむ

天の川原にわれは來にけり

と歌ひ、あるひは

飽かなくにまだきも月のかくるゝか

山の端にげていれずもあらなむ



と戯れてゐるのは、たゞ親王と相親しんでゐるだけで、その間に何の魂膽があつたとも思はれない。しかし別に魂膽がないにしても、たゞ姻戚の關係が、業平をして惟喬親王に近づかしめる唯一の原因と解釋することは出来ない。たとひ業平が基經の四十賀に

堀河のおほいまうち君の四十の賀九條の家にてしける時よめる。

櫻花ちりかひくもれおいらくの

こむといふなる道まがふがに

といふやうな歌を詠むでゐるにしても、藤原氏と何等かの關係がないとは言へまいと思ふ。一方に彼が政治的地位を望んでも、報われない忿懣の情があつたればこそ、雪ふみわけてまで、その不遇をとぶらつてゐるのではないかと思ふのである。三代實錄の作者が「體貌閑麗、放縱不拘」と批評してゐる言葉は、いつたい何を教ふるであらうか、藤岡氏の言ふやうに「文字通りなる放縱不拘の資、思ふがまゝに身をふるまひ、世をすねて時に笑ひ、時に憤り、多情多恨、己が沈淪を歎き、惟喬が不幸を憐み、住みわび、今はかぎりといひながら、山里にかくれもあへで一生を送れる人」であつたと解すべきであらうか。藤原氏に對する憤懣の情がむしろ放縱不拘として表はれもし、見えもしたのだと解釋することは出来ないであらうか。

思ふ心ありて前太政大臣によせて侍りける

頼まれぬうき世のなかをなげきつゝ

日かげにおふる身をいかにせむ

といふ歌を良房に寄せてゐるのを見れば、彼がいかに政治的地位に戀々としてゐたかを讀むことが出来る。良房の薨じたのは貞觀十四年で、業平が四十八の年であるから、それ以前の歌でなければならぬ。かうして彼が望んだ政治的地位も與へられなかつた。二十六の時五位になつたまゝ、四十九で漸く四位下に叙せられ、五十三でやつと從四位上左近衛權中將である。それから翌年相模守になり、五十五歳死ぬ前の年藏人頭になつたばかりである。彼の憤懣も想像するにあまりあるのである。かくて彼に何の魂膽があつたわけではないにしても、彼の不遇がおのづから惟喬親王を近づかしめたのだと考へるのである。

かういふ風に藤原氏によつて、政治的地位を獨占されて政治的興味を奪はれた人達は、和歌の世界に生活するやうになつて行つたと考へても、あながち誤でもあるまい。詩文の作者にも和歌の作者にしても、藤原氏にそれほどの作者が當時ゐなかつたのは、藤原氏がひとり政治的興味に没頭してゐたためではなかつたらうか、一方に興味を奪はれたものが、他に生活の興味を求めざるやうになるのは自然の勢でなければならぬからである。かくて女の手によつて磨かれ温められ訓練されて、漸く萬葉の拮据にして粗剛な調子から、柔軟でのびやかな、優しくして晴れやかな、雅びた姿を得ようとしてゐた和歌は、彼等の手によつてさらに磨かれ、俄然としてその地位を高め、活氣を帯びて來たのである。國語が自由自在に驅使されて、絢爛な漢詩にもおとらぬ花を匂はせるやうになつたのであるから、和歌が公の席に大手をふつて表はれるやうになるのは當然である。すでに小町の歌に

日の照り侍りけるに雨乞の和歌よむべきせんじありて

千早ふる神もみまさばたちさわぎ



天のミがはの樋口あけたまへ

といふのがある。はたして小町の歌とすれば、仁明天皇の御時に、表むきになつて來てゐるのであるが、信じてよいかどうかを知らぬ。

## 第二節 古今集以前の傾向

貫之が古今集の序文にいはゆる六歌仙を評してゐる言葉を引いて見ると、遍昭は「歌のさまは得たれどもまことすくなし。たとへば繪にかける女を見ていたづらに心を動かすが如し」といふのである。漢文の序によると「得て歌體、然其詞花而少實」といふことを言はんとしてゐるのである。歌としての資格、姿體は十分具備してゐるけれども、感情が稀薄であるといふのであらうが、詞が花やかすぎるために、歌としての姿體は具備してゐても、感じられるものが足りないといふのか、歌はれたものに對しては物足りないところはあつたが、とにかく歌にはなつてゐるといふのか、あまり明瞭ではない。業平を評して「その心あまりに詞足らず、しほめる花の色なくてにほひ残れるが如し」と言つてゐるのに對照して見ると、稍意味が明瞭になつて來やしないかと思ふ。といふのは、貫之の考では、業平と遍照とを反對の地位において考へるゐるやうに思はれるからである。こゝで貫之がしほめる花の匂ひと言つて、匂に喩へてゐるものは、勿論「こゝろ」であり、色に喩へてゐるのは詞である。従つて心あまりあつてどんなに匂つてゐようとも、それに對する詞の色がなくては、歌として理想の姿であるとは言へないと考へたのであらう。しかるに、遍昭を評してゐる言葉によると詞の花が、心の匂ひにたちまさつてゐて實は少いけれども、歌の體は得てゐるといふので

られるら、貫之が心の匂ひよりもむしろ詞の花を重んじてゐたことにならなければならぬ。心よりも詞によつて得るか歌の體を重んじてゐなければ、かういふ言葉にはならないのである。しかし今は貫之の歌に對する考はともかくとして、彼が先覺として尊敬してゐた遍昭小町業平等の歌風が、はたしてどんな風であつたかを觀察しなければならぬ。遍昭ははたして貫之のいふやうな風であつたかどうか。比較的是なやかだと思はれる歌を擧げて見ると、

西大寺のほとりの柳をよめる

あさみどり糸よりかけて白露を

玉にもぬける春のやなぎか

題しらす

秋の野になまめきたてる女郎花

あなかしがまし花もひとしき

春の歌とてよめる

花のいろは霞にこめて見せずとも

香をだにぬすめ春のやま風

五節の舞姫を見てよめる

あまつ風雲のかよひちふきもちよ

をとめの姿しばしとよめむ



ぐらゐのものである。もちろん古今集に選人せられた歌の外に、遍昭の歌としてたくさん傳つてゐて、それが貫之の眼には、彼が批評してゐるやうに映つたのかも知れない。さうしてそのうちから選ばれた、比較的花實ともに相そなはつたものが古今集にある歌なのかも知れない。しかし古今集のうちに選ばれてゐる彼の歌にしても、詞の花に過ぎて、繪にかいた女を見て心を動かすやうだとはいはれないまでも、業平の歌に比較したならば、はるかに絢爛だと言ひ得られよう。

表現的の立場から考へれば、詞のはなやかなのは、心がはなやかだからだと考へなければならぬ。心がはなやかだといふのは、見方、感じ方がはなやかなのである。もつと言ひ換へれば、ある対象を言葉のうへにとらへる仕方が、はなやかなのである。さういふ風に貫之の言葉が翻釋出來るとすれば、余もまた遍昭の歌をはなやかにすぎると考へる。それは貫之や貫之時代の人達が感情の直接なる表現といふよりも、ある趣巧の美を耽美的に見てゐる傾向なのに對して、遍昭の態度は、まだ主情的表現的であると言ふことが出來ようかと思ふのである。柳糸垂れて春に靡くを、糸よりかけてと言はないではをられぬ心、しかも露を帯びた枝を、玉に貫いた柳の糸とも喻へないではをられぬ心持は、自然を活きたまゝに獲へるには少しく迂愚である。といふよりも筋力がひと言はなければならぬ。一步を進めて言へば、糸よりかくる春しもぞだからみだれてと趣巧された美になるところなのである。それでも彼がこの歌にとらへてゐる自然は、早春として言葉のうへに活々としてゐる。それは、趣巧されてゐながらも、趣巧の美に溺れる一步前に踏みとどまつて、それによつて自然をとにかくとらへてゐるからである。従つて自然をとらへる仕方がはなやかになるわけである。

つぎの歌は、あなかしがましといふ表現が、一層主情的でありながら、女郎花をなまめきたてると感ずるのは、ひと時の美に溺れようとする心からで、対象の美を直に活かさうとするものならば、あなかしがましなど、対象以外のものを苦にする必要は少しもないのである。これは対象の美を本質的にとらへようとする態度ではなくて、対象の美をたゞはなやかにもてなして、それに酔はうとするものゝ心である。対象を言葉のうへにとらへる仕方がはなやかに過ぎると言つたのは、かういふ意味である。しかし自分は遍昭の歌がかういふ意味ではなやかであるといふのには賛成するが、決してまことが少ないとは思はない。しかし、實はあるにしても、遍昭のこの態度を一步進めると、「花のいろは——」といふやうに、ある人々からは、まったく技巧的態度のものとか見られないやうな歌になるのである。古今集の作者の、大部分を浸して行つたものは、この方面ではなかつたらうかと考へるのである。

これはしかし遍昭の負ふべき責ではなくて、さうなつたのは女の戀のたはむれが、——あるひはまた男の戀のたはむれが生んだ時代の好みであつて、遍昭あたりの時代は、その分岐點に立つてゐると見るが至當であるかも知れない。彼とても

#### 題しらす

わが宿は道もなきまであれにけり

つれなき人を待つとせしまに

とか、あるひは

深草のみかどの御時に、藏人頭にて、よるひるつかりまつりけるを、諒闇になりければ、更に世にもまじ



らずして、ひえの山に登りて、かしらおろしてけり、そのまたの年、みな人御ぶくぬぎて、あるはかうぶり  
たまはりなど、よろこびけるをきよてよめる  
みな人は花の衣になりぬなり

昔のたもとよかわきだにせよ

といふやうに、しめやかに胸を浸して来るやうな、さみしい表現的態度の歌もあるのである。とにかく遍昭の歌の、清麗で少しも調子のうへに綻びを見せない端正な姿は、貫之をして「歌の姿を得てゐる」と評せしめた所以であつて、古今集の作者たちが、——ことに貫之などが學んだ歌の姿も、またこの邊にあつたのではないかと思はれるのである。しかも、古今集に撰入せられた歌（遍昭の作十七首あり）は、選者たちのある標準にかなつたものであるから、撰入せられなかつた數々の歌には、あるひは貫之の言葉をさながらに思はしめるものが多かつたかも知らぬ。であるから、業平の歌とてもまた、古今集にあるだけのものでは——業平の作三十首——はたして貫之の批評が背景にあつてゐるかどうかは、斷言しきれないのである。

貫之をして言はしむれば、業平の歌はさきにも言つたやうに、「その心あまりて詞たらず。しほめる花の色なくにほひのこれが如」きものである。情熱は餘りありながら、詞の花がないのだといふ意であらう。花のいろがないといふのは、すなはち詞に花やかさが無いといふので、しかもなほ匂ひのあるのは、率直に自分を歌つてゐるからである。もつとわかりやすく言へば、言葉のうへに捉へる仕方が、率直で生一本であるといふのである。例へば、

渚の院にて櫻を見てよめる

世のなかにたえて櫻のなかりせば

春のこゝろはのどけからまし

のごときは、その好例ともいふべきであらうか。花ゆゑに春につくす念ひを、のどかなる春を更にものどかにと思ふ心に跳める態度は、西行の時代とははるかに時代が違つてはゐる。「——なかりせば——のどけからまし」といふ心持には、花ゆゑ春につくす念ひはあつては、極めて稀薄で、むしろ、更にも朗かに花やかなる春を、たゞ有頂天に過ごすことをこれ願ふ心が奔騰してゐるだけである。かういふ情熱のまへには、詞の花を思ひ、嬌々と委曲をつくすいとまはないのかも知れない。「心あまりて詞足ら」ざる所以である。しかし彼には

からごろもきつゝなれにしつましあれば

はるばる來ぬる旅をしぞおもふ

といふやうに、機智と情熱とが同棲してゐた。彼が當代の歌人として獨歩の感あるものは、ひとり彼の情熱だけではなくて、機智に於てもまた、彼は當代の誰にもおこらなかつたであらうと想像せられるのである。したがつて彼の歌を観察するには、この二つの點からするのが最も便利である。

つれつれのながめにまさる涙川

袖のみぬれてあふよしもなし

といふ歌に對して

あさみこそ袖はひづらめ涙川



身さへながるときかばたのまむ

と翻奔するぐらゐはあへて、業平を俟たなかつたかも知れぬ。あるひはまた、

あまぐものよそにも人のなりゆくか

さすがに目には見ゆるものから

と女がいやみをいふのに對して、

ゆきかへり空にのみしてふることは

わがゐる山の風はやみなり

など、自分が悪いのぢあない、罪はそつちにあるんだと、そしらぬ顔をしてゐるのも、業平にかぎつた事ではない。しかし

あだなりと名にこそ立てれ櫻花

年にまれなる人もまちけり

といふに對して

今日こそは明日は雲とぞ設りなまし

消えずはありとも花と見ましや

といふに至つては、その受太刀の鮮かにして、返す刀の素早さ。この種の藝の巧さは、すべて彼の機智の圓轉から生れると言つてもよいのである。それがあはるひは

右近の馬場の日をりの日むかひにたてたりける車の下麗より女の顔のほのかに見えければよみてつかはしける

見もあらず見もせぬ人の戀しくは

あやなくけふやながめくらさむ

やよひのついたちよりしのびに人にものをいひて後に雨のそぼふりけるによみてつかはしける

おきもせず寝もせで夜をあかしては

春のものとてながめくらしつ

こか、あるひは

東の五條わたりに人をしりおきてまかりかよひけり、忍びなる所なりければ門よりしもえ入らで垣のくづれより通ひけるをたび重りければ、主人聞きつけてかの道に夜毎に人をふせて守らすればいきけれどえあはでのみ歸りてよみてやりける

人しれぬわがかよひちの關守は

よひよひごとにうちもねなむむ

といふやうに、いろんな姿に身を變へて表はれて來るのである。さうして多くの場合に彼の歌は、機智と情熱とが離れ離れにはたらく場合に、貫之のいはゆる心あまりて詞足らざる感があるので、機智が情熱に伴ひ、情熱が機智につて、歌のうへに渾然一體をなして表はれて來る場合には、皎とした珠玉の光をはなつてゐるやうに思ふ。その最



なるものは有名な

五條のきさいの宮の西の對にすみける人はいにはあらでもの言ひわたりけるを、む月の十日あまりになむ外へかくれにける。あり所はききけれどえものもいはで又の年の春、梅の花ざかりに月の面白かりける夜こそをこひて彼の西の對にいきて月のかたぶくまであらばなる板じきにふせりてよめる  
月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

の歌のごときがそれであらう。かういふ場合には決して心あまつて詞ならざることなく、言葉ごとに心ふかく充ちて、光るまでに匂つてゐる。高走る情熱がおのづから深潭をなすのである。

藤原敏行の朝臣の業平の朝臣の家なりける女をあひしりて文つかはせりける言葉に今まうでく雨の降りけるをなむみわづらひはべるといへりけるをききてかの女にかはりてよめりける  
數かずに思ひおもはずとひがたみ

身をしる雨はふりぞまされる

病して弱くなりける時よめる

つひにゆく道とはかねてききしかど

きのふけふとは思はざりしを

題しらす

おほかたは月をもめでじこれぞこの

つもれば人の老となるもの

○

世のなかにさらぬ別れのなくもがな

千代もとなげく人の子のため

深草の里にすみはべりて京へまうで來とてそこなりける人によりておくりける

年を経て住み來し里をいでいなば

いとゞ深草野とやなりなむ

の歌のごときは、そのよき例として擧げることが出來ようかと思ふ。

かくて遍昭といひ、業平といひ、和歌復興の先驅として、まづその地ならしをして行つた人々である。もちろん王朝時代の和歌が、女性の中に育まれて來たために、繊細にして軟柔な姿態と聲調とをそなへるに至つたのであるが、これを一般的にしたのは彼等の功績である。一般の民心がすでに繊細にして軟柔な姿態と聲調を、歌のあるべき姿として認めるやうに傾いてゐた——といふよりもむしろかゝる姿が、彼等の覺めてゐた心持であつたであらうけれども、これ等先驅者の目覺ましい活躍がなかつたならば、古今集の世界は展開せられなかつたかも知れないのである。

更に先驅者の代表的の一人として遍昭業平とともに擧げた小町の歌はどうであつたか。貫之に言はしむれば、いはれなるやうにて強からず、いはゞよき女のなやめるところあるがごとく、き歌の姿である。古今集に撰ぜられた歌だ



けに就いて言へば、よき女のなやめるところあるやうなあはれ深いもので、しかも相當に線の強さもある。必ずしも貫之の言ふやうに、あはれなるやうにて強からざるものでもないと余は考へる。おそらく貫之は、歌に盛られた心持を主として批評を下してゐるのではないかと思ふのである。

花のいろはうつらひけりな徒らに

わが身世にふるながめせしまに

思ひつゝぬればや人の見えつらむ

夢さ知りせばさめさらましを

うたゝにねに戀しき人を見てしより

夢てふものはたのみそめてき

いとせめて戀しき時はぬば玉の

夜の衣をかへしてぞきる

肉體のうへに若さが衰へてゆくのを思ふほど、女にとつて大きな悲しみはあるまい。轉輾として春怨うたゝ深きと思ふやうな心持である。しかもまた戀を命とするものにとつて、夢のうちのみ親しく相見ざるを頼みとして、たゞはかない夢に生きてゆくあはれさは、實に貫之の眼にもよき女のなやめる姿として映つた筈である。あるひはまた

あはれてふことこそうたて世の中を

思ひ離れぬほだしなりけれ

人にあはむつきのなきには思ひおきて

胸はしり火に心やけをり

冷然として出離し得るやうな小町であつたら、よき女のなやめる姿とは見えなかつたであらう。かういふ情熱があればこそ

いろ見えて移ろふものは世の中の

人のこゝろの花にぞありける

と恨みもしようし、

今はとてわが身時雨にふりぬれば

言の葉さへに移ろひにけり

秋風にあふたのみこそ悲しけれ

わが身むなしくなりぬと思へば

といふやうに、自分をはかなみもするのである。

かくて、暹昭にしる業平にしる、あるひは小町にしる、和歌復興の魁として黎明時代に活躍した人々には、まだまだ主情的の傾向がその主調をなしてゐたと認めて大體誤りはないやうである。

しかしながらこの時代に一面濃厚に表はれてゐる主知的の分子を見逃すことは出来ない。それは縁語や戀詞に對する興味がすでにかなり深くなり、それと同時に言葉の多義性を利用した傾向が非常に多くなつてゐることである。従



つてその態度も表現的態度から技巧的にうつりつゝあることが知られる。表現のための技巧が一歩退いて、たゞ技巧を樂しむかに見えるのである。歌が必ずしも感情の直接の表現ではなくなるのである。主情的の傾向を多分に持つてゐる遍昭や業平や小町の歌にも、すいぶんこの傾向は認められるのであるが、六歌仙の一人文屋康秀にはことに目立つてゐる。古今集に撰ぜられてゐる彼の歌五首を挙げて見ると、

二條后の東宮の御息所ときこえける時む月三日御前に召して仰言ある間に、日はてりながら、雪の頭にふりかゝりけるをよませたまひける

春の日の光にあたる我なれど

頭の雪となるぞわびしき

是貞のみこの歌合のうた

吹くからに秋の草木のしをるれば

うべ山風をあらしといふらむ

草も木もいろかはれどもわたつ海の

浪のはなにぞ秋なかりける

二條の後の御息所と申しける時にめど、にけづり花させりけるをよませたまひける

花の木にあらざらめども咲きにけり

ふりにしこのみなる時もがな

深草の帝の御國忌の日よめる

草ふかき霞の谷にかけかくし

てる日のくれしけふにやはあらぬ

この外、後撰集雑部三に

時にあはずして身を恨みてこもり侍りける時

白雲のきやどるみねの小松原

えだしげけれや日のひかり見ぬ

があるだけである。右の歌のなかで、「草ふかき——」をのぞいては、殆んどすべてが、たゞ通俗の機智にすぎない。業平の場合に於いては、同じ機智でも高踏的で、詩が光つてゐる。けれども、これはまつたく下手な地口で、詩としてはどうも受取れない。機智が詩としての光を持つためには、詩に對する情熱を必要とする。あるひは、情熱によつてはたらく機智でなければならぬ。主觀の奥ふかい根のない機智であつては、ひとつのたはむれに過ぎない。春の日の光と、雪との對象からは、わびしい心持はくまれぬ。面白く仕組んだといふに過ぎない。山風がふくと草木をあらすから、「うべ山風をあらしといふらむ」では、たゞ滑稽な語源俗解をやつてのけたゞけの面白さである。「草も木も——」も、少しは氣持があるにしても、畢竟ごもつともですと答へられる外に何物もない。「花の木に——」に至つては苦しい申譯である。かくて貫之が詞巧にしてそのさま身に負はずいはゞ商人がよき衣着たらんがごとしと批評してゐるやうに、その思想感情が少しも詩としての資格が無いに拘はらず、僅かに歌らしい詞——貫之に言はしむ



れば巧なる詞によつて、「いはゞ商人がよき衣きたらむがごと」きいやしい歌の姿になるのである。それでも古今集の先驅者として、ミにかくその序文に遍昭業平等と肩を並べて、その歌が論ぜられてゐるのを見ると、相當の歌人として當代に幅をきかせてゐたわけである。たとひ商人がよき衣を着たやうな歌であつたとしても、やはり歌として相當の地位を認められてゐたとすれば、當代の歌風の一般は、およそこれを推察することが出来る。

かくて、復興の初期——仁明天皇から貞觀へかけての黎明時代に於ける和歌の傾向は、主情的なものを基調として濃厚に理知の色彩に色とられてゐる。言ひかへれば感情をたゞ直露するといふだけでなくて、これをいかに巧に表現しようか、あるひはいかにこれを美しくかさうかといふ風である。遍昭の歌が、「繪にかける女を見て心を動かす」やうに實のすくないのは、詞が花やかに過ぎるためであつた。表現の中心を離れて、いかに美しく見せようか、いかに美しくかさうかといふやうな態度が、詩歌の根本的の態度でないことは勿論であるが、かくて作られた歌が叙情詩としての資格がうすれて「歌のさまは得たれども」實のすくないものになるのは當然である。嚴密に言へば詩歌の資格はまつたくなないのである。實が少くないのではなくて、實が無いのである。然し遍昭にあつては、なほ主情的なものがある。従つてその調子に叙情的なものをきくことが出来るのであるが、康秀に至つては、叙情詩として見るべきものが殆んど無いのである。「草ふかき霞の谷にかけかくし——」にはまだ真情が失はれてはゐない。その他に至つては前に述べた通りである。かういふ風に態度から言へば、表現的のものが技巧的態度に引きづられ引きづられして、すでに方向を變へてゐる。この時代に於ける主情的傾向、表現的態度の代表者を業平小町とすれば、主知的傾向、技巧的態度の代表者を遍昭康秀と見ることも出来ようが、しかしその業平小町にしてなほ言葉の多義を利用して

縁を求めたり、二重に使つたり、あるひは音感の巧な組合せによつて音樂的の効果を收めてゐる等、言葉の運用に口覺めてゐる事實は、意識的にも無意識にも、技巧的態度に傾いてゐたことを物語つてゐるのである。さうしてこのことは、たゞこれだけの説明によつてかたづけきれないものを有つてゐる。前にも言つたやうに、多少にかゝはらず、彼等の心持にいかにも美しく見せようか、いかに美しくかさうかといふやうな心持が、彼等をしてかゝる技巧的、主知的傾向に導いたとすれば、この技巧的、主知的傾向は、同時に彼等がいかに唯美的耽美的になつてゐたかといふ事實を裏書することになるのである。従つていかに美しく見せようか、いかに美しくかさうかといふ態度は、決してものをありのままに見ようとするものでないことも明かである。美しく見ることを主とするやうになるのは當然である。事ごとに美しいある情趣のうちを心に心を投げこんで、それを楽しもうとするのも、たゞ美しきものを求めてやまないからである。戀の舞臺を中心として展開して來た世界に、この耽美的の傾向が主調となつたのは、蓋し自然の推移であつたかも知れぬ。かくて古今集の世界は、この耽美的傾向が戀愛のあはれにはかない情趣とからみ合つて開けて行つたのである。

これがいはいゆる花鳥風月の情と言つた情趣の世界であるが、一面この耽美的の傾向は、すでに絢爛を極めた詩文の極盛時代に培はれ育てられたもので、詩文の反動として起つた和歌の世界に、何時とはなしに浸潤して來たのは自然の勢である。かくてここに和歌の世界は三十一音のうちに切りとられた、活花のごとき可憐にして端麗なあるひとつの姿を成すに至つたのである。



### 第三節 古今集勅撰の壯舉

貫之が六歌仙のほかに「その名きこゆる、野邊に生ふるかつらのはひよろこり、はやしにしげき木の葉のごとく多かれど、歌とのみ思ひてそのさま知らぬなるべし」と言つてゐるやうに、貞觀から寛平へかけて、和歌の興隆がいかめざましいものであつたかは、まことに野邊に生ふるかつらのはひよろこり、はやしにしげき木の葉のごとく、實にすばらしいものだつたにちがひない。

前にも述べたやうに、清和天皇の御時に、萬葉集は何時作られたかといふ御勅に對して文屋有季が「神無月しぐれふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞこれ」と御答へ申したといふことは、詩文の衰頹ともにも、すでに和歌が詩文に更代してゐた事實を語つてゐる。草合や花合のごとき遊戯と同じやうに歌合が初められたのは、更に和歌の興隆がいかめざましく、一般的になつたかを示す。歌合は詩合を模したものとやうに考へられるが、事實に於ては歌合が詩合に先じて行はれてゐるのであるから詩合が歌合を學んでゐるわけである。歌合の今に傳へられてゐるところでは、在民部郷歌合を以て最古とするが、おそらくこれが歌合の嚆矢であらう。在民部郷とは在原行平のことである。行平が民部郷であつたのは、元慶八年から仁和元年へかけてとあるから、この歌合は、一五四四年から一五四五年にかけて行はれたものでなければならぬ。左右十二番で作者を知ることの出来ないのは遺憾である。これを歌合の皮きりに、仁和中將御息所歌合、是貞親王家歌合、寛平歌合、寛平御時后宮歌合と催されてゐる。第一第二

の歌合は何番ぐらゐのものだつたか知るよしもないが、寛平歌合は菊花歌合とも言ひ、十所の菊を詠じたもので、作者には道眞、友則、素性、敏行等があり、寛平御時后宮歌合は、四季および戀二十番をあはせたもので、ともに群書類従におさめられてゐる。かういふ風にして和歌は彼等の生活に無くてならぬものとなつた。情熱の唯一の吐口であるといふばかりでなく、遊戯の道具としてまで歌がもて遊ばれるに至つたといふことは、あらゆる遊びが彼等の生活を支へてゆく大事な役目をつとめるやうになつてゐたことを物語る。當時の遊戯がすべて彼等の情趣を求め心を満足させるやうなものでなければならなかつたやうに、和歌もまた詩歌管絃の遊びと同等の資格を得たのである。音楽に心得がなければならぬやうに、誰でも和歌の心得がなければならぬやうになる。和歌が一般的になるのは當然である。これが延喜に至つてまづその絶頂に達したのである。

かくて「今すべらぎの天の下しろしめすこと、四つの時九つのかへりになむなりぬる。治きおほんうつくしみの波八洲の外まで流れ、廣きおほんめぐみの蔭、筑波山の麓よりもしげくおはしまして、よろづの政を聞し召すいとま、もろもろの事をすて給はぬあまりに、古への事をも忘れじ、古りにし事もおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて」「延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐のさう官凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉集にいらぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてそれが中に、梅をかざすよりはじめて、時鳥を聞き、紅葉を折り、雪を見るに至るまで、また鶴龜につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩夏草を見て妻を戀ひ、逢坂山にいたりて手向を祈り、あるひは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ選ばせ」られたのが二千首二十卷の古今集となつて千載に光輝を放つてゐるのである。



勅撰集として詩集はあつた。懷風藻(天平勝寶三年)凌雲集(弘仁五年)文筆秀麗集(弘仁九年)經國集(天長四年)がそれである。しかしながらこゝに至つてはじめて和歌の勅撰集が現はれたのである。萬葉集が勅撰だといふのも、この貫之の序文にある「古へのことをも忘れじ古りにし事をもおこし給とて」とあるのに暗示されたのかも知れない。あつたは貫之の時代にはさう傳へられてゐたのかも知れないが、こゝにはさして關係がないから、たゞ普通一般の説に従つて、古今集を和歌最初の勅撰集として歩を進める。とにかく、かうしてはじめて勅撰集として現はれた古今集は、その體裁も實に整然として、四季、賀、離別、羈旅、物名、戀、哀傷、雜、と部類が分けられ、歌數實に二千首といふ大歌集で、後世の勅撰集にその範を垂れてゐるのである。かくて古今集が千載に宗として仰がれるに至つたのは、たゞその歌風が典雅優麗であるからばかりでなく、「青柳の糸絶えず、松の葉の散りうせずして、まさ木のかづら長く傳はり、鳥の跡ひさしくとゞまれば、この歌のさまをもしり、事の心をも得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、古へを仰ぎて、今を戀ひさらめかも」いふほどに、貫之たちの確固たる自信のもとに、かくも整然たる姿をもつて、最初の勅撰集として後世に臨んだからである。

撰者の誰もが、大内記、御書所預、前甲斐掾、あるひは右衛門府生といふやうな、まことに微々たる官位にあつて、たゞその和歌の上に優れてゐるの故をもつてこの大任を負つたのである。彼等の得意の心持も想像出来る。貫之は自分で「かくこの度あつめえらはれて、山した水の絶えず、濱のまさこかず多くつもりぬれば、今は飛鳥川の瀬になる恨も聞えず、さゞれ石の巖となるよろこびのみぞあるべき。それまぐらことは、春の花匂すくなくして、空しき名のみ、秋の夜の長きをかこてれば、かつは人の耳におそり、かつは歌の心にはぢ思へど、たなびく雲の立ちぬ、啼く

鹿のおきふしは、貫之らがこの世に生れて、この事に逢へるをなむ喜びぬる」と言つてゐるほどである。これは貫之ひとりの喜びではなかつたであらう。撰者たちの光榮、撰入せられたものゝ面目と觀喜のこゝろは、まことに想像にあまりあるものだつたにちがひない。とにかく、かくして古今集は出来あがつた。この前代未聞の壯舉によつて、和歌は更に一般的になり、日常生活のうちに深く根を張つて、つひに彼等の日常生活は、和歌によつて左右されるに至つた。かくて彼等の日常生活は、政治的といふよりも、むしろ文學的生活にその興味を中心をおくやうになつたのだと考へられる。王朝時代の音楽をはじめとして雑多な遊藝が、宮廷生活のほとんど全部であつたやうに、和歌がそのいづれの場合にもかくべからざるものとして謳歌の席をかざる花ともてはやされるに至つたといふことは、序論にも述べたやうに、王朝文學が和歌を主調として、和歌によつて展けたものであるといふことを説明するものであり、和歌が文學的教養の大事な役目をつとめてゐたことにもなるのである。

#### 第四節 古今集の歌人

古今集が「いにしへのことをも忘れじ、ふりにしことをもおこしたまふとて、いまもみそなはし、のちの世にもつたはれ」と「萬葉集にいらぬふるきうた、身づからのをもたてまつらしめ」られたものであつたとしても、現代を謳歌する心持が先になつてゐたとすれば、古いものよりも、その時代の作家を中心とするやうに傾くのは自然である。撰者の首脳であつた貫之の歌が最も多く、ついで他の撰者たちの歌が他に比して比較的多いといふことは、更にまた



古今集の性質を暗に物語つてゐることになる。従つて撰者たちの歌を観察することは、やがて古今集の歌を明かにする所以であると信ずる。

貫之が古今集を撰んだのは、いつたい何歳くらゐの時であつたか。季吟は二十二三歳と言ひ、景樹は四十五六歳といひ、大秀は三十四歳ぐらゐに考へてゐるらしい。さていづれによるべきか。古今目録によれば、延喜六年二月任越前權少掾御書同七年二月廿七日任内膳典膳與宮道潔同十年二月任少内記、同十三年四月任大内記、同十七年正月七日叙從五位下、同日任加賀介、同十八年二月任美濃介、延長元年六月任大監物、同七年九月任右京亮、同八年延喜八年庚寅は醍醐天皇の御代、翌承平元年より朱雀天皇の御代なり正月任土佐守、天慶三年三月任玄蕃頭、同六年正月七日叙從五位上、同八年三月任木工頭、同九年卒、といふ經歷を経てゐるが、享年ははたして何歳であつたか知ることが出来ない。もし古今集の撰者となつたのが、二十二三歳であつたとすれば、景樹のいふやうに、寛平五年に行はれたと考へられる寛平后宮歌合には、彼はまだ八九歳の幼童にすぎぬ。三十四五とすると、延喜五年から逆算して寛平五年は十四年前であるから、二十一二歳で、すでに晴れの歌合に連座したことになるのである。これはしかし考へられないこともないが、景樹は、古今集のなかの、「ゆく年のをしくもあるかなます鏡みる影さへにくれぬとふもへば」から「大凡四十五六歳はかりにやあらむ。」といひ「見る影さへにくれぬといへる語調を見る」に「やうやう老の境に立入つていつかは紅顔の焦衰せるをいまはと嘆じたるにや」と聞えるこいふのである。これは必ずしも四十五六歳ときめる理由とはならない。たとひ三十五六歳ときめても、青年のゆくを惜しむ心として解釋して別に無理もないからである。余はむしろ三十四五歳の方をとりたうと思ふのであるが、彼の家系を見ると、



長谷雄は延喜十二年六十八歳で薨じてゐるが、長谷雄と貫之の父望行とは、まづ同時代の人であると見られるし、年齢もさう異つてゐるとは考へられない。その望行が何時生れて何時死んだのかもわからないが、貫之の年齢を推定する手がかりとなるものは、もうひとつ紀淑光である。この淑光は、承平四年六十六歳で從四位上に叙せられてゐるから長谷雄の薨じた延喜十二年は、四十四歳である。従つて古今集の撰述された延喜五年は三十七歳であるから、貫之の年齢も大體想像出来さうに思はれる。淑光より若いとしてもそれほど違つてゐたとも思はれないし。年長であつたとしても兄の淑望よりそれほど老いてゐたとも考へられない。だからまづ、貫之が古今集を撰述したのは、三十五六歳から四十五六歳までの間であつたらうと思はれる。まづ四十歳前後としたら間違はないわけである。さうすると清和天皇の貞観のはじめ頃生れて、死んだのは八十前後といふことになるから、まづ景樹の推定と同じことになるわけ、土佐守に任ぜられたのは、もう六十の阪を越えてからであつたのである。

枕草子に「除目のほどなど内わたりはいとをかし。雪ふりこほりなどしたるに、申文もてありく四位五位、若やか



にこゝちよげなるはいと頼もしげなり。老いて頭白きなどが、人にとかくあないい、女房の局によりて、おのが身のかしこきよしなど、心をやりて説ききかするを、若き人々はまねをしわらへど、いかでか知らむ。よきに奏し給へ。啓し給へ。などいひても、得たるはよし、得ずなりぬるこそいとあはれなれ」とあるやうに、六十の阪を越えてからも、國守として地方へ下ることを望むものが、なほ多かつたのは、中央にゐて躡踏してゐるよりも、地方へ下つて威張りもし、財産を作つたりする方が、はるかによかつたからである。土佐日記に、貫之が國守の任はてし歸る時の狀を「れいのことゝもみなしをへて、解山などとりて、すむたちよりいで、舟にのるべき所へわたる。かれこれ知る知らずおくりす。」といひ、「藤原言實、舟路なれど馬のはなむけす。かみ、なか、しも、あひすぎていさあやしく、しほうみのほとりにて、あざみあへり」と書いてゐるのを見ても、あるひは、源氏物語明石の巻に、明石入道の館のやうすを「濱のさまげにいさ心ことなり、人繁う見ゆるのみなむみ心にそむきける。入道の領じ占めたる所々、海のつらにも山がくれにも、時々につけて、きようをさかすべき渚の苦屋、行をして後の世のことを思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を立て、三昧行ひ、この世のまうけに、秋の田の實を刈り納め、残りの齡つむべき稻の倉町どもなど、をりく所につけたる見所ありてしあつめたり」とあるを見ても、地方官がいかに勢力あるものであつたか、または有徳のものであつたか想像せられるのである。

貫之のやうに、歌人として中央にあつても相當にもてはやされたものが、自分から望んで地方に下つたとも思はれないが、地方官として任命されることが、光榮でなかつたはずはない。土佐日記に「廿三日山の康教といふ人あり。この人、國にかならずしも、いひつかふものにもあらず。これぞたゞしきやうにて、馬のはなむけしたる、守がらに

やあらむ。國人の心のつねとして、いまはと見えざるを、心あるものは、はぢすきなんきける。これは、ものによりてほむるにもあらず」とあるによつて見ても、國守としての心持を讀むことは出来るのである。

かういふ風に考へて來ると、貫之が六十を過ぎて土佐守として赴任したことも、必ずしも不自然ではないのであつて、やはりその時代の普通の常識として、あたりまへすぎるほどあたりまへのことであつたのである。さうすると、景樹が推定してゐるやうに「承平五年歸洛の時は、七十三四歳」ほどにもなつてはゐなかつたにしても、まづ六十七八歳になつてゐたとは考へられるのである。いづれにしても彼の生年歿年ともにはつきりしたものはないが、古今集を撰した延喜五年は、彼の三十五六歳から四十前後ぐらゐの時だつたらうと考へていゝかと思ふのである。

かういふ風に、傳記さへも定かならぬほど微官にあつた貫之が、後世に謳はるゝ所以は、いふまでもなく、和歌史の上にのこした巨きな足跡によつてである。詳しく言へば、古今集の勅撰といふ大きな仕事を、いくたりかの人の首腦として成し遂げ、後世に範となるべき歌の姿を確定したからである。古今集が、千載の後までも宗として仰がれるだけの魅力を有つてゐるからである。さうして貫之の眼識なり、自信なりをよそにして、この端正優雅な古今集の存在は考へられないとすれば、貫之の歌に對してもつてゐた理解をつきとめることなしに、古今集を理解することは出来ないわけである。古今集の成立に關する内面的の意義もまた、貫之の歌に對する理解の一點に歸納されていゝ筈である。

貫之筆と稱せられて、古筆家の間に珍重がられてゐる高野切と名づけられるものゝあることは、前にも述べたところ



で、假名遣の上から、高野切が貫之の時代まで遡ることの出来ないものであることは、こゝにくり返すことをしまし。たゞそれほどに假名書の名手として世に知られてゐる貫之である。源氏物語にも繪合の巻に、竹取の翁に、空穂の俊蔭をあはせて、竹取は「繪は巨勢の相覽、手は紀の貫之なり。紙屋紙に唐の綺をばいして、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそほひなり」とあるやうに、相當にふるくから、てかきとして尊敬せられてゐるのであるから、たとひはゆる高野切が貫之の時代のものでないにしても、貫之が假名書きの名手であつたといふことだけは、否定できないのである。さうしてこの事實は、貫之が歌よみとして、いかに歌を理解してゐたかといふことをつきとめるに、大事な一面であると余は信じてゐる。それは歌のしらべと詞のつゞけがらとの間には、どうしても離すことの出来ない關係があると信じてゐるからである。

假名がきの美しさは、一字一字の線の美しさだけではなくて、二字三字とつゞけられるところにある。しかもそれが柔かく靱く、太く細く、あるひはまた濃く淡くつゞけられるリズムミカルな美である。かういふ特質のある假名書きの美しさは、歌のしらべのうへに、詞のつゞけがらを左右しない筈はない。もちろん、必ずしも歌のもつてゐるしらべを、そのまゝ線條の上に表はすことが出来るといふのではない。たゞ詞のつゞけかたから生れるリズムミカルな味と柔かく靱く、太く細く、あるひはまた濃く淡く、あるひは走り、あるひは流れるやうな假名がきの線條との間には、殆んど相似的の心持を拘むことが出来ると思へるのである。従つて歌のしらべは假名書きのうへに、假名書きの線の美は歌のしらべに、各々影響しあつてゐると考へていゝと思ふのである。

貫之が假名書きによつて、歌のしらべの上に學び得たものが無い筈はない。上代様の假名に見られる流れるやうに

自然に運ばれて、しかも端正で氣品のあるつゞけがらは、直ちにこれ古今集の歌のしらべそのまゝであると言へよう。貫之の書風がどんなであつたか、高野切がたとひ貫之のものでないにしても、貫之が假名書きから學び得たものは、おそらく、高野切などを中心とする上代様の書風から拘まれるやうなしらべにあつたであらうといふことは、想像にかたくないのである。

かくて貫之は、古今集の序に、歌に對する理解の一端を洩らしてゐるのであるが、古今集の序によつて伺はれるものが、貫之の歌に對する理解の全部であるとは考へられない。これだけの序文に詳説されきらない、細部にわたつた理解を想像するのであるが、歌合の判の詞でもない限り、これを明かにすることは出来ぬ。彼が「このほかの人々その名きこゆる、野邊におふるかづらの、はひひろごり、はやしにしげきこの葉のごとく多かれど、うたとのみおもひてそのさましらぬなるべし」といつてゐるだけで、彼の理想としてゐた「歌のさま」は、たゞ六歌仙の批評からその一端を伺ふことが出来るだけである。

古今集の序文は假名序と漢文序とあつて、その先後については昔から論議されてゐるが、いづれとも決せられない。こゝでその細論をする必要も無からうが、香川景樹のやうに、漢文序を後人の作と見るのは偏見である。さうかと言つて上田秋成のやうに兩序ともに貫之の作とするのも疎断に過ぎる。まづ貫之の假名序が成つて後、淑望の手によつて代作されたものと考へるのが穩かであらうかと思ふ。

貫之が六歌仙を批評した言葉を見て見ると。

一、僧正遍昭は哥のさまはえたれども、まことすくなし。たとへばゑにかけるをうなを見ていたづらに心をうごが



すがごとし。

- 二、在原業平は、その心あまりてことばたらず。あか子(元、俊、節)しほめる花のいろなくて、にほひのこれるがごとし。
- 三、文屋康秀は、ことばたくみにして、そのさま身におはず。およは子(元、俊、節)いはゞあき人のよききぬきたらむがごとし。
- 四、宇治山の僧喜撰は、ことばかすかにして、はじめをはりたしかならず。いはゞ秋の月を見るに、あかつきの雲にあへるがごとし。

五、小野小町は、いにしへのそとほり姫のながれなり。あはれなるやうにてつよからず。いはゞよきをうなのなやめるところあるにがごとし(元、俊、節)たり。つよからぬはをうなの歌なればなるべし。

六、大伴の黒主は、そのさまいやし。いはゞたきとあへる山人の花のかけにやすめるがごとし。

といふのである。これに漢文序を対照して見ると、貫之の言はんとするところが明かになる。すなはち漢文の序にすると、遍昭は「得歌體其詞華而少實」といひ、業平は、心あまりて詞たらずと同じで「其情有餘、其詞不足」といひ、康秀は「巧詠物然、其體近俗也」といひ、また喜撰は、ことばかすかにして、はじめをはりたしかならず」といふより外の意味があるらしく、「其詞麗而首尾停滯、如望秋月遇曉雲」と言つてある。さらに小町の歌については、「艶而無氣力」といひ、黒主については稍詳細に「頗有逸興而體甚鄙」といつてゐる。

この批評を仔細に見ると、その批評の對象となつてゐるのは、様、心、詞の三つであつて、心は歌の内容であり、詞は發表の形式であり、様は歌の調である。かくて遍昭、業平、康秀三人の批評を綜合して考へるに、貫之は表現すべき内容とこれをかざる詞の花とが相具して、しかもその體が鄙俗でなく、ある品格を有つてゐなければ、歌として

理想的のものであるとは言へない。と考へてゐたらしい。しかも表現すべき實よりも、詞の花やかであることを重んじてゐたことは、遍昭が、其詞が華やかで實少なきにかゝはらず、歌體を得たものであると批評してゐるからである。この詞が華やかであるといふことは、たゞ詞の巧みなことではない。たゞ詞が巧みなのは、あるひは、康秀や黒主の場合に就いて明かに言つてゐるやうに、あるひは物を巧に詠することは出来ても、あるひはたとひ逸興あるにしても、必ずしも其體を歌として認容することは出来ない。歌の體が鄙俗であつては、歌の體を得てゐるとは言はれないと考へてゐたのである。おそらく、書體がどんなに巧みでも、必ずしも氣品があるとは言はれないやうに、その體と考へてゐたのである。すなはち調の品格といふものが、たゞ詞の華やかさからばかり生れて來るものではないと考へてゐたことは明らかである。しかも調が歌として要求するものを有つてゐても、その歌に實がなければならぬし、さうかと言つてその調が小町の場合のやうに、艶にあはれなだけで、強い氣力がなければまたいけないと言ふ。假名書きの線が、あるひは細くして靱く、あるひは太くして柔かく、艶にあはれでありながら、氣力に充ちた強さがなければ線條の氣品は生れて來ないのと同様であるやうに、歌の調を理解してゐたのではないかと考へられるのである。

かういふ歌に對する彼の理解は、當時の風潮によく投じもしたであらうし、また彼の自信として當時の好尚を左右もしたであらうと考へる。しかも彼の歌がまた當時尊重せられてゐたことは、彼の家集九卷のうち、四卷までが、ほとんど全部うちの仰せや、高貴の人達の御屏風の歌であつて、記載されたかぎりにおいては、延喜二年左の大臣の北の方の御屏風の歌から、天慶八年二月内の御屏風の料として作られた歌まで、凡そ三十五篇の多きにのほつてゐる。二十首平均としても、御屏風の歌として作られたものが、七百首にも及んでゐるわけである。彼の歌が當時どんなに



迎へられたかは想像するに難くない。

彼の歌は、古今集に撰入せられてゐるのを見てもわかるやうに、大方は端正なしらべであつて、技巧的にいかにも巧緻である。

春たちける日よめる

袖ひちてむすびし水のこほれるを

春立つけふの風やとくらむ

雪のふりけるをよめる

かすみたち木の芽もはるの雪ふれば

花なき里もはなぞちりける

歌奉れと仰せられしによめる

かすが野の若葉つみにやしろたへの

袖ふりはへて人の行くらむ

歌奉れと仰せられし朝よめる

わがせ子が衣はるさめふるごとに

野べのみとりぞいろまさりける

くらぶ山にてよめる

梅の花にほふ春べはくらぶ山

やみに越ゆれどしるくぞありける

初瀬にまうづる毎に宿りける人の家に、久しく密らで、ほどへて後にいたれりければ、かの家のあるじ、かく定かになむやどりはある、といひいだして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる。

人はいさ心もしらすふるさとは

花ぞむかしの香に匂ひける

家がありける梅の花の散りけるをよめる

くるとあくとも目かれぬものを梅の花

いつの人まにうつろひぬらむ

人の家に植ゑたりける櫻の花の咲きはじめたりけるを見てよめる

ことしより春しりそむる櫻花

散るといふことはならはさらなむ

折れる櫻をよめる

たれしかもとめて折りつるはる霞

たちかくすらむ山のさくらを

歌奉れと仰せられし時よみて奉れる



さくら花さきにけらしもあしびきの

山のかひより見ゆるしら雲

七六

これは古今集春上にある貫之の歌をぬき出して見たのである。これ等の歌を流れてゐるしらべは、彼がいはゆる歌の體を得てゐるものとして、自認してゐたものである筈である。さうしてこれ等の歌はまた、詞が花やかに過ぎて實の少ないものでもなく、心あまりて詞足らざるものでもなく、あるひはまた、歌の體が鄙俗であると考へてもゐなかつた筈である。しかるにこれ等の歌を見るに、調の點においては、よく鄙俗を脱して、氣品のある、典雅端正といはるべき姿であらうが、心詞を彼のいふ通り受けとる事が出来るかどうかは考へものである。

いつたい遍昭や康秀の批評によつても伺へるやうに、貫之は歌を表現的のものとは考へてゐたとは思はれない。景樹のしらべ論によるまでもなく、強い心持は強く、弱きものは弱いしらべを作ると考へるが表現的態度である。それなのに歌のしらべは調つてゐてもその實が少ないといひ、詞は巧みであるが心が俗だといふのは、表現的態度でないことを語るものである。しかも彼の心といひ實といふ心持の内容が、必ずしも心情そのものではなかつたらしいことは彼の歌がそれを有力に物語つてゐる。

もちろん最初の「——氷れるを春たつけふの風やとくらむ」において、彼の目ざしてゐるものは、立春らしい心持ではある。しかしそのみが彼のいふ心や實ではない。氷れるをといふために、袖ひぢてむすびしと仕立てられる思ひつきもまた彼のいふ心であり實である。序の詞としてはこぼれるものが、ある役目を持つてゐなければならぬ。それはいかにも尤もだと思はせるものであつて、幼稚な理である。理に、つんでゐると思はせるものである。であるか

ら、第二の歌のやうに、「かすみたち木の芽もはる——」といふやうに言葉の上の相関が重要視せられるし、「——花なき里も花ぞちりける」と譬喩が、表現的の意味をもつものとしての譬喩ではなくして、たゞ尤もであると思はせるための譬喩となる。それがまた彼の心であり實である。あたゝかくふる雪にかすみ、早春らしい心持を流して來たしらが、卒然として轉換せられるやうに思はれる所以はそこにある。だから、ある心持を直接に表現するといふ態度ではなくて、常に美しく巧に表現しようといふ心持がつきまとつてゐる。常にある種的美を追ひ、美に陶醉しようとしてゐる。「くるとあく」といひ、「ことしより春しりそむる——」といひ、あるひはまた「たれしかも——」といふやうに、自然の美を寫すといふよりも、美しい自然の模様を織りなさうといふ風になるのは、ある趣向の美に情趣を見つけてゐるからである。趣向がきわめて單純で、情趣が勝つて來ると「さくら花さきにけらしも——」といふやうな佳調も生れて來るのである。

かういふ風に見て來るに、貫之が歌といふものをどう考へてゐたかは明瞭である。彼の「心」といひ「實」といふのは、直接に表現せられた心情ではなくして趣向である。あるひはまた趣向によつて生れて來るほのかなる情趣である。しかもこのほのかなる情趣はまたしらべを左右する。假名がきにおける墨の濃淡や、線の強弱が、全體としての調子を左右するやうに。けれども貫之は明瞭にそのへんの消息を反省してゐたものではなからうけれども、詞が巧であつても、しらべの上にほのかなる情趣を描き得ないものに對しては、品格を認めてはゐなかつたと解釋できるのであるから、ある模様が何かしらある情趣を表現するやうに、直接に自然から受けるものとは別個に、いはゞ自然からまつたく切り離されたある情趣を趣向のうちに求め、しらべに聴かうとしてゐたと思はれないのである。一般的に



彼が理知的の態度であると評される所以はこゝにあるのであつて、彼の歌が端正で綻びのないのは、またこゝにあるといへる。彼が心情のまゝに、自由に奔放にうちまかせて歌を詠んだとすれば、あるひはかういふ端正なしらべは作り得なかつたかも知れぬ。従つてまた、いはゆる古今調といふひとつの風體をも、決定し得なかつたであらうともいへる。かくて古今集のもつてゐるしらべの世界は、貫之が理知的であつた故に作られ得たといふことにもなるのである。村田春海は、「歌がたり」に「調の整ひたるまことのさまをよく知らむと思はゞ、古今集をよく味はふべし。古今集は調をむねとえらべるものなり。古今集に深くなれて、そのあちはひをこゝろ得て後、あだし集どもを見れば、そのけぢめ明かに知らるべし。三代集といへば、同じさまのものなりと大方の人は思ふらめれど、後撰、拾遺のふたつは、調わろき歌もまじりて、古今と同じなみにいふべきならず。また萬葉集はもと撰べるものならねば、わろき歌なむ多かめる。これが中にすぐれたる歌に至りては、詞高きこと似るものなし」と言つて、古今集がしらべに於いてすぐれてゐるのは、しらべを主として撰擇されたものであるからだと断定してゐるが、貫之が、趣向によつて描かれるほのかなる情趣と、そのほのかなる情趣を融かしたしらべの端正さを重んじてゐたことを、どうしても認めなければならぬのである。彼の歌が叙情的で主觀的に聞えるのは、こゝから來るのではないかと考へる。貫之に對して少し詳しく述べすぎた感があるから、この位にして、更に他の撰者たちを一瞥したいと思ふ。

貫之と對して、古今集撰者の双壁とも考へられるのが凡河内躬恒である。彼は、寛平六年甲斐權少目に任ぜられ、延喜七年、丹波權少目となり、御厨子所兼務、延喜十一年和泉權掾に、それから淡路權掾にもなつてゐるが、いつのことかはわからぬ。

甲斐の國へまかりける時道にてよめる

夜をさむみおく初霜をはらひつゝ

草の枕にあまたゝびねぬ

とあるに對して

こゝの國へまかりける時白山を見てよめる

きえはつる時しなれば越路なる

しら山の名は雪にぞありける

といふ歌を作つてゐるのであるから、越前あたりの國守をつとめたことがあるのではなからうか。

日本文學者年表によれば、貞觀元年に生れて、延喜七年四十八歳で歿してゐるやうであるが、躬恒集によれば、延喜廿年二月二十七日遠江守の饒に右近少將にかはつて、

別るとも君をしらねば今朝までは

散る花をのみ惜しみけるかな

といふ歌があり、延喜廿一年二月七日、法皇六條の御息所春日にまうづる時に、大和守忠房朝臣あひかたらひて、この國の名所の和歌八首をよむべき由かたらふによりて六首おくといつて

故郷の春日の野へのくさも木も

ふたゝび春にあふことしかな



以下六首の歌があるから、少くとも延喜廿一年まではこの世にをつたわけである。延長のはじめごろまで生きてゐたのではないであらうか。

物思ひける時いときなき子を見てよめる

今更になに生ひづらむ竹の子の

うきふししげき世とはしらすや

き子どもを見ては歎き、

除目の朝に思をのぶ

都にて春をだにやは過してぬ

いづちに鴈の鳴いてゆくらむ

に西に漂泊してゆく人のやうに、都の花を惜しんで離別の涙をそよぎ、あるひはまた、

延喜の御時にみづし所にさぶらひける時しづめるこゝを歎きてある人におくり侍りける

いづことも春の光はわかなくに

まだみ吉野の山は雪ふる

みな人は花の衣を着るなかに

ひとりぞ老にしづみはてぬる

今までに出たたぬ身はもしきの

宮の櫻を見てややみなむ

わび人の思ふこゝろを散る花に

そへて雲井に吹きつけよ風

うたゝねの夢にやあらむ櫻花

はかなく見えてやみぬべらなり

世にも似ずかたなさけてふ紫の

花ゆゑにこそ春も惜しけれ

といふやうに、あるひは老ひて沈淪してゐる身を歎き、出世を諦めて、せめて大内の櫻をこの世の思ひ出にと思つて見たり、あるひはまた頼みかたなき世をうらみしてゐるところを見ても、彼が一生をたゞ不遇に泣いて過した人であることが思はれる。貫之が延喜六年漸く甲斐少掾になつてゐるのに、寛平六年すでに甲斐権少目に任ぜられてゐるところを見ると、貫之より年長ではなかつたらうかとも思はれるのであるが、よくわからぬ。貫之とは、非常に交情も濃やかであつたらしい。あるひは、さう年齢はちがはなかつたのかもしれない。貫之の歌に、

躬恒がもとにまかりてつとめて

ちらぬほどに一枝もがな櫻花

君がかたみに今朝見まくほし

みつねかへし



わが戀ひて見むとないひそ櫻花

ふりにし雪のかたみとをいへ

索性うせぬといひて躬恒がもとに送る

石の上ふるく住みにし君なくて

山のかすみはたちゐわぶらむ

躬恒かへし

君なくてふるの山への春霞

いたづらにこそたちわたるらめ

とある又の日

うせにしと身こそ聞ゆれ石の上

ふるき名うせぬ君にぞ有りける

凡河内躬恒がおもしろ夜きたるによめる

かつ見れど疎くもあるかな月影の

いたらぬ里はあらじと思へば

躬恒が

まことなき物とおもひしを偽に

なみだはかねておとささらまし

とあるかへし

をしからぬ命なりせば世のなかの

人のいつはりになりもしなまし

七日の朝に躬恒がもとより

君に逢はで一日ふつかになりぬれば

今朝ひこぼしのこゝちすらしも

とあるかへし

逢見すて一日も君にならねば

たなばたよりもわれぞまされる

躬恒がもとより

草も木も吹けば枯れゆくあき風に

さきのみまさる物おもひの花

とあるかへし

ことしげき心よりさく物思の

花の枝をやつらづゑにつく



などの歌を贈答してゐるのでも知られる。同じやうな境遇にあつて、歌のうへでおのづから親しいゆききをしてゐたものであらう。しかるに貫之は素性の死をいたみ、友則の死に對しても

紀友則がうせたるによめる

明日しらぬ我身と思へどくれぬまの

けふは人こそ悲しかりけれ

と詠んでゐるのに、躬恒やほかのものゝ死をいたんだやうな歌が残つてをらない。たゞ

世の中のはかなきを見てよめる

昨日まであひ見し人の今日なきは

山の雲とぞたなびきにける

うけれどもいけるはさてもある物を

死ぬるのみこそ悲しかりけれ

などといふ歌が、彼の親しくしてゐた人々のはかなくなつてゆくを見て詠んだのであることは明かであるから、想像すれば、友則がゆき躬恒が死んでゆく、さういふぐるりを見て、心細くなつて讀んだのかも知れぬ。

古今集春の部から、躬恒の歌をあげて見ると

かりの聲をきよて越へまかりける人を思ひてよめる

春くれば雁かへるなり白雲の

みちゆきぶりにことやつてまし

月夜に梅の花を折りてと人のいひければ折るとよめる

月夜にはそれとも見えす梅の花

香をたづねてぞしるべかりける

春の夜梅の花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅の花

いろこそ見えね香やはかくるゝ

櫻の花のさけりけるを見にまうで來たりける人によみておくりける

わが宿の花見がてらに來る人は

ちりなむのちぞ戀しかるべき

さくらのちるをよめる

雪とのみふるだにあるを櫻花

いかにちれとか風のふくらむ

うつろへる花を見てよめる

花見れば心さへにぞうつりける

いろにはいでし人もこそしれ



鶯の花の木にて鳴くをよめる  
しるしなき音をもなくかな鶯の

ことしのみちる花ならなくに

家に藤のさけりけるを人のたちどまりて見けるをよめる

わが宿にさける藤波たちかへり

すぎがてにのみ人の見るらむ

春のとくすぐるをよめる

あづさ弓春たちしより年月の

いるがごとくもおもほゆるかな

やよひのつごもりの日花つみより歸りける女どもを見てよめる

とどむべき物とはなしにはかなくも

散る花ごとにたぐふころか

亭子院の歌合に春のはての歌

今日のみと春を思はぬ時にだに

たつことやすき花のかけかは

貫之の歌に比較して、躬恒の歌にはいつでもどこか一脈の寂しさが、忍ぶやうにしらべの間にもれてゐるのを、見

逃すことが出来ない。同じ美としての対象をとらへながらも、躬恒は貫之のやうにひとたびは必ず理知のうへにのせて見るやうなことをしない。もつと言ひ換へれば、貫之がしらべの上に浮び出させた情趣は、自然のうちに覺めた情趣ではなくして、むしろ自然から切り離して理知のうちに作りかへられた情趣である。しかるに躬恒の歌に拘まれる一脈の寂しさは、自然のうちに覺められ、対象のうちに拘まれた情趣である。貫之の歌を、春のおぼる月夜の艶なるに奏でられる琵琶とすれば、躬恒のうたは、秋のさえわたつた月に、さみしく澄みのぼる笛の音にも喩へられよう。興に乗じ、感に應じて唇を破つてもれいづる自然のこゑとも聞えるのが躬恒のうたである。

北にはるかにゆく雁に白雲遠き人を思ひやり、暗香浮動といつた、なまめかしからざる春の夜を思ひ、櫻のさかりを見ても、散つての後がまづ思はれるといふやうな心持は、求める美は同じ美であるが、明るい花やかな美ではない。恍惚として美に陶醉する心でもない。躬恒の歌は、貫之と比較してそれだけの徑庭がある。「——ちりなむのちぞ——」「——かにちれとか——」「——しるしなき音をも——」「すぎがてにのみ——」など、しる心は、明るい花やかなものに陶醉してゆく心から生れるしらべではない。むしろ明るい花やかなものに陶醉し得ない、覺めたるものが常に濃情のかけに澄んでゐるからである。美を美として受けいれるためには、必ずひとたび理知のうへに吟味しなければをられぬ、貫之の理知的態度に比較して、理知が情感のはたき方を督視してゐるのである。しかしまた理知が情感に乗つて飛躍する場合には、「あづさ弓春たちしより——いるが如くに——」といふ風に、口とく、舌のまわりよく轉げでる。

醍醐天皇が月を弓張といふはとの仰せに



照る月を弓張ともしもいふことは

山べをさしていればなりけり

と、口のしたから立ちどころに御答へ申し上げたのに、叡感のあまり大袈賜へるを肩にかけて、拜舞して退きながらさらに

白雲のこの肩にしもおりゐるは

天つ風こそ吹きてきぬらし

と詠んで面目をほどこした話は有名である。

秘藏抄（または古今打聞といふ）が彼の作として傳へられてゐるけれども、後人の偽作であること明かである。

紀友則は大日本史によれば、宮内權少輔有友の子といひ、あるひは有常の子といふ。承和二年に生れて、延喜五年六十歳で死んでゐる（日本文學者年表による）が、詳細は知りたい。彼の父もまた歌をよくしたらしい事は

親のよみたりける歌ども書き集めて、惟喬のみこにとらすとて奥にかきたりける

ことならば言の葉さへも消えななむ

見ればなみだの瀧まさりけり

といふ歌が古今集哀傷の部に出てゐることによつて知られる。寛平九年土佐掾となり、寛平十年少内記に、延喜四年大内記に任ぜられ、六位を授けられてゐる。彼の死をいたんで貫之が「明日しらぬわが身と思へど——」の歌を詠んでゐることは前にも述べた。彼が藤原敏行の死んだのをとぶらつて

寝ても見ゆねでも見えけり大方は

うつせみの世ぞ夢にはありける

と讀んだ歌が、古今集哀傷の部に出てゐる。人の死がやがて自分の上に来ようとは夢思せなかつたであらう。日本文學者年表には、敏行の死を延喜七年としてゐるが、どういふ根據があるのだらう。敏行の方が友則よりさきに死んでゐる筈なのに、日本文學年表は、前に述べたやうに、友則の方がさきに死んだことになつてゐる。敏行は業平時代にをつた人であるから、おそらく友則より先輩でもあり、友則の歌を信用するのが當然である。それはともかく、彼の歌は、貫之に似て非常に格調を重んじてゐる。「あるかな」「けるかな」「なりけり」など、助動詞を多く用ひて結び、流麗典雅を喜んだといふことは、すでに藤岡博士のはやく指摘してゐるところであるが、友則は貫之よりも一層美を美として表現することに努めてゐるやうに思ふ。

春立つ日

水のおもにあや吹き亂る春風や

池の氷をけふはみくらむ

梅の花折りて人にやるとて

君ならで誰にか見せむ梅の花

いろをも香をも知る人ぞしる

さくらの花のちるをよめる



久方の光のどけき春の日に

しづ心なく花のちるらむ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

さみだれに物思ひをれば郭公

夜ふかくなきていづちゆくらむ

是貞のみこの歌合の歌

秋風にはつ雁がねぞ聞ゆなる

たがたまづさをかけて來つらむ

雪のふりけるを見てよめる

雪ふれば木ごとに花ぞさきにける

いづれを梅とわきてをらまし

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

川の瀬になびく玉藻のみがくれて

人にしられぬ戀もするかな

題しらす

東路のさやの中山なか／＼に

なにか人を思ひそめけむ

春霞たなびく山の櫻花

見れども飽かぬ君にもあるかな

方たがへに人の家にまかれる時にあるじのきぬを着せたりけるをあしたにかへすとてよみける

蟬の羽のよるの衣はうすけれど

うつり香こくもにほひぬるかな

友則の作中、まづ佳調と思はれるものを拾つて見たのであるが、古今集時代を浸してゐた技巧的態度、——ある美の世界を作るために、常にある趣好を考へるといふ風は、もちろん友則にもある。すでに言葉のうへだけではなくて、物の見方がさういふ風になつてゐたのである。友則は貫之の先輩であつたのであるから、友則などの風が、貫之などに影響したと見るべきである。物を美しく見ようといふ態度は、ある対象に對して、必ずある美の條件を見付けようとする。貫之にあつては、かくして求めた美の條件を、いかに組みたてるべきかといふことよりも、美としていふべられるには、いかに趣向すべきかといふところに、常に關心の焦點がおかれた。しかし友則は、いかなるものが自然の美としての條件であるか、それをいかに組みたてたらいふか、問題とせられた。池の氷をふきとく春風を、あやふきみだると見る心はそれではないか。梅の花の色香を、「君ならで誰にか見せむ——知る人ぞ知る」と観ずるのは、彼が一般的には語り得ない美であつた筈である。「久方のひかりのどけき——」は、あらゆる美としての條件を、完璧の姿に組みたて得たものであらう。「——木ごとに花ぞさきにけり」と歌ふのは、そのまゝの美として現



はされる爲ではなくて、「しづれを梅にわきてをらまし」といふためである。花とも分ちがたい美として見るには、「木ごとに花ぞ——」と用意されなければならぬ。これが言葉のうへだけで趣向されると、「——さやの中山なかなかににしか——」と疊んで来る。ふかく美をさぐる心はまた、あるふかい心を求めるやうにもなる。「さみだれに——夜ふかく——」「秋風に——かけて來つらむ」「——なびく玉藻のみがくれて——」といふやうな心持がそれである。

かくて友則の歌は、しつとりとおちついて花やかになりすぎず、花やかでさみしいところがある。たとへばしづ心なく花さへちるに、しかも春の光はどこまでも長閑である。しかしとにかく貫之ともに、古今集の明るい一面を代表するものと言つてよからう。

壬生忠岑は、從五位下安綱の子であると傳へられる、はじめ右近衛大將藤原定國の隨身だつたが、累進して左近衛番長、右衛門府生、御厨所領となり、六位を授けられた。藤原定國の隨身だつた時のこと

泉大將、故左大臣にまうで給へりけり。ほかにて酒などまわり、酔ひて夜いたく更けて、ゆくりもなくものし給へり。大臣驚き給ひて「何處にもものし給へる使にかあらむなど聞え給ひて、御格子あげ騒ぐに、壬生忠岑御供にあり。御階の下に松ともしながら、ひざまづきて御消息申す

かさゝぎの渡せる橋の霜の上を

夜半に踏み分けことさらにこそ

となむ宜ふと申す。主人の大臣、いとあはれにをかしと思して、その夜ひと夜、御酒まわり遊び給ひて、大將にも

のかづけ、忠岑も祿賜はりなどしけり

といふ話が、大和物語に出てゐて有名である。後鳥羽院が、侍臣に古今集の秀歌を問はせられたところが、定家家隆ともに忠岑の

ありあけのつれなく見えし別より

あかつきばかり憂きものはなし

を第一として擧げたといふ話もある。日本文學者年表には、貞觀十年に生れ、康保二年歿したことになつてゐる。さうすると九十七歳までも生きてゐたことになる。これはどうも疑はしい。もし彼が康保までも生きてゐたとすれば、天曆の御時のことについて、何か歌でもありさうに思はれるが、さういふ片影さへない。躬恒と詠みかはした歌四首、

待つほどはたのみも深し夜をこめて

起て別るゝことはまされり

身を知ればいづる涙もあはれなり

春のながめは常にふること

秋はつることは哀もまさりなむ

いりぬる月は夜のまばかりと

思ひやる心のほどは果もなし



風のいたらぬくまはおほかり

友則が「失せにける」時に

折しもあれ秋やは人の別るべき

あるを見るだに戀しきものを

などによつて、彼等の交情が、かなり濃やかなものであつたことを想見するに足る。

彼の歌は、古今撰者中、おそらく最も眼はし、のきく、きびきびしたものであらう。古今集のはじめから二三擧げて見る。

春のはじめの歌

春きぬと人はいへども鶯の

なかねかぎりはあらじとぞ思ふ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

くるるかと思ればあけぬる夏の夜を

あかずとなくややまほととぎす

早くすみける所にて時鳥のなきけるをきよてよめる

むかしやいまも戀しき郭公

ふるさとにしもなきてきつらむ

などの歌の、きびきびした調子は、はじめをはりがいかにもたしかで、まぎれる節もない。印象がいかにも鮮明である。

是貞のみこの家の歌合によめる

ひさかたの月の桂も秋はなほ

もみぢすればや照りまさるらむ

山里は秋こそことにわびしけれ

鹿の鳴く音にめをさましつゝ

かみなびのみむろの山を秋ゆけば

錦たちきることちこそすれ

寛平の御時後の宮の歌合のうた

みよし野の山の白雪ふみわけて

いりにし人のおとづれもせぬ

かきくらしふる白雪のしたぎえに

きえてもの思ふころにもあるかな

淡々として清雅の調をなし、知巧的ではあつても、才氣縦横、快よきしらべである。貫之に對する躬恒のやうに、友則といふ對照である。



古今集時代の女流に忘れてならぬ伊勢がある。あるひはまた、素性法師、在原元方、藤原敏行、興風、坂上是則、大江千里等一瞥すべきであるが、古今集の歌人に少し紙数を費しすぎた感があるので割愛しなければならぬ。しかし四人の撰者の大體の傾向を知ることによつて、古今集はこれを盡すことが出来ようと思ふのである。

かくて古今集を頂點として歌はふたゝび衰へる。歌がしかし、更にいかなる経路を辿るかは、章を改めて述べる方が便宜であるから、後章にゆづることにして、まづ平安朝初期に於ける散文文學が、いかなる情勢にあつたかを見なければならぬ。

### 第三章 初期の散文文學

#### 第一節 伊勢物語

和歌を中心としてあらゆる國風の復興は、貞觀に至つてやうやく足なみを整へて來た。さうして國風復興の機運とともに、文學界における和歌の地位が自ら高まり、日かげものゝやうしてゐた和歌が、さしも隆運を極めた詩文と同等の地位におかれるやうな状態になつた時代に、伊勢物語のやうなものが、最初の散文文學として現はれるのは、當然の成ゆきであることは前に述べたところである。さうしてまた伊勢物語が、和歌のはしがきから展開せられたものであるといふことも前に述べたところであるが、はたして業平の作であるかどうか、詳しく内容を検討することによつて、その作者や製作の年代が推定せらるべきである。

伊勢物語は古く、在中將伊勢物語、在五中將物語、あるひは在五中將日記とも言はれてゐる。これは、業平のひと

つの傳記として認められてゐたことを示してゐるのである。さうしていろいろの名をもつて傳へられてゐるやうに、いくつかの異本があつて、内容も少しづつ違つてゐる。流布本は、大體百二十五段、和歌が二百五首ある。袋草紙によれば、和歌二百五十首であるが、塗籠本が百十四段、和歌百五十六首である。その他定家等の天福本、小松帝の宸筆本あるひはまた、眞字本などがある。各異本はそれぞれの特色はあるが、流布本に従ふのが最も穩やかであらうと思つてゐる。

伊勢物語が在五中將日記といふやうに呼ばれてゐたのは、業平の傳記のやうに認められてゐたからであると言つたが、はたして彼の自記であるかどうかはわからない。そのうへ伊勢物語は、その全部が業平の歌で成立つてゐるのではない。あるひは芹川行幸の折の行平の歌があり、在原元方、紀友則、壬生忠岑、更になほ天曆頃の橘直幹の歌さへもはいつてゐる。さうすると、たとひ業平自記の部分があるとしても、後人の補綴に成つたものであることは明かである。加納諸平は、

「前略とはもと在中將の自記に有りし事どもをひきいで、あらぬさまに作りたればなり。作れる時代は後撰の次といへる説正しかるべけれど、惟喬親王の御上に付きて、彼の朝臣の世をうとましう思ふ頃、來し方の事とも、また詠める歌など、心なぐさに自ら書き置かれし記の、笥の底などに残りて世に傳はりためるまゝに、古今集にも其記より撰り出で、載せられたるなるべし。そは彼の集に入りたる歌の端書ことに長く、また伊勢物語と、をさをさたがはぬもあるにて知られたり。」

と言ひ、さらに言葉をつゞけて

「斯くて好事好める人のあらぬさまに作りなして、異なることをも加へて、初冠より身まかれるまで、業平の事に



て、業平ならず、たしかにそれとわき難く書きひがめたるなむ作者の心しらひにて、それ即て僻事物語にはありける。かゝれば、いづれを自記の條、いづれを加へたる條とも、作者を離ちては其世にても定かには別ち難かりけり。

(中略) これは二條の後云々などいへるは、後人の裏書なりといへど、朱雀院の塗籠本をはじめて、いづれの古寫本にも見えたれば、もとよりありしにて、やがて作者自ら書きたる裏書なるべし。彼の御兄達の見つけ給へるなど自記にもさる様にありけむを、鬼に喰はれたりと作り更へたるなど、作者の面白き趣意なるを、其事知られざれば夜の錦なりとて、裏書になしたるにこそあれ。かゝれば此の裏書の事ども、なか／＼確かなるがあり。東下りは跡なし事を彼の朝臣の造り設けたるやうに言ふ人もあるは、史に見えぬになづみて言へる論にして取るにも足らねど彼の條にもあらぬことを書き加へたりとは見え、舊説に「伊勢の卿の書き續ぎたり」といふはうけがたけれど、自記の有りしに後人の書き加へたりといふ證にはなりぬべし云々」

と言つて、業平自記のものがあつてそれに後人の書き加へたものであることを主張してゐるが、聞くべきものがある。もちろん清輔や眞淵の考を踏襲して、伊勢といふ名が僻事の意であるとし、業平の事にて業平ならざるやうに書きひがめたといふ説は首肯しがたいが、後人が業平の自記に異なることを書き加へて、業平の事にて業平ことならぬひとつの物語——小説として作り上げたものであるといふことは、動かすことが出来ないところであらう。しかしはたして彼等のいふやうに、伊勢が後撰集以後のものとするが正しいかどうかは、俄に定めがたい。それは今流布されてゐるものを、伊勢物語の原形として認めるからであつて、はたして今に傳へられてゐる伊勢物語が、もとの姿としてゆるすことが出来るかどうかは問題である。古今集が勅撰當時の姿のまゝでなく、多少後世の摺入があるやうに

傳寫の間に書き加へられるといふことはあり得ることであるから、次第に原形から遠ざかるやうになつたであらうと考へられないでもない。さうすると業平自記のものがあつた筈であるといふことになるが、はたしてどれだけ業平自記のもので、どれだけが後人の手になつたものであるか、知りたい。

芹川行幸の段や、天曆頃の歌が混入してゐるといふ故をもつて、後撰集以後のものであるとすることが出来ないとするれば、伊勢物語ははたして何時ごろ出来たものであらう。伊勢の家集と文體が似てゐるといふので、舊説に伊勢が補つたものと言はれ、それがまた伊勢物語と名づけられる所以だといふけれど、その筆つきを見たら、伊勢物語が決して女の筆でないことは一目で知れることである。文體が簡古で、貫之以前のものであることは、誰が見ても知れる。作者がたとひ業平でないにしても、業平の時代のものであることは、まづ間違ひはあるまい。さうするとかういふものを作らうといふものはまづ業平を置いて他にないことになる。無名草子に「伊勢物語など申すは、たゞ業平が好き心のほど見せん料にもしたるもの」であると言つてゐるが、好き心を見せんためでないにしても、これ程氣のきいた、情熱的な、生活の記録は、和歌が戀愛の世界に活躍して、いはゞ色好の家に埋木のやうにしてゐた時代の人の心を、そのまゝ寫したものであることは疑はれない。才氣縦横にその情熱を歌ひ流した業平の歌の姿は、そのまゝ伊勢物語の文章にも見ることが出来るとすれば、日本後紀の作者をして「體貌閑麗、放縱不拘」と評せしめたほどの業平の作としても、決してふさはしからざるものではないと思ふ。そのうへ、在五中將日記といふやうに傳へられてゐたといふことは、すでに彼の作でないまでも、彼の作としてふさはしいものであるといふことを、有力に裏書してゐると思ふのである。前にも述べたやうに、たゞ後人が傳寫の際、さかしらに、あるひはものすきから摺入をあへてし



たために、原形に疊りが出来て、つひに後世その作がいつれの人の手になつたか、茫漠として揣摩臆測をさへゆるさないやうなものになつたと見るべきではないだらうか。

伊勢物語は、和歌のはしがきの延長展開として見るべきであるといふことを前に言つたが、和歌のはしがきから出来上つてゐるといふ意味ではない。常に和歌を中心として、あるひは和歌によつて小説的場面が描かれてゐる。従つてある歌が、小説的事件の中核をなすものとして、歌本來の意にはまつたく無關係な場合に轉用されるやうな事がたくさんあるのがある。たとへば

わがうへに露ぞおくなる天の川

とわたる船のかひのしづくか

といふ歌は、古今集にも出てゐるが、これは秋の星月夜の空を仰いで、冴えわたる星かげの冷かなるに、袖もしめり渡るやうにおもはれる氣持を歌つた歌なのに、伊勢には、

「昔男京をいかと思ひけむ、ひむがし山に住まむと思ひいりて、

住みわびぬ今はかぎりと山ざとに

身をかくすべき宿もとめてむ

かくて、ものいたく病みて死にいたりたりければ、面に水そゞぎなどして、いきいでゝ

わがうへに露ぞおくなる天の川

とわたるふねの權のしづくか

となむいひていきいでたりける

と作つてゐる。一讀して小説の場合に都合よく轉用されてゐることがわかる。あるひは「春日野は今日はな焼きそ

——」を「武藏野はけふはなやきそ——」と作り換へられたり、あるひはまた、古今集夏の

ほとゞぎすなが鳴く里のあまたあれば

なほうとまれぬ思ふものから

といふ歌を

「昔、賀陽親王と申す皇子おはしましけり。その親王女を思しめして、いとかしこゝ恵みつかう給ひけるを、人なまめきてありけるを、われとのみ思ひけるを、また人聞きつけて、文やる。郭公のかたをかきて

郭公汝がなく里のあまたあれば

なほうとまれぬ思ふものから

といへり。この女、けしきとりて

名のみたつしでの田長は今朝ぞなく

庵あまたにうとまれぬれば

時は五月になむありける。男かへし

庵おほきしでの田長はなほたのむ

わが住む里にこそし絶えずは



と巧に繰り込まれる。あるひはまた

五月待つ花桶の香をかけば

むかしの人の袖の香ぞする

とあるを、

「昔男ありけり。宮仕いそがはしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の國へいにけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある國の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、女あるじにかはらけとらせよ、さらすは飲まじ、といひければ、かはらけ取りて出したりけるに、看なりける桶をとりて、

さつきまつ花桶の香をかけば

むかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひいで、尼になりて、山にいりてぞありける

と都合よくとりいられるといふ風なのである。かふいふ風に見て来ると数かぎりないものであるが、常に歌が小説的の場面を構成する核心となつてゐることを知ることが出来よう。かくて業平自身に關する、あるひは業平らしく思はれる戀愛談を中核として、幾多の小話が雜然として展けられてゆくので、讀者にはいつでも業平のこととして印象しつゝ、絶えず變轉してゆく興味のなかに引き込んでゆくのである。

であるから伊勢物語の有つ文學的の興味は、業平ならぬ一個の業平が、いろんな戀愛の相を見せながら活躍して、嘗在してゐた業平として浮び上つて来るところにある。さうしてしかも業平を中心として、王朝の黎明期における男女

の生活を、隅なく照らし出してくれる所にある。自分たちは伊勢物語のうちに、影繪のやうに活躍する多くの人物を遠い夢の世界に眺めるやうに、ひとつの繪巻物を心象に描きつゝ讀むことが出来るのである。伊勢物語の短かい描寫は、そこに巧みに織り込まれた歌を、それほど十分に生かしてゐる。しかもその文が簡潔蒼古、よく時代の空氣のうちに讀者を誘つてくれる、が、を、にといふやうな且爾乎波によつて煽々と長く連續して、女の姿を思はしめるやうな後期の物語とは、そこに長い時代の隔りのあることを思はしめるものが十分にある。

かくて伊勢物語の文學的價值は、後世永く歌よむものゝ必ずよまなければならぬものとして、源氏物語と肩を並べて尊重せられたほどである。伊勢物語が必ずしも好色家の記録としてのみ見られてゐなかつた事實は、源氏物語の繪巻の卷に

「次に伊勢物語に、正三位をあはせて、また定めやらす、これも、右はおもしろく賑はしく、内裏わたりよりはじめ、近き世の有様を畫きたるは、をかしう見所まさる。平内侍

伊勢の海のふかき心をたとらずて

ふりにし跡と波やけつべき

世の常のあだことのひき繕ひ飾れるに壓されて、業平が名をやくたすべきと、争ひかねたり。右のすけ

雲のうへに思ひのぼれる心には

千ひろの底もはるかにぞ見る

(藤壺)兵衛の大君の心高さは、げに捨てかたけれど、在五中將の名をば、得くたさじ、と宣はせて、宮



見るめこそうらぶれぬらめ年經にし

いせをのあまの名をやしづめむ

云々と、あるひは平内侍の口を借り、あるひは藤壺の口を借りて辯護してゐるのは、この時代に伊勢物語がいかにながめられてゐたかを、伺ふに足るのである。

伊勢から大和物語へ移る前に、物語のおや竹取物語を見なければならぬ

## 第二節 竹取物語

源氏物語に、物語の祖として傳へられてゐる竹取物語は何時ごろの作にかゝるものであるか。かういふ物語がどうして生れるやうになつたか。伊勢物語の次に竹取物語を述べるのは、別に伊勢物語が竹取物語より以前のものであるといふわけからではない。和歌を中心として物語を見ようとした便宜に従つたまでのことである。

宣長は玉の小櫛に「誰が何時の代に作れりとは、さだかに知られねども、いたく古きものとも見えす。延喜よりは以來の物とぞ見えたる」と言つてゐるけれども、伊勢物語と同じやうに、延喜以前のものたることは、すでに衆論の一致するところのやうである。それはたとひ、源氏物語の繪合の巻に「繪は巨勢相覽、書は紀貫之かけり」とあるのが、歴史的に信ずるに足らないものであるにしても、なほこの物語が延喜以前の作として認められる理由はいくらもあるのである。だから、竹取物語抄などにも引かれてゐる、田中大秀の竹取物語解の説が、まづ穩やかでないかと思ふ。

「源氏物語に、繪は巨勢の相覽、書は紀貫之書けりと見ゆれば、延喜のあなたよりありし物なるべし。元來、作物語なれば、拘はるべき事にはあらざらめれど、彼物語はつくり主のいたく心しらひせられたる物なれば、徒然草にいへる。小野道風の書ける朗詠集のたぐひにはあらで、古よりもあそびて、時代も似つかはしければこそ、相覽貫之主などの物せられつるよしに云はれけめ

といふのが彼の説である。しかるに、入江昌意は「松浦物語の奥書に貞觀三年四月十八日云々とあり、然るに紫式部、物語の出来はじめのおやなる竹取と云へり。しかればなほ貞觀の頃よりも古き物と見るべし」と言つてゐるが、これは小山篁がすでに竹取物語抄に「時代大抵さることながら、此奥書は不審しく信じがたくこそ思ほゆれ、と疑つてゐるやうに、あてにはならぬ。藤岡博士が、「松浦物語は、實は鎌倉時代のものなるべし、貞觀の奥書はもとより虚偽の言なれば、これをもつて竹取の時代を定むるは、歪みたる尺度を以て物を測るなり」と言つて否定し、更に竹取物語新釋の説をも擧げてこれを駁し、「文體を見れば、その古樸なる風容、必ず宇津保、源氏に先だち、貫之の散文にも先だてるを知るべし」と言つてゐるのが、まづ従ふに足る説であると思ふ。

竹取物語のやうな傳奇的の物語本、伊勢物語のやうなものと相前後して出て來たのには、何か理由がなければならぬ。國語に對する覺醒は、當時鬱勃として漲つてゐたいろんな要求を充たすために、その活動はますます熾んに、つひに伊勢竹取の出現を見るまでになつた。といふやうなことを序論にも述べたが、たゞそれだけで竹取物語の出現を説明しつくすことは出來ない。

物語に對する要求は、すでに奈良朝時代から見られる。遊仙窟のごときものがしきりに讀まれてゐた事實が、すな



はちそれである。大伴家持の歌に、すでに遊仙窟の影響を見ることが出来るほどである。日本靈異記の表はれたのは何を語るか。佛教が弘通した結果であるとか、あるひは佛教を俗耳にいり易くするためだとか。さういふ理由だけでは、到底これを説明することは出来ない<sup>と考へる</sup>。たとひ修史の事業として、古事記のときものが編纂されたのだとしても、一方にまた神話傳説といふやうなものに對する要求がなかつたといふことは出来ない。すでに古事記編纂の事實にさういふ要求を認めることができる<sup>とすれば</sup>、萬葉時代の人々に遊仙窟がさかんに讀まれたといふことは、少しも不思議ではない。萬葉時代の人々のやうに現實的に目覺めて求めたものが、古事記に現はれてゐるやうな神話傳説から——もちろん、上代人には古事記が正史として信じられてゐたではあらうけれども、古事記に集録せられない夥多の神話傳説が傳へられてゐたにちがひないと考へられるから——當時多くの文物とともに傳來した遊仙窟のやうなものに興味が集つてゆくのは、むしろ當然と考へなければならぬのである。かくて奈良朝時代から王朝初期にかけてかういふ要求を充たすために、遊仙窟や日本靈異記が、人々の間に珍重された<sup>と考へる</sup>。しかしかういふものがいつまでも人々の物語に對する要求を充たしてゐることが出来る<sup>とは考へられない</sup>。いかなる要求であつても時代とともに推移してゆくのが自然だからである。かくて國風が復興して來るとともに、その機運に乗じて竹取物語のやうなものが表はれるのは、當然の勢といはなければならない。この推論よりもむしろ竹取物語の内容の方が有力にこの事實を語つてゐるかと思ふ。

竹取といふ翁があつて竹を取つてくらしてゐた。ある時根元が光つてゐる竹を見つけた。すると不思議にその中から三寸ばかりの美しい女の子を得た。この子が大きくなるに従つて見る目も眩ゆいばかりの美しさなので、赫耶姫といつた。赫耶姫の美しさをきき傳へて、しきりに言ひよるものがあつたが、姫は耳にもいれない。そのうちにどうしてもと思ひをかけたのが、石作皇子、車持皇子、右大臣阿部御主人、大納言大伴卿行、中納言石上鷹の五人の皇子である。赫耶姫はつひにこの五人にむつかしい問題を出して、それを逃げたものに契らうといふ。石作皇子は、天竺の佛の石の御鉢、車持皇子は東海の蓬萊山にある銀の根に黄金の莖、白玉の實のなつてゐる木、阿部右大臣は、唐土の火鼠の裘、大伴大納言は、龍の首にある五色の玉、石上中納言は、燕の持つてゐる子安貝、それぞれかういふむつかしいものを持つて來いといふのである。そこで各の苦心談が語られる。ところが、その苦心經營の末になつた詐謀があるひはあばかれ、あるひは暴露して遂に望を達することが出来ない。しかるに帝がこれを聞かれて、后にとの勅令である。姫はそれをも肯んじない。かうして三年ばかりたつた。春のはじめごろから、月を見ては何か物思ひに沈んでゐる。八月十五夜が近づいて來ると姫は一層かなしげなので、翁がきくと、自分はもと月の世界のもので、罪を得てしばらく下界に下つたのである。この八月十五夜には、天上から迎が來て歸らなければならぬ。御養育の恩も忘れたい。歸らなければならぬと申上げたなら、どんなに御歎きだらうと思つて、春から悲しんでゐたのだと語る。さうして泣く。翁も姫も、女房も歎きにくれまどふ。歸すことは出來ぬと泣く。帝もこれを聞召して護衛の士を送られたけれども、人々の力も何の甲斐なく姫は中秋の明月の光に、天上の迎に迎へられて歸つてゆく。

姫は御記念にもと

いまはとて天の羽衣きるをりぞ

君をあはれとおもひいでぬる



といふ歌に不死の靈藥を添へて帝に贈られた。帝は、悲しみのあまり

あふことも涙に浮ぶわが身には

死なぬ藥もなにかはせむ

と、天に最も近い山、駿河の國の富士の頂に焚き捨てられた。ふしの山といふのはそれからの名で、その煙はいまも絶えない。といふのが竹取一篇の梗概である。

竹取一篇の物語が、一方にひとつの神仙譚でありながら一方において、戀愛物語であるといふことは、その用語とともに最もよく製作年代を語るもので、國風復興の第一期に表はれたものとして、少しも不思議はないと考へる。

この物語が、あるひは萬葉集第十六卷の竹取翁歌にその出典を求めたり、あるひはまた、小山篁や入江昌意、田中大秀などが、漢籍や佛典に出典の研究をしてゐるのは、研究としておもしろいものである。それによつて竹取物語が創作としてもつてゐる價值を左右することは出来ないが、この時代の人々が、いかなるものを物語として要求し、どんなものを讀んでゐたかといふことを想像することが出来るからである。萬葉集に竹取翁歌のほか、あるひは浦島の歌であるとか、眞間の手古奈の類であるとかいふ歌のものは、すでに前にも述べたやうに、萬葉時代の人々が物語に對してもつてゐた興味を伺ふことが出来るものであつて、さういふ種類の物語がそのまゝの形でいつまでもある筈がない、またそのまゝの形に興味が無くなるにしても、どんなやうな形にか改作されて興味を新たにすが自然の要求である。だから典據を求めることは、その原形がいかに形を改めてゐるかといふことを明かにするためには、是非

とも必要のことである。従つて時代の要求が、どういふ風に變つてゐるかといふことを明かにすることが出来るからである。しかし典據を擧げてそれを論ずることは、こゝでする違もないからやめるが、萬葉集の竹取翁歌が、いろんなものを加へて、こゝにひとつの物語が出来上つてゐるといふことは、物語が展開して來る徑路を示すものとしておもしろいものである。しかしそれはそれとして、漢籍や佛典にその典據のいくらかづゝを求めることが出来るといふのは、前に述べた、遊仙窟のやうな外國文學によつて物語に對する要求を充たしてゐた事實を、物語自身が語つてゐるわけである。さうして、日本靈異記のやうなものがすでに現はれてゐるといふことは、外國文學によつて物語に對する要求を充たしきれなくなつて來てゐたことを、ほかに知ることが出来るのである。竹取物語が一方にひとつの神仙譚であるといふことが、國風復興の第一期に表はれたものとして、物語自身がそれを物語つてゐるといふのは、右のやうに考へられるからである。もちろん、その點に於ては宇津保物語にも相似たものを見ることは出来るが、それはまた、宇津保物語を述べる時にゆづるとしよう。とにかく宣長のやうに、竹取物語の出典を佛典や漢籍に求めることを拒けて、諸國の風土記や、古事記、書紀、萬葉集などに求めることが出来るといつてゐるのは、外國文學の影響を耻とする國學者一般の偏見で、その時代を明かに見ることの出来なかつた大きな曇りである。宣長が風土記や古事記、書紀、萬葉集などに典據を求めることが出来ると言ひながら、この物語の成立を明かにすることが出来なかつたのは惜しむべきである。そのことがすでに竹取物語の成立に時代を暗示してゐることに氣がつかなかつたからである。

竹取物語がひとつの神仙譚でありながら、一方に戀愛の物語であるといふことは、すでにこの時代にたゞ單なる神



仙譚が、彼等の興味をひかないものになつてゐたといふことを物語つてゐる。漸く政治的の基礎がなつて、昌泰の世を謳歌しようとしてゐた時代である。さうして和歌暗黒時代のところで述べたやうに、和歌が戀愛の世界に活躍し戀愛が文學の唯一の對象となつてゐた。國風の復興とともに、戀愛に對する興味が、和歌以外の文學に重要な地位を占めるやうになるのは當然である。さういふ生活の記録として伊勢物語のやうなものが表はれる時代なのである。たとひ神仙譚が今までの物語に對する傳統的な興味として要求されてゐたとしても、神仙譚そのまゝの姿として表はれて來よう筈はないのである。そこで五人の戀愛探求者が興味を中心として描かれる。作者が誰であつたかは知るよしもないが、業平が時代を巧に寫してゐるやうに、よくその時代の生活を捉へ得たものでなければ、到底筆にすることは出来ない。源順の作であるなどいふのが妄説であるはいふまでもない。

和歌に對する興味は興味として、國語に對する覺醒がかかる物語の出現をよくしたといふことは、とにかく驚異でなければならぬ。かくて竹取物語は一方神仙譚として神話や傳説に對する興味のなごりとして、やがて王朝文學が戀愛中心の文學として展開してゆく黎明の光のうちに、竹藪の中にほのかに一本の竹が黄色光を放つてゐるやうに、古典の光を放つてゐるのである。

かういふ風に見て來るに、竹取物語は、伊勢物語のやうな戀愛のみを中心とした文學よりも、むしろ先だつて表はれたものであると見る方が、はるかに妥當のやうにも考へられる。伊勢物語を、もしたゞ現實的の戀愛譚を斷片的に書き集めたもので、小説的の想像創作といふ意味でが認められないといふ風な見方に従ふならば、あるひはその創作的の點に於て、想像の豊かなことは、伊勢物語は竹取物語の比ではない、かも知れぬ。従つてまた制作年代について

も、伊勢物語を竹取物語のさきに置かなければならないことになる。しかし先に述べたやうに、伊勢物語をもつて、歌を中核として常に小説的の場面を巧に描いてゆく短篇のつながりと見るならば、制作年代の先後についてはいづれをさき、いづれを後と決定するには、十分に考慮されなければならぬ。むしろ先にのべて來たやうな見方に従つて、竹取物語が多く神話傳説と絡み合つた戀愛譚、といふよりも戀愛を中心として、神仙譚を織りなしたもので、神話傳説によつて物語に對する興味を充たしてゐた時代から、戀愛中心の物語に移つてゆく過渡の時代の作物として見るを妥當と考へる。これは物語の内容からたゞ竹取物語を伊勢のさきに表はれたものではないかと想像するだけであつて、はたして事實かどうか、臆測はゆるされないのである。かくて、竹取物語がさらに現實的なものに展開して、こゝに宇津穂物語が表はれる。

### 第三節 宇津保物語

時代的に叙述の筆を進めるとすれば、第二期に表はれた宇津保物語は、落窪物語や大和物語、および蜻蛉日記とともに、和歌三代集の後にすべきであるが、余は物語の展開を明かにする便宜上、第一期の伊勢物語および竹取物語とにこれを見ようと思ふ。

伊勢、竹取を先驅として展けはじめた王朝時代の散文文學は、宇津保、落窪時代には、住吉、正三位、殿うつり、月まつ女、交野の少將、梅壺の少將、人め、等々と續々として表はたれが、時代のふるひにかゝつてふるひおとされ、たゞ僅かに枕草子や源氏物語にその名を残してゐるだけなのである。住吉物語が今に傳へられてゐるが、鎌倉時代の偽作であること明かであるから、この多くの物語のうち、宇津保、落窪と、大和物語、蜻蛉日記のごときものが、今



に残つたといふのは、それ等の作物が何等かの意味に於いて、後世に残さるべきものを十分にもつてゐたからである。偶然残つたといふやうな事情は、いかにしても認められないのである。住吉物語のごときも、枕草紙に「住吉、うつぼの類は」と宇津保物語と同等の資格を認めてゐるやうな書きぶりから察して、當時相當なものとして讀まれてゐたと考へられるが、湮滅して原形をも伺ふことの出来ぬのは遺憾である。あるひはまた源氏物語繪巻の巻に、竹取に俊蔭卷を合せ、伊勢に正三位を合せて争つたことが見えてゐるから、正三位などといふものも、伊勢や宇津保同様に、多くの物語のうちに光つたものだつたにちがひない。これ等の作物が、影も形もなくなつていつたのは、時代とともに讀者の興味をひくべきものが無くなつて、次第に顧みられないやうになつたからであると見るべきであらう。かくて第二期から、源氏物語の表はれるまでには、すいぶん夥多の物語があつたわけであるが、現存してゐるものは、僅かに落窪、宇津保、それに大和物語、蜻蛉日記があるに過ぎないのである。

現存の宇津保物語は、繪巻物の詞書として寫されたものである。言ひかへれば、繪巻物の詞書として寫されたものが、讀本として出來たものゝやうに傳へられてゐるのである。はじめは他の物語と同様に、もちろん讀本として現れたものである。それが更に繪巻として改作されて残つてゐると見るべきである。今日傳はつてゐるもの例へば、住吉物語のごときものにしても、繪巻物の詞書のものゝ讀本として出來たものと、二様のものがあると考へなければならぬ。さうしてしかも繪巻物は、その自然として後代の人によつて次第に改作されてゆくのが當然である。宇津保物語は、古くから繪巻として傳へられたやうで、すでに源氏物語の時代に、この繪巻のあつたことが明かである。であるから、讀本としての宇津保物語といふものは、すでに古く、繪巻物にその位置をゆづつて何時かはなしに

亡び、たゞ繪巻物として傳へられて來たものであると考へられるのである。かういふ風に、その様式から考へて、宇津保物語が繪巻物であるといふことがわかれば、宇津保物語に鎌倉時代の匂ひのあることは、否みがたいことである。藤岡氏の國文學全史平安朝篇や、松下大三郎氏が國學院雜誌に、現存の宇津保物語は、鎌倉以後のものであるといふことを論じてゐるが、これは言葉の感じから直覺的に言つたのみであつて、あたつてゐないとは言はれないが、それだけでは、學説としてはまだ整つた形式を備へてをらないのである。

また、讀本のまゝを寫しとつたものとしても、當時の人が學問として傳へたものではないのであるから、寫すときに改竄せられることは明かである。さういふ場合にはまた、後の趣向も當然はいつて來べきである。源氏物語は鎌倉時代に正本が出來てゐたから、比較的に違ひが少ないけれども、宇津保物語はすでにこのごろ、正本を必要とするくらいに改作が行はれてゐたのである。であるから、かういふ風に後代のうつつしてが改めたものを、あるひは鎌倉時代の作であるとか、室町時代のものであるとか、早計に推定することは誤りである、ことに繪巻物であるから、その詞書から時代を定めようとするのはむづかしいことである。

宇津保物語の作者に就いては、あるひは源順といひ、あるひは藤原爲時といふけれど、確證があるわけではなく憶測にすぎない。あるひはまた全部を同一人の作と見るものと、俊蔭卷のみがもとのもので、他は後人の作であるとするものがある。藤岡氏のごときも、「余は全部一貫のものたるを疑はず」と言はれてゐる。金ヶ原亮一氏が「宇津保物語の作者及び年代に就いて」のなかで、藤原の君卷に

「三のみこ(彈正宮)御前ちかき松の木に蟬のこゑたかくなく折にかく聞え給ふ



われだにもは言はでこそ思へ

すみ所あるものにだにかくこそありけれ云々

とある歌が、蜻蛉日記、天祿三年八月朔日の條に

「朔の日雨降り暮らす。時雨だちたるに、未の時ばかりに霽れて、つくつくぼうしいとかしがましきまでになくを聞くにも、われだに物をと言はる。いかなるにかあらむあやしうも心細うも涙浮ぶなり云々」

と引かれてゐるのであるから、天祿三年頃には宇津保物語が世に行はれてゐると言ひ、さうして天祿三年以前に少くも初の部分は書かれてゐると断定してゐるのは、宇津保物語の作者を一人と考へての説である。

それからまた、土井忠生氏の「容姿美を表現せる王朝時代物語の用語」においても、作者を一人と考へての説である。たとひ、一人の作者が筆をとつたにしても、書かれた期間が長ければ、始めの部分と後の部分とに、創作態度の差異が出来るのは當然である。一人の作者が作つたものとして考へれば、藤原の君の巻は、はやくにあらはれ、他の部分はおくれて出たものと見られる。巻によつて創作態度に差異が認められるとすれば、多くの人の手によつて完成したと見るが當然である。が、多くの説は、一人の手によつて出来たものであるといふに一致してゐる。

宇津保物語、藏開の巻に、大宮の生れさせられし時、枕上に刀を置かせられたる事がある。女子出生の時、枕上に刀を置くことは、榮華物語によると、つぼみの巻に、禎子内親王の御産のことを叙して「御はかしいつしかともて参れり。例は女におはしますには御はかしなきを、何事も今の世の有様は、さまざまの例をひかせ緒ふべきにあらぬ

ば、これを始めたるためしになりぬべし」と言つて、この時にはじまるとあり、同じ若水の巻にも、章子内親王の御産に「さきぎきは女宮には、御剣はもてまゐらざりけれど、三條院の御時、一品宮の生まれさせ給へりいよりぞかくある」と言つて、禎子内親王御産の時のことを先例として、しかもその時にはじまる由を述べてゐるから、藏開の巻からは、長和二年以後のものでなければならぬ。しかしながら、禎子内親王の生れさせられし時刀をさし上げられたのがはじめてかどうかについて、小野宮實資の小右記に、この禎子内親王御出生のことはあるけれども、刀のことは見えない。榮華物語の記事をはたして信すべきか否かと、また問題となるわけである。疑へば、先に金ヶ原氏の語を引いて述べた、彈正宮のうた「かしがまし草葉にかくる虫の音にわれだに物は言はでこそ思へ」の歌も、古歌ではなにかといふ疑問が残るであらう。

とにかく宇津保物語の時代と作者に就いては、たしかにこれときめることは出来ない。ことに研究の困難なのは、繪巻物の言葉がさだからである。たとひ宇津物語の出来たのは、およそ一條天皇以後であらうといふことだけは言へようかと思ふ。

宇津保物語は、伊勢、源氏のやうに多く讀まれなかつたために、古くからあまり研究されてをらない。全本として流布の刊本（延寶五年刊、文化三年再版）があるけれども、巻の順序に錯簡が非常に多い。田中道磨や細井貞雄によつて巻の順序がほど正されて、武笠氏校訂の有朋堂文庫は正鶴に近いかと思はれる。本居宣長が玉勝間に田中道磨の訂正した巻の順序を書いてゐるが、それと多少違つて、むしろ細井貞雄の玉琴の順序に近いものである。藤岡氏は田中道磨に従つて、祭の使を吹上の巻の後にし、嵯峨院と梅花笠とを相前後せしめたところだけ違つてゐる。しかるに



有朋堂文庫本が、玉琴と違ふところは、吹上巻、上下の間に祭の使を置いた點で、これはなほ考慮の餘地があらうと思ふ。

竹取物語が、神仙譚と戀愛談とを織りなしたところに、外國文學から國文學に目覺めて來た、初期の物語の特質を十分伺ふことが出来るといふことを前に述べたが、この點から觀察すると宇津保物語にも、神仙譚の興味と、戀愛に對する興味とが、多分に作者にあつたことが認められる。赫耶姫を中心として描かれてゐる竹取物語の戀愛は、宇津保では貴宮を中心として更に現實的に描かれる。竹取が赫耶姫を中心とした戀愛を描いてゐるやうに、宇津保は要するに、貴宮を中心とした戀愛物語である。竹取において、五人の貴公子が戀を得るために、それぞれ佛の石の御鉢や、蓬萊山の玉の枝や、あるひは火鼠の裘や、龍の玉や、あるひはまた燕の子安貝を求めようとして苦心慘膽する話、畢竟するにお伽話としての興味であるが、宇津保物語に描かれる戀愛は、はるかに現實的で、しかも寫實的である。俊蔭が波斯國に漂流して琴を學んで、十二の琴を得て歸る話や、仲忠母子が、父俊蔭から得た琴によつて、いろんな超現實的な奇蹟があつたりする點は、なほ作者に神仙譚の興味が多分にあつたことを物語るもので、源氏物語などに表はれて來るもの、いけがどこまでも現實から離れない心持とは、はるかに經庭のあるところである。しかるに戀愛を描く點になると、竹取物語の可愛いくて幼なお伽はなしの戀とは、はるかに趣を異にしてゐる。實忠や仲澄、あるひは仲頼、藤英、忠こそ、涼、仲忠等々が、戀に狂奔する有様は、實に目もあてられぬ。もちろん作者が中心人物として描いてゐるのは、美を象徴する女性(貴宮)、と藝術家として技神にいる仲忠とである。宇津保の作者にとつてこの世で最も美しいものは女であり、神をも動かす超人間的の力は藝術である。宇津保物語において、戀に狂奔す

る幾多の人を描いてゐるのは、女性の美が、この世において比類なきものであることを語らうとしたものであり、音樂の不思議さをさまざまに、實に超現實的に書いてゐるのは、藝術のちからを、あくまで讚美しようとしたものであるといふことが出来る。

文運おのづから昌泰の世に和して國語の活動が盛んになるとともに、たとひ學者は學者として、なほ外國文學をふりまはしてゐたにしても、時代の要求を顧みないわけにはゆかない。かくて竹取物語によつて範を開かれた散文文學は踵を次いでいろんな物語を生んだのであるが、相當に外國文學や佛敎文學に通じたものゝ手によつて、宇津保物語が表はれたのだと考へられる。宇津保物語に、學者として優れた藤英を描き、聖徳高き忠こそを出して、世に重んじられてゐるのは、當時の社會相を伺ふに足りるのである。

#### 第四節 落窪物語

宇津保物語とともに、王朝時代第二期の作物として、相並んで光を放つてゐるものに、落窪物語がある。同じ貴族の生活を描くとは言ひながら、彼は常に宮廷を中心として年中行事を叙しつゝ描寫の世界を展げてゆくに對して、これは一貴族の家庭を描いて、宮廷に關する描寫はまつたくない。當時貴族の家庭生活が、いかなるものであつたかを描いてゐるのが落窪物語で、宇津保物語と相並んで特色ある物語である。

落窪物語は三卷あるひは四卷あつて、古く源順作と傳へられてゐるが、たゞ男の手になつたものであらうと思はれるだけで、はたして誰の作であるかわからない。甫喜山景雄は落窪物語證解に、この物語のなかに、拾遺集戀部にある中納言敦忠の「あひみての後の心にくらぶればむかしは物を思はざりけり」の歌のあるところから、敦忠が薨じた



天曆六年から、源順の卒した永観元年までは三十二年あるから、「敦忠集世に流布せざるべきにあらず。もしこの物語其際の作ならむには、敦忠の歌引用すべきことわりなれば」一概に源順の作でないとも言へないと疑つてゐる。拾遺集の歌はこの外になほ一首、

夕占とふうらにもよくあり今宵たに

來まさぬ君をいつとか待たむ

といふ歌が、阿漕から帶刀への手紙に、

「いでや、降るともといふこともあるを、いとどしき御心さまにこそあめれ。更に聞えさすべきにもあらず。御みづからは何の心地よきにか來むだにあるぞ。かゝるあやまちしいで、かゝるやうありや。さても世の人は、今宵來ざらむとかいふなるを、おはしまさざらむよ」

と引かれてゐるから、作者は源順でないまでも、拾遺集を見た人であるかも知れない。眞淵のやうに漠然と、「落窪は冷泉院の頃に作りなして、中に道頼のおほいどのを書けるは、忠平公をや思ひけむ。御子たちの官のきそひさまいとよく似たり。順朝臣は冷泉圓融の朝を経て、十六年のうちに卒し給へり。さらばこの物語必ずしも順朝臣にあらずとはいひがたかるべし」と大膽な推定を下すことも、危険である。さうかといつて、落窪物語を住吉物語と同じやうに、もとの作は早く亡びてしまつたのを、後人が擬作したのだといふのも、あまり見方が淺い。中村秋香のやうに、其文體から「圓融花山以前のものなるは疑ひなく、——されどまた村上冷泉などたしかに其時代を示すべきにもあらず、唯おほよそに廣く其時代に成れるものと見るべし」といふが、むしろ穩かである。それにしても拾遺集が、花山

院の時にすでに出來てゐたものとすれば、圓融花山以前のものといふも疑はしくなる。また、拾遺集の歌が二首引かれてゐるからといつて、清少納言の枕草紙にその名が見えてゐるのだから、一條天皇以後の作とすることも出來ない。いづれにしても新しい材料と詳しい考證とによらなければ、いづれとも定めがたい。が、どうも花山、一條以前に出來たものらしく考へられる。あるひはまた實際古くいはれてゐるやうに源順の作であるかも知れない。しかしそれを確める材料はいまのところ何もないのである。

「落窪物語は要するに繼子いぢめの物語である。中納言忠頼に男三人、女五人の子供がある。女五人のうち一人は宮腹で、容姿が美しく、心ばへもすぐれてゐるうへに、いろんな才藝には堪能である。しかるに繼母の今北の方は、この宮腹の姫君が憎くてたまらぬ。落窪と言はれてゐる放出の一間に押しこめて置いて、手をかへ品をかへして虐待する。家のもも渾名して落窪の君といつてゐる。たゞ一人阿漕といふ若い女房が、その不幸に同情して蔭になり日向になり、まめまめしく仕へてゐる。

ところがこゝに、その君に通ふ藏人少將に仕へてゐる帶刀といふものがあつて、阿漕と契つてゐるのであるが、時の左大將の子で、東宮の御母、女御の兄君にあたることから、聲望一世を歴してゐる左近少將と乳兄弟の關係から、帶刀と左近少將とは親しい。帶刀の口から時々落窪の君の噂をきいて左近少將の心は動く。そこで帶刀阿漕を経て落窪の君に通ふやうになる。

少將は落窪の君の許に通ふ夜の數が重なるにつけ、姫君の境遇にますます同情し、可愛さも一層まさる。そのうちに落窪の君に通ふ男のあることが北の方に知れる。北の方は腹立たしさのあまり、中納言には帶刀が通ふやうに讒し



て、落窪の君を物置部屋へ押し籠め、自分の叔父で六十にもなる典藥助の自由にさせようとする。この危いところを少將の君が聞いて、臨時の祭に中納言の家中物見に出た隙を伺つて姫君を偷み出す。落窪の君は少將の邸にひきとられてからは、風にもあてぬやうな可愛かられ方である。

それから左近少將は、あらゆる手をつくして北の方に報復しようとする。北の方は少將の君が聲望のあるのを聞いて四の君に迎へようとする、少將の君は快よく諾しておいて、自分の代りに「面白の駒」と嘲笑されてゐる兵部少輔を通はせる。それが知れて三の君に通つてゐた藏人少將さへも、相婿とよばれるのを恥ぢて来なくなる。あるひは北の方の清水詣にさんざん恥づかしめたり、祭の見物には車を引き退け、この時とばかり典藥助を半殺しの目にあはせ、更にまた、落窪の君の母宮から傳へた三條の家を修築して、ひき移らうとすると、左近少將の従者が来て占領して了ふ。

かうして落窪の君の止めるのを、懲らすだけ懲らしておいて、少將は報復のかぎりをつくしておいて、中納言を迎へて姫君に逢はせる。父中納言は今までの仇も忘れて、たゞ姫君の幸福をよろこぶ。兄弟みな落窪の君の今は幸なのを喜ぶにひきかへ、北の方はどうしても腹がいえぬ。

かくて少將は、落窪の君ひとりを守つて睦まじく、多くの子どもをまうけて一家和氣に充ちてゐる。更に少將の君は中納言のために七十賀を祝ひ、奏請して大納言を賜ひ、三の君は御匣殿に立たせ、四の君を帥中納言にいれるとか、親子のためにつくすのである。少將自身は、大納言、大將、左大臣を歴て、つひに太政大臣にいたり、子孫めでたく榮える。といふのが一篇の梗概である。

中村秋香は「この物語に主とする落窪の君の本性さとしておもひやり深く、孝の心厚くして操正しく、いつくしみありて女巧の事に精しく、しかも手かき歌よみ箏ひくなどのみやびわざにも拙からず。また道頼の君の心たましひたけくをしく、行正しくてまことに一人の人となるべき徳をそなへ、また惟成阿漕がおのゝその主に忠にして、心を合せてまめやかに力を盡すなど、すべてその旨趣いと正しく、かの竹取窪穂のしとげなくして古めいたる、伊勢源氏のあだめきてみだりがはしき、まして方丈記つれつれ草などの法氣づき人げなきものと、一つ口にいふべきにあらず」と激賞し、上田秋成も「この落窪の君のひととなりを、はじめをはりつづつとよみかへして見れば、あないみじあなめでた、これよりさきの物語にも、後なるさかしぶみにも、かゝる人なむあらぬとおほしきは、まづ世ごゝろつかぬより身幸なきを、ふかうおほしおきてし、御繼母の世にたぐひなくさがなき御心さまのあからさまなるをも、かたへの人のいふなるをさへ、とかくに言ひけちつゝ、なよびかにおほせごとつゆたがはじともし給ふには、身のよるべも何もすくせとのみおぼしのどめて、いさゝかもえむじ給ふけしきなく見ゆめるも、岩ほの中のすみかもとめまなくひとりごたるゝにこそ、人をも身をもつらしとおぼさぬにはあらざめれ。御男に思はれそめてよりぬすまれ奉り、ひきかへかしづかれ給ふは、よきむくゐとこそ見ゆれ。なとかは昔の事恨めしうも思しいづべきを、御男のいみじきあだがたきして、御心の限りあきたくしいで給ひ、かつは女君の御心をもとりてましとおぼしはかるなるべきを、かへりてものしとのみ思しなけきつる、父の中納言殿、御繼母、三四の君の御方々のいかにわひしうない給ふらむなど、いとせめて思し敷き給ふ年月も久しかりけり。三條の家とりかへし給ひて後は、よきむくゐのみして、御方々の御心をなくさめ、をのこ女子はらからの限り、つかふる者のすゑの末々までも、たちをとりぬみさかゆべきことをの



みなむして、世のそしりをも口ふたがせ給ふ御ふるまひを、こよなううれしとおぼししみたるいとめでたき御本性なり」といひ、更に筆をすゝめて「御男ひとりをあながちにうちたのみ給ふ御心ばへなどは、くらぶるかたも有るべきを、右の大臣の御むすめのうちなる事、聞き知りても、人をつらしとも、いさゝかもおぼしよらぬさまのいみじさよ。野邊のをみなへしの只一時くねりさまなるそれならずは、女にては見奉るまじきあて人とこそいべかりけれ。さるはらうたげにこめて、御みさをのすぐしきはかりかは、たなばたつめの手わざ、龍田姫のいそしきをも取りぐして、世のほまれとらせ給ふなむ、いとありかたかりける人の御物語なりけり」と委曲をつくして推賞してゐる。

○理想的の女性として描くところ、宇津保物語の貴宮、源氏物語の紫の上、ともに王朝時代に浮彫にせられた観音菩薩のやうにかゞやいてゐるが、こゝに描かれた落窪の君は、また人間として、女性として、倫理的におそらく完璧の姿として眺められた「女」であらう。しかもそれに對立して描かれた北の方の般若のやうな形相は、落窪の君の美をきわだゝしめる著者の用意だつたにちがひない。それを中村秋香や上田秋成のやうに、倫理的に解釋するのも一見解にはちがひないが、これを人間の、ことに女の有つてゐる極端な兩面を描いたと見る方が、より穩當だと考へる。だからこの二人の性格が最も明瞭に描き出されてゐるのに對して、中納言にせよ、左近少將にせよ、あるひは臆げに、あるひは多少不自然たるをまぬがれないところがあつたのであらうと思はれる。

それにしても、落窪物語のおもしろさは、その筋の曲折に富んでゐる點であつて、源氏物語のやうに描寫のうまさではない。人間の心もちをあくまで精細に描出してゆく手ぎはは、たうてい源氏物語には如かない。ことに左近少將

が雨のふる夜、落窪に通ふ道で「足しろき盗人」と咎められ糞を踏む條や、典藥助が落窪の押し籠められた物置の前で「板の冷えのぼりて、腹こぼこほと鳴れば、翁「あなさがな、冷えこそ過ぎにけれ」といふに、しひてこぼめきて、ひちひちと聞ゆるはいかなるにかあらむとうたがはし。かいさぐりて、出でやするとて、尻をかゝへてまどひ出づる心地に、鎖をついさして、かぎをばとりていぬ」といふあたり、筆があまりに露骨に過ぎて、かへつて品格を下してゐる。男性の思ひきつた書きぶりであること明かである。あるひはまた、左近少將の復報のし方の、どこまでもしうねく、思ひきつてゐるのなども、女にしてはたうてい書けないであらう。しかし男性の手に成つたがために如上の欠陥をもつてゐるにしても、文章の簡潔の點や、ぐいぐい筋を運んで讀者をひきつけてゆく手ぎは、また女の眞似ることの出来ぬ長所であらう。とにかく、繼子いちめ、報復を主としたものと見ないで、むしろ女性の兩面を遺憾なく描出して、理想的の女性を描き出したものと見るとき、落窪物語もまた王朝時代の好尚を見ることが出来る好古の物語たるを失はない。また一般的に評されてゐるやうに繼子いちめの物語としても、世相の一般を何ふに足りる興味ふかい物語である。

鎌倉時代には落窪を模倣した、住吉物語や小落窪草紙が出てゐるし、馬琴はこれを翻案して皿皿郷談を書いてゐる。

## 第五節 大和物語

古今集の勅撰によつて、その位置を高めた和歌は、王朝時代においては、彼等の生活とほとんど離るべからざる關係にあつたことは、少し前にも述べたところである。色好みの家にかくれた人知れぬ埋木も、和歌を中心とした生活



が、社会生活のひとつの様式であるかのやうに——それほど表むきになつてゐたとすれば、——言ひ換へれば、日常生活がそれほど和歌と交渉の深いものであり、それほど和歌に深い根をおろすに至つてゐたとすれば、和歌の生活が、いかに豊かになつてゐたかは想像するに難くない。かくてまた王朝時代の感情生活は、ますます精練されたであらうし、言語が思想生活や感情生活に缺くべからざる機關であるやうに、和歌が日常生活のひとつの表現機關としての役目を有つてゐたことも不思議ではない。かういふ風に和歌が表むきになり、生活と深い交渉を有つやうになれば、和歌を中心として生活する生活が、常に何かしら物語めいて、いはゞ伊勢物語に描かれたやうな生活に興味も引かれるであらうし、繰返されるやうにさへなるのも、自然の成行と考へられる。かうして伊勢物語が珍重され、これを模倣した大和物語のやうなものも表はれるに至るのは自然の勢である。

大和物語は伊勢物語ほどに讀まれてゐないが、それでも歌を詠むものが必ず讀むべきものとして、伊勢大和並稱されて來たものである。伊勢物語は業平の傳記のやうに作られてゐるが、大和物語は清水濱臣が「この物語は大むね打聞にして、作物語にはあらず、歌をもとにて文はすまなり。撰集家集などの端書に近し。されば作者の歌とおぼしきはなし。みな古今の人を打聞にしるばかりなり。伊勢物語に、文勢の似通ひたるところもあれど、よく考ふれば、伊勢には事遠くして、なかなか宇治大納言物語のかきぶりにちかし。云々」といつてゐるやうに、延喜ごろから天曆前後までの、男女の生活や和歌の逸話、いはゞ歌を中心とした多くの話を集めたものである。しかし伊勢物語を模倣した跡は歴然として明かである。濱臣のいふやうに打聞集である點においては、もちろん古今着聞集や宇治大納言物語に相通じたものを持つてゐるかも知れないが、著者の構へるところは、伊勢物語に學んだものを、いかに

して當時の好尚に投じようとしたところにあるらしい。前にも述べたやうに和歌が興隆して、社会生活のひとつの様式であるかのやうにまでなつた時代である。和歌を中心として幾多の興味ある生活も織り成されたであらうし、また和歌に關して傳へられてゐた多くの傳記的な逸話も、特に興味あるものとして迎へられたにちがひない。さういふ時代に大和物語のごときものが要められるのは自然である。いかなる作物でも偶然に表はれるものではない。常に時代の要求、時代の好尚に應じて表はれないものはないのである。したがつて伊勢物語の發展として大和物語を考へることもまた自然でなければならない。

大和物語の著者及び制作年代に就いては、古く清輔の草袋紙や北村季吟の大和物語抄、あるひは眞淵の大和物語直解、それを祖述した前田夏蔭の大和物語錦繡抄等に、いろいろに論ぜられてゐる。藤岡博士が平安朝文學史に、それ等の説を総合して述べてゐるところは、大體正鶴を得てゐると思はれるから、引いて見る。

一、この書の作者を在原滋春といふことは、根據ある説にもあらねば、信するに足らず、滋春は業平の次子なりといふを以て、その父の作なりといふ伊勢物語に模して作れる大和物語を、その子の作と稱したるに過ぎざらんか。但しこゝに注意すべき點あり。そはこの物語の半ば少し過ぎたるところにて、この書の體裁は一變す。その境に滋春のことを記したるところ二箇條あり。その後の條に

かりそめのゆきかひ路とぞ思ひしを

今はかぎりの門出なりけり

さいふ辭世の詠をよみて遠逝せりといふは、頗る伊勢物語の結末に似たり。また前の條に、滋春のことを記し、そ



の終に「今はみなふることになりたることなり」といひて、ことに懐舊の情をもらせり。他に古事になりたることいかほどもありながら、こゝばかりにかくあるも、何となく滋春に關係ある人の筆のすさまじきにやと思はるゝところなきにあらず。されどこれ等はなほ一の疑問に過ぎざるなり。

二、作者を花山院といふこと、歌林良材（一條禪閣作なり）に記せりといへども、禪閣兼良の頃は、誤に誤を傳へ殊に偽説を構へて世人を欺くことの多き世なれば、この説も固より信する能はず。季吟は首尾の記事につきて由ありげにいひしが、これは余が滋春につきて注意すべしといひし説よりも、なほはかなくして、到底證據とするに足らず。（詳書類従本および歌學文庫本歌林良材集には、「花山院の大和物語」といふこと見えず）

三、本書の時代につきて、書中に先帝、太政大臣左大臣などあるは、これを測るべき尺度とするに足らずと、眞淵がいへるは褊狹にすぎたり。なるほど先帝といへば醍醐天皇に限らず、宇多天皇をさしたるころもありて、一概にいふべからずといへども、なほも野宮實頼を今の左大臣といひ、藤原師尹を今の左兵衛督としたるなど、時代も一致して必ずやその頃の作ならむ。師尹が左兵衛督たりしは、天慶十年より天曆七年までのことにして、また書中に故大納言と稱するは、天曆四年に卒せし藤原清蔭をさせば、これより推して大和物語は、（その全部といふ能はずとも、少くともその一部は）天曆四年より同七年までの間に著はされたるものなりといふを得べし。

四、さらば季吟のいへるが如く、この書ははじめに滋春の書き、後に花山院の補ひたまへるなりとはいふ能はずとも、眞淵のいへるが如く、古なる後なる、折々の文入り交れりといふ説は如何。中に後人の作の摺合せとは斷言し難けれども、文章の組織結構、大體に於いて彼此相違したる點あるを見ず。余はこれを別人の作を集めたりとい

ふに躊躇すといへども、なほその前後の體裁の一變したるは疑ふべからず。すなはち二卷のうち、下のはじめ二三葉を境として、その前半は伊勢物語のごとく歌を主とし、散文はたゞ和歌の小序のごとく簡短を旨として、その歌を作るに至りし事情を知らしむるに過ぎず。後半は文章を主とし、古書口碑に材をとりて、あはれなる物語を集めたるものなりとす。

これが藤岡博士のいふところである。作者に就いては、誰といふことは出来ない。竹取、伊勢、宇津保、落窪同様に、たゞ憶測をゆるすのみで、勅撰集中、撰者の歌に勝れてゐるものでも、讀み人の知れない歌がたくさんあるやうに、燦然として輝きいでた王朝文學は、散文文學にもまた多くの「讀み人知らず」の作者を多く出してゐるにちがひないと考へるからである。だから書かれた當時、すでに作者がそれと名のつてゐなかつたのかも知れないのである。古今の名歌が必ずしも全部作者が知られてゐるわけではない。物語がもし二三のものより外に表はれてゐなかつたならば、あるひはその作者も世に喧傳せられたであらうけれども、蜻蛉日記や更科日記の作者がいふところから考へてもおそらく文献にも名の見えないやうな、まだ多くの物語が、續出してゐたであらうと考へられるのであるから、そのうち名作として後世に傳へられたものだけが、必ずしも當時著名の人の手になつたのだとは考へられない。余は却つてその無名の作者を思つてゆかしさを禁じ得ないのである。しかし新しい資料と研究とによつて作者が明かになればそれはよろこばしいことである。

制作年代については、藤岡氏の説に従ふをよしと考へる。たゞ「散文はたゞ和歌の小序のごとく簡短を旨として、その歌を作るに至りし事情を知らしむるに過ぎず。後半は文章を主とし、古書口碑に材をとりて、あはれなる物語を



集めたるものなりとす」といひ、「要するに大和物語は片々たる事實を輯めた」ものであるといふ説に對しては、多少考を述べて見たいと思ふ。大和物語がたとひ演臣のいふやうに打聞集に類したものであるとしても、たゞ「歌を作るに至りし事情を知らしむる」に過ぎないものでもなければ、古書口碑に材をとつてあはれなる物語を集めたものでもない。もちろん伊勢物語のやうに、ひとりの人間の傳記として、多くの話に統一を求めようとしてはゐないにしても、ひとつひとつの話に對して、作者が創作的の手續が加へられてゐないとは、どうしても考へられないのである。むしろ和歌を中心とした幾多の生活を、更に興味あるやうに創作しようとしたものであり、和歌に關して傳へられてゐた多くの傳説的の逸話を、時代の要求に應ずるやうに創作として輯めたものであると考へる。「ことさらに實を避け想を構へた」ものでないにしても、「誤り傳へたるを、事實と思ひて記し」たものとは考へられないのである。むしろ誤つて傳へられてゐるものでも、事實のやうに創作され、事實であつても傳説のやうに書きかへられてゐるのである。例へば「風吹けば沖つしら波たつた山夜半には君が一人こゆらむ」を中心にした話を比較して見ても、あるひは「いはで思ふぞいふにまされる」といふ歌を中心とした話にしても、伊勢の作者と、大和の作者との間にある、創作の態度と時代の相違、乃至は大和物語の作者がもつてゐた創作の手腕は認められる。もし伊勢に比較して、大和物語の作者の手腕がまづいとすれば、それは、大和物語の時代が一層散文的になつてゐたといふことなのである。しかし伊勢を模倣してゐるふざり、伊勢以上にいづることの出来ないのもまたやむを得ないのである。古今集に對する後撰拾遺のごとく、源氏物語に對する源氏以後の作物のごとく、大和物語もまた伊勢物語を模して却つて失敗に終つたと見られても仕方がない。さはれ、後半短篇小説のやうな趣もあつて、後の傳説的物語に對する影響は決して見逃すこ

とは出来ないのである。

## 第六節 蜻蛉物語

〔蜻蛉日記三卷は、東三條藤原兼家の室、右大將道綱の母が兼家と契りそめた天曆八年から、道綱が二十歳、從五位下右馬助に至るまでの、二十一年間にわたる生活の波瀾を書いたものである。〕作の動機について藤岡博士は、前略、されど道綱の母は才識拔群、みづから高く標置するものなるに、とかくその夫に愚弄せらるゝやうに覺えて世をうしとのみ涙に明し暮して、ひとたびは洛西鳴瀧に隠れて、尼にならんとせしことあり。この破裂はやがてこの日記の焦點とも見るべく、この出來事ありし前後こそ、この書の筆とりそめし時なるべけれどと言ひ、更に筆をあらためて、

そもそもなげきになげきの重なりて道綱の母が鳴瀧に籠りしは、天祿二年のことにして、日記の中卷にこれを記せり。上卷は天曆八年より安和元年まで、十五年のことを含めるに、頁數は全篇の三が一にも過ぎざれば、もとよりおのれと兼家との關係の大體を述べたるに過ぎず。まづ夫が通ひそめしより、早くも思ひのまゝならぬことは、いづれのところにも見え、道綱の片言もて、その父の今來ん今來んといふをまねすること、著者の父が奥州へ下ること、著者が母を失ふこと、初瀬に詣づることなど、稍々細かなれども、中卷以下の委曲を盡せるに比すべくもあらず。よりて思ふに、上卷はその時々にかけるに非ずして、後に思ひいでて記せるなるべし。中卷は安和二年、天祿元年、同二年のこと、下卷は天祿三年、天延元年、同二年のことにして、記事はこれ等の年に至りてはじめて委し。天祿二年、同三年のごときは、殊に詳にして、何日に雨降る、風吹く、火ありなど、一々記せるを見れば、こ



れらはその日その日に筆とりしものならむ。天延二年に至りて、またや、簡略になりぬ。さてこの委しく記せりといふ天祿二年こそ、心安からぬことのみ積りて、長精進をはじめ、鳴瀧に籠りし年にして、その年のうちに山は出でしが、事のさまなほ面白からず。かくてぞ心やりに物語やうの日記に筆とりそめたるにて、それにはじめのことをもつけ加へたるものならんか

と、委しく述べてゐる。著者自身が「かくありし時過ぎて、世のなかにいともはかなく、ともかくにもつかで世に經る人ありけり。容貌とても人にも似ず。心たましひもあるにもあらで、かうものゝやうにもあらであるもことわり、と思ひつゝ、たゞ臥し起きあかしくらすまゝに、世のなかに多かる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで、かき日記して、珍しきさまにもありなむ、あめのしたの人の品たかき女と問はむ、ためしにもせよかし、と覺ゆるも、過ぎし年月ごろのこともおぼつかかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける」といつてゐるほどであるから、自分の生涯をふり返つて見て、その曲折波瀾を思ひいづるにつけても、世のなかに多かる物語めいた道をたどつて來た自分の姿の、そのまゝ筆にもしておきたかつたにちがひない。

すでに男の手によつて、漢文で書かされた多くの日記があつて、宮廷の行事などを備忘のために記したものであるが、文學的作物としても土佐日記はひとつの紀行である。伊勢物語、大和物語は、多分に作者の創作が加へられてゐるにしても、とにかくある人の断片的な小説的逸話が大部分を占めてゐて、歌の贈答が常に小説的場面を形づくる骨子となつてゐる。歌が生活のうちにくわく根をおろして、何かの折には歌を必要とした王朝時代の生活に於いては、伊勢物語や大和物語に集録せられるやうな場面が、さらに繰返されたにちがひない。さうしてそれに創作的の興味を

刺激されるとすれば、「世に多かるそらごと」などをうちまぜて、多くの物語が表はれるのは當然である。しかも、宮廷を中心として生活する貴公子たちが、美しきものと見れば、妻子をも忘れて狂奔するほどに、意馬心猿もたゞならず、愛欲の情には、埒もなにもあつたものではない時代である。色好みの家にかくれて、戀のはしり使をつとめてゐた歌が表だつて、戀のためいきや恨の情の滔をうちに包んで、美しくその間を行きかふ。物語に酔ひ、和歌に浮かれた人生が王朝時代である。だからひとつの歌を中心として描かれる断片的な場面がつかれば、ひとつの人生が織り出される。言ひかへれば、蜻蛉日記の場合にあつても、歌が年代順に配列されたゞけでも、著者の波瀾を重ねた人生は描かれる筈である。しかしすでに伊勢があり、大和があり、あるひは多くの物語があつたとすれば、その時折に作られた歌が散文によつてつながれ、物語めいた自傳物語が作られるのも不思議ではない。かくして書かれたものが蜻蛉日記であると考へるのである。和泉式部日記にしても、おそらく同様の事情のもこに生れたものであらうと考へる。この寫實的の小説としての物語が、蜻蛉日記と名づけられたのは、上巻のをはりに「かく年月はつもれど、思ふやうにもあらぬ身をしながら、聲あらたまるも、よろこばしからず、なほ物はかなきを思へば、あるかなきかの心地ぞする。かげろふの日記といふべし」とあるによることは明かである。

「蜻蛉日記は、王朝時代における女性の生活が、いかなるものであつたかを、隅なく寫し出したものとして、代表的の作物である。王朝時代の日記文學としては、和泉式部日記、讀岐典侍日記、中務内侍、辨内侍日記、あるひは更科日記、十六夜日記等多くの作物はあるが、そのうちおそらく最も勝れたものであらう。仲文甫は蜻蛉日記解環序文に、「それ玉つしまのながれを汲みて、いとみやびたる伊勢小町は、なほあかりにたる世なればしばらくおきぬ。其



ころよりしもつかたに至りて、詞のうみの涌かへる和泉が、なまめける姿に、世繼をつゞりし筆の軸の、赤染がまめなる心をかね、少納言がかどくしきふしをもあざむき、のどやかにして、然もはなやきたる紫のゆかりの、さ衣のかさなれる口ずさみをも、うばへるに堪へたるは、たゞこのかげろふの君ならし」と激賞してゐるほどではないにしても、和泉式部日記の「あだめける姿」と比較して、はるかに眞面目である。

歎きつゝひとりぬる夜の明くるまは

いかにひさしきものとかは知る

といふ著者の歌は、やがて蜻蛉日記全部の心持をつくしたものと云ふことが出来よう。仲文甫が「按ずるに、公の若き時、おもひ人多くありしと見ゆ。さして、好色に名だゝる人にあらねど、そのころは、世に賢人右大臣と稱せられし、後の、小野宮實資公だに、色のかたには深かりしよしきこゆ、けだし大むね其ころの俗習にや。村上の聖帝も色のかたには、いと深くおはしけるよりして、公卿の風儀も、おのづからかくありしと覺ゆ。かの、東三條院、並に三道たちを産まれし仲正が女は、最も久しく公にそひ給ひし女と見ゆ。さればかの、かげろうの女君も、年比の人と稱して、歌なども折にふれよみかはされしこと、この記にあらはる。かの女の本性、けはひありさま、榮華、大鏡にも見えすといへども、物ねたみもなくして、おいらかに、おとなしかりし人と、何となく推しはかられぬ。されば、おのづから身の幸福もありしにや。中納言ためまさの女なども、思ひ人の中なるべし。其こと附録に見ゆ。かの町の小路の女は、殊に賤しき女としらる。されば、女君のむねのあく隙もなかりしなり。町の女の外に、懸想人もなほありしなるべし。中の巻に、久しく女君のかたく、かき絶えられしころ、女君の詞に、心さへ知りたる人のうせ給ひぬ

る小野宮のおとこの、御めしうどなり、これ等を思ひくらさん。近江は、あやしう色めくなんめれば、とのたまへり。其後、近江がこと處々に見ゆ。きく所に、十夜なんかよへると、ちぐさに人はいふめる、なんど見えたり。まだその外にも、思ひ人のありけむも知るべからず」と言つてゐるのをひくまでもなく、蜻蛉日記に表はれたところによつて、兼家が他の女に浮かれがちだつたのは想像するに難くない。兼家のおとづれも絶え絶えに、待つ夜の數の重なるを歎きあかしつゝ、守るものとは幼ない道綱ひとりである。ことに父兼家の才氣は、仲正が女の子の方に多く傳へられて、道綱は母の血を多分にうけてゐるらしいところを見ても、兼家がとかく夜がれがちだつたのも、或は文甫のいふのがあたつてゐるかも知れない。さはれひとり道綱の成人を樂しみつゝ、歎きの數の重なるに思ひつめては出家をしようとするほどの人である。内氣でもあつたらうが、いかにも眞面目な律義の性格だつたことは明かである。だから「歎きつゝひとりぬる夜の明くるまはいかに久しきものとかはしる」といふやうに、堪え堪えしてゐても堪へられぬ胸の情が、しぼり出されるやうにさへ訴へられもするのである。

かくて蜻蛉日記に描き出された、王朝時代の女性の姿は、沈痛に、しかもものはかなく、惱ましくあはれに紙面に浮動してゐる。たゞ純粹な女の用語で書かれてゐるために、文章が難解であつてまだ完璧の註釋がない。契沖の蜻蛉日記考證は水戸本をもつて校合したものであるが「おもひいるづるまにまに、所々に爪じるしなせるごとく、おぼろかに、いとたどたどしきもの」であるし、仲文甫の蜻蛉日記解環とても、横道にそれた解釋が多くて、文章の本筋をのがしてゐるので、あまりあてにはならない。明治以後のものにも、註釋に善本あるをきかない。



## 第四章 和歌の衰頹とその轉向

## 第一節 後撰集について

古今集の勅撰によつて、歌の格調はほぼ確立されたのであるが、この舉あつてから撰者たちが、その道の権者としてもてはやされ、いかなる場合にも彼等が必要とされるに至つた。貫之が朱雀帝の天曆九年に卒するまでは、屏風の歌として讀んだ歌が、凡そ七百首ぐらゐもあるであらうといふことは、すでに貫之の條に述べた。(第五册七三頁參照)貫之ばかりでなく、他の撰者とても同様である。大鏡に「かゝやむことなくおはします殿の、貫之のぬしの家におはしましたりしこそ、なほ和歌はめざましきことなりかし、と覚えしか。正月一日つけさせ給ふべき魚袋の損はれたりければ、つくろはせ給ふほど、まづ貞信公の御もとに參らせ給ひて、かうかうのことの侍れば、内におそく參るよしを申させ給ひければ、おほきおとど驚かせ給ひて、年頃もたせ給へりける、とりいでさせ給ひて、やがてあえものにもとて奉らせたまふを、ことうるはしう松の枝につけさせ給へり。その御かしこまりのよろこびは、御心の及ばぬにしもおはしまさざらめど、なほ貫之にめさむと思し召して、渡りおはしましたるを、待つて申しけむめいばく、いかゞはおろかなるべきな。

吹く風にこほりとけたる池のうをば

千代まで松のかけにかくれむ

集にかきいれたる、こゝわりなりかしな」とあるところを見ても、歌の道において、彼等がいかに尊重せられ、必

要とせられてゐたかを知るに足るのである。したがつて和歌の興隆が、古今集の勅撰にあづかつた人々によつて、刺激せられ、彼等を中心として湧きあがつたものとすれば、適當な繼承者を得ないかぎり、彼等の没落ととも、衰頹の機運をまねくに至るは、當然の勢といはなければならぬ。敏行かゆき、文則がかくれ、躬恒がこの世を去つて後の歌壇は、たゞ貫之ひとり、あかつきの星のやうに、寂しく光つてゐた。大鏡の記事は、おそらくさういふ時代のことである。貞信公忠平が、太政大臣であつたのは、承平六年から、天曆三年までの十四年であるから、その間の出来ごとでなければならぬ。さうして見るに貫之の晩年が、いかに光輝あるものであつたか、歌道の権者として泰山の重きをなして、一世を壓してゐたことは、容易に想像出来るのである。

しかるに俊成の後に、幾多の俊足が生れて、つひに新古今集時代なる黄金時代を現出したやうに、貫之の後もまた、いくたりかの俊傑が出てよまさうには、誰も考へるところである。元輔は昌泰二年順延喜十一年、能宣は同世二年に生れるといふ風に、貫之を繼承すべき、いくたの俊傑が、相續いで成長しつゝあつた筈である。それなのにどうして古今集の撰者たちが、光をかくすとともに、和歌が衰頹して行つたか。藤原博士は論じて「古今集」においては、篇中、何人の作か最も多きといふに、撰者四人に超ゆるものはあらず。その歌の數、貫之は百に近く、躬恒は五十に餘り、友則は五十に近く、忠岑は三十に及ぶ。別に素性の忠岑に過ぐること一二首なるあるが、これもまた當代の人なり。古人にしてこれに匹敵するものは、ひとり業平の忠岑と同じきあるのみ。これらに次いで多きは、やゝ老若の差こそはあれ、ひさしく延喜の聖世にあひし伊勢、敏行にして、近き過去の小町遍昭もこれに及ばず、上代の歌聖人磨もはつかに八首を數ふるのみ。その他においても、その名は古今といへども、今人を主として、古人は甚だ少



し。翻へつて後撰集を見るに、選様の方法頗る古今と趣を異にす。その詠歌の六十を超ゆるもの、貫之、伊勢あり、二十を出づるもの兼輔躬恒あり、十およびその以上なるもの、時平、業平、忠岑あり、いづれも延喜時代もしくはその以前の古人にして、今人にて十首のほかに出づるものは、大輔、右大臣師輔、左大臣實頼あるのみ。十首以下にて多きは古人か、また現代の人なれば權家貴人なり。撰者五人の歌は一首も見ることなく、當時の名匠ときこえし兼盛、忠見のごときわづかに一二首に過ぎないといふ理由から、撰者に自信なくして權者の前に屈し、たゞ延喜を崇拜し、保守したものに過ぎないといつてゐるが、後撰集の撰者として選ばれた人達が、古今集を繼承して更に一步を進めることの出来る力量をもつた者でなかつたことも、和歌の衰頹を來したひとつの理由としては考へられるが、時代がすでに古今集や、新古今集の時代のやうに、華新的氣運がなくなつてゐたことも、更に重大な理由として考へなければならぬ。

藤岡氏は、詩合歌合の流行から、歌が次第に遊戯的の玩弄物になつたことを説いてゐるが、祝賀の折々には屏風の歌を奉らしめられたり、あるひは行幸啓の時に歌を御召になつたり、更にまた管絃の遊びの後には必ず歌を奉らしめられるなど、歌がひとつの美術品としての役目をつとめるやうになつたことは、すでに歌が本來の面目を失つたことではなければならぬ。しかも貫之の晩年が、さういふ場合に常にもてはやされてゐたさういふことは、後撰集以後の人を俟たないで、彼自身が歌の衰頹の因を作つたといはなければならぬ。すでに貫之の晩年にさういふ傾向が出来てゐたとすれば、彼を唯一の光として仰いでゐた人々が、おのづからその方面に向つてゆくことは自然の勢である。貫之の卒したのが天慶九年であるから、梨壺に和歌所の置かれた天曆五年を隔たる五年前である。貫之の影響がいかに大

きいものであつたかは、想像するに難くない。

さういふ機運を負つて後撰集時代が来る。村上天皇の天曆五年、和歌所を梨壺に置かれて、藏人少將藤原伊尹が別に任ぜられ、讃岐大掾大中臣能宣、河内掾清原元輔、學生源順、近江少掾紀時文、御書所預坂上望城の五人をして萬葉集の訓釋を命ぜられ、かねて古今集にもれた古今の歌を撰せしめられた。萬葉集訓釋の事實は、天曆の帝の御息所が、萬葉集を讀まうとせられたが、すでにさういふ風に讀んでいゝかもわからなくなつてゐたので、誰にも讀めるやうにとの村上帝の思召しで企てられた事業であるとも言ひ傳へられる。とにかく、かくて後撰集は撰はれたが、何時奏覽されたか、それもわからないし、序文もない。榮華物語月の宴に「昔高野の女帝の御代、天平勝寶五年には、左大臣橘卿、諸卿大夫等集りて、萬葉集を撰ばせ給ふ。醍醐の先帝の御時は、古今集二十卷えりとよのへさせ給ひて、世にめでたくせさせ給ふ。只今まで六十餘年なり。古の今の舊き新しき歌、えりとよのへさせ給ひて、世にめでたくせさせ給ふ。この御時には、この古今にいらぬ歌を、昔の今のも撰ぜさせ給ひて、後に撰ずとて、後撰集といふ名をつけさせ給ひて、又二十卷撰ぜさせ給へるぞかし。それにも、この小野宮の大臣の御歌、多くいらためり。たゞし古今には、貫之、序いとをかしう作りて仕う奉れり。後撰集にも、左様にやと思召しけれど、かれはその時の貫之、此の方の上手にて、古をひき今を思ひ、行末をかねて面白く作りたるに、今は左様の事に堪へたる人なくて、口惜しく思召しける」とあるのを見ると、いかにも奏覽の事實があつたやうな書きぶりである。しかし、それにもこの小野宮の以下は、いかにも作者の想像にまかせてかいたといふ風で、少しそらぞらしい。清輔の袋草紙に「天曆五年十月日。詔坂上望城、源順、紀時文、大中臣能宣、清原元輔等、於昭陽舍令讀解萬葉集之次令撰之。(號梨壺五人也)一條



攝政爲藏人少將之時、爲此所之別當。(有奉行文)干時有平兼盛、而不入此中、不審云々、此集未定ニテ止之云々、後略、とあるのは、やや信するに足るやうである。その他、長明無名抄、後撰聞書注表紙裏書、阿佛夜の鶴、あるひは八代集抄、眞淵の後撰集標注、中山美石の後撰集新抄等いろいろに論ぜられてゐるが、未定稿のまゝで世に傳へたものであるといふのが、衆論の一致するところのやうである。

すでに萬葉集のやうな古典訓釋の事業がはじめられたといふことは、一方には時代の機運が古今集のほかに、何か新味をもとめようとしてゐたのではないかと考へられる。貫之の死後十年を経たないうちに、ふたゝび和歌所が置かれ、萬葉集の訓釋がはじめられ、しかも和歌撰述が企てられたといふことは、たゞ延喜の聖代を模倣し、繰り返さうといふ意圖からばかりであるとは考へられない。たとひ後撰集が、古今集を祖述することにこれ努め、その規範のほかに出づることをゆるさなかつたものゝ様に見えるにしても、——言ひ換へれば後撰集が古今集を模倣しようとした跡が歴然たるものであつても、藤岡氏のいふやうにたゞ古人の作を集めて、その道の準則と仰いだものとは考へられない。あるひはまた必ずしも「時勢は泰平無事、指紳久しく安逸に馴れて、境遇の轉化なければ、歌運の變遷を促すべき動機も生ぜずして、徒らに延喜の迹を追ふのみ」であつたとは言ひきれない。後撰集正義に「抑或人云。此集爲躰。古賢のかたり侍しは、歌姿はしらす、たゞこゝろをさきにせり。其故は、よろしきうたは古今集にとりつくされて、その後いくほども經ずして、えらびけるほどに、歌えがたかりけりと言へり。おほむね古今集みかきたてける飽屑なるべし。されども歌詞にはこの集の歌詞と、伊勢物語の歌詞をまねぶべきにやといへり」といつてゐるのは、多少耳を傾けるに足るかと思ふ。無名抄に「後撰にはよろしき歌古今にとりつくされて後、いくほども經ざりければ歌得がたくして、姿をば撰ばず、心をさきとせり」とあるのは、これに依つたものかも知れない。古今集を模倣しながらも、多少風體を異にして、こゝろをさきとした點が認められるとすれば、萬葉集の訓釋を必要とするやうになつた時代の心が、多少なりとも織りこまれてゐるわけである。もちろん懸詞や縁語は、古今集に比較して一層多いが、それをもつて、一層歌が技巧的になり、巧微になつたと斷言することは出来ない。後撰集の歌は古今集の優美、典雅なのに比較して、一般に淡泊で、曹達水に對する炭酸水のやうな趣きである。おそらく、古今集に對立することの出来るほどの集をとの思召しが、意のごとくかなはないで終つたのではないであらうか。古今集に對して新調をもとめたのであるが、貫之の影があまり大きいために、しかも選者として選ばれた人々が貫之たちのもとに育つて、學ぶところは古今集の技巧的風格だつたために、好尚の趣くところおのづからそこに走つて、いづれともつかないものになつて了つたのではないかと考へられる。さればこそつひに奏覽にもおよばず、未定稿のまゝに序文をも奉ることなしに、——いはゞ勅撰とはいふものゝ、帝の思召しにかなふやうなものが出来ないために沙汰やみの形になつてしまつたのではないかしら。正義にはなほ「於此集稱家之證本、皆以有謬說、先賢云、中書之時、度々雖及内覽、猶以不叶散感賦、仍其間不治定之本、流布于世間賦」といつてゐるやうに、確實な證本が傳はらなかつたのも、さういふ理由からではなかつたかと思はれる。もし右のやうに考へられるとすれば、すべての疑義は氷解する。畢竟するに後撰集は以上述べて來たやうに、古今集に對立するほどに新しい格調のものを作らうといふ思召しがかなはないで、つひに出來あがつたものが、いだづらに「古人の作を集めて、その道の準則と仰いでゐるやうに見えたり、徒らに延喜の迹を追つたものに過ぎないことになつたのであらう。かくて、時代の心は明かになる。新しく芽ばえた歌壇の要求も、類勢を



動かすことは出来なかつたのである。古今集の代表者として長く時代を導いて来た貫之の死とともに、新しく動き出さうとした要求はその芽をあぐるにはあまり時が早すぎて、無惨に踏みにじられてしまった形である。

### 第二節 後撰集の歌とその人々 (一)

さて後撰集撰述の企ては、貫之歿後の歌壇に、かすかに動かうとした新氣運を明かに見ることの出来るものであるが、つひにまたこの新氣運が、芽生のまゝに枯れはてた事實をも、同時に物語つてゐるといふことは、また後撰集の歌がどういふ風なものであるかを、暗示してゐることにもなるのである。

それならば後撰集の歌は、どんな傾向で、どんな特質をそなへてゐるか。前に藤原氏の説をひいて「ひるがへつて後撰集の歌を見るに、その詠歌の六十を超えるもの貫之、伊勢あり、二十を出づるもの兼輔、躬恒あり、十およびその以上なるもの、時平、業平、忠岑あり」云々と言つた、主なる人々の、いかなる歌が採擇されてゐるかを見たならば、凡そその大略は察することが出来るかと思ふので、まづそこから筆を進めてゆくことにする。

延喜の御時歌めしけるに奉りける

はるがすみたなびきにけり久方の

月のかつらも花やさくらむ

これかれまといひして酒たうべけるまへに梅の花に雪のふりかゝりけるを

ふる雪はかつもけなむ梅の花

ちるにまどはず折りてかざむ

兼輔朝臣のねやの前に紅梅を植ゑて侍りけるを三とせばかりの後花さきなどしけるを女どもその枝を折りて

みすのうちよりこれはいかゞといたしてければ

○ 春ごとに咲きまさるべき花なれば

ことしをもまだあかずとぞ見る

壬生忠岑が左近のつがひの長にて文おこせて侍りけるついでに身を恨みて侍りける返事に

ふりぬとて痛くなわびそ春雨の

ただにやむづき物ならなくに

櫻の花の瓶にさせりけるが散りけるを見て中務に遣しける

○ 久しかれあだにちるなと櫻花

かめにさせれどうつろひにけり

○ 風をだにまちてぞ花の散りなまし

こゝろづからにうつるふがうき

花のもとにてかれこれ程もなく散ることなどを申しけるついでに

○ 春くれば咲くてふことを濡衣に

きするばかりの花にぞありける



櫻川といふ所ありときよて

つねよりも春べになれば櫻川

なみの花こそまなくよすらめ

山櫻を見て

しら雲と見えつるものを櫻花

けふは散るとやいろことになる

棹させど深さもしらぬ淵なれば

いろをば人もしらすとぞ思ふ

あさぼらけしたゆく水は浅けれど

ふかくぞ花のいろは見えける

やよひにうるふ月ある年つかさめしのところ申文に添へて左大臣家につかはしける

あまりさへ有りて行くべき年だにも

春にかならずあふよしもがな

君にたにこはれでふれば藤の花

たそがれ時もしらずぞありける

やへむぐら心のうちに深ければ

花見にゆかむいでたちもせず

やよひのつごもり

ゆくさきになりもやすると頼みしを

春のかきりはけふにぞありける

三月のつごもりの日久しうまうでこぬよしいひてはづる文の奥にかきつけ侍りける

またも來む時ぞと思へど頼まれぬ

わが身にしあれば惜しき花かな

貫之かくて同じ年になむ身まかりにける

これが後撰集春の部にある、貫之の歌全部である。後撰集に六十二首のうち春十六首である。古今集撰述以後に作られた歌のうちから、撰者の眼識によつて撰入せられたものでなければならぬ筈である。だからこれらの歌は、やがて撰者の考へや態度を伺ひ得るものでもある筈である。

これ等の歌を古今集春部にある貫之の歌と比較して見れば、彼の姿がはるかに崩れて來てゐることが知られる。といふのは、古今集に撰ばれた歌は、「かすみたち木の芽もはる——」とか「衣はるさめふることに——」とか、「青柳の糸よりかくる——」「みだれて花の——」といふやうに縁語と戀詞とを巧に織りなして、鎖の一環一環がつながり、あるひは句をへだてた縁語のひびきによつて、連綿と流れるしらすの美しさがある。あるひは春たつけさの風にとけゆく氷は、「袖ひちて結びし水の氷れる」ものであるとか、花なき里にふる雪は、木の芽もはるの雪が、かす



みつゝふるために花と眺められ、あをやぎの糸よりかくる春なるがゆゑに、みだれて花がほころび、梅の花の、それとしるくにほふのも、暗部山であるために闇にしるくと巧まれる。あるひは春日野の若菜つみにゆく人が、しろ妙の袖ふりはへてこそ、いかにも美しい春の光のうちに眺められ、ふるさとの花が、むかしのまゝの香に匂ふゆゑに、うつろひやすき人の心が、人はいさ心もいらす、と軽くうらむやうにもひびき、あるひは山のかひより見ゆるしら雲も櫻花さきにけらしも運ばれるために、ほんのりと春を匂つて来る。かういふ風にあるひはしらべに、あるひは巧細なしたて方に、あるひはまた、美に陶醉しきつた若い心から、織り出だされた歌は、まつたく美しい模様面を見るやうな、しかも渾々と主情的のひびきを柔かにひびかせてゐるのである。どこまでも態度が凝つて、あらゆるものを美しくしないでをられぬ心が、どの歌にも影をひいてゐるのである。しかるに後撰集の歌はどうか、

後撰集正義によれば、姿を主とした歌は、古今集にとりつくされてゐるから、こゝろを主としてゐると言ひ、無名抄にも、同じことをくり返してゐるといふことを、前にも述べたが、はたしてこゝに、——第一に見ようとする貫之の歌に、この事實をつきとめることが出来るであらうか。

ひとわたり見渡したところ、第一に感ぜられるのは、こゝに擧げた歌の多くが、古今集撰述以後、むしろ晩年にちかひものであらうと察せられるやうな風格を持つてゐることである。何がそれを思はせるかといふに、古今集時代の彼の歌に見られるやうな、どの歌にも、あらゆるものを美しく見ようとして、どこまでも凝つてゆかうとする意氣ごみが、どことなしにうすれてゐることである。この事實は、後撰集の歌風に非常な影響をもつてゐるかと思へるのであるが、しかし春の歌から夏秋の部に目をうつして行つて見ると、次第に花やかさがうせて、むしろ質實な歌風を示

してゐるところ、四十以後の人が、おのづから達する境涯であつて、花から實にうつてゆく道程を思はせる。だから、ことに花やかに見ようとする態度が、おのづからおちついて来たものだとも解せられぬこともない。

ことしもまた花はあかず見ようとは思ひながらも、春ごとにさきまさるべき花ゆゑに、「まだあかずとぞ」見るのであつて美に陶醉する心ではない。「古今集時代には「山たかみ見つゝわがこし櫻花」のちるのも、たゞ美しく「風はこゝろにまかすべらなり」と歌ひ、「水なき空に波たつ」と見た。あるひは「散りまがふ花に道はまどひ、夢のうちに花ぞちりける」と酔ひ、風に水に散りながれる花も、みやまかくれの花をも見ることが出来ると讚美してゐる。しかるに「久しかれあだに散るな」と願つた櫻花が、「瓶にさせれど」うつろひ、「風をだにまちてぞ」ちる花ならば惜しまれもすまいが、花は風を待たない。それも人の心づから、ともひびくのである。山のかひにしら雲と匂つてゐた櫻も、「けふはちるとやいろことになる」を見る心は、いづれの場合にあつても、たゞあるものを美しく見て、おのれの心持である。

これは、「またも來む時ぞ」と思つて見る花ではあるが、「頼まれぬわが身にしあれば」ことさらに惜しまれるやうに思ふ心、——常に自分がふりかへられて、對象のうちに陶醉することの出来ない心を語つてゐる。かういふ心持からは、美しい模様を織るやうに、巧緻なものに凝らうとすることの出来ないのは當然である。をりてかささうと思ふ梅の花も、ちる雪のうちに眺められ、かつ消えなば梅の花もそれとまどはず手折れようと願ひ、身を恨ちがちな忠告を、春雨には草も萌えよう、花もさかう、ありへばまたよき日もめぐり來ようと、慰めながらも、何だか寂しさうである。さうしてまた、巧まれた縁語などが、美しくひびかない。「——春べになれば櫻川」といつても、波の花が、



波の花として、水なきそらに立つ波のやうには、生々として来ないし、「さくてふことを濡衣に」となまめきながら「着するばかりの花が」やつぱりしんみりとしてゐるし、あるひはまた、ふかくぞ見ゆる花のいろが、淺き水に相對して、いろふかく見えて来ない、却つて寂しく思はれるといふ風である。多少歌が觀念的になつて、「棹させど深さもしらす——」といひ、「やへむぐら心のうちに深ければ——」といひ、あるひは「ゆくさきになりもやすると——」など心の深さを見せようとする傾向が、かういふさびいろを出すやうにもなつたのではないかと考へられる。「君にだにとはれでふれば——」と自分の境遇をふりかへつて見ないではをられぬ寂しさも、そこから生れる。この觀念的の傾向が、美をもとめる傾向と融けあつて、あるひは

はるがすみたなびきにけり久方の

月のかつらも花やさくらむ

といふ風な高いしらべをもなすのである。

かういふ風に検討して来ると、古今集時代に色濃く表はれてゐた美の陶醉は、——理知的な技巧の冴えも常にあらゆるものを美として見ようとするある情趣につままれて、態度はどこまでも知巧的ではあつたが、かくて優美典雅な歌風を成したのであるが、こゝには、態度はおなじやうに知巧的ではあつても理知の冴えが曇り、美の陶醉からさめてゆく寂しさがある。したがつて態度がじみになり、花やかな言葉が色あせてゆく。あるひはかつては花やかに美しく眺められた自然や自分の姿が、何かしら寂しい影をもつて来る。それゆゑ歌がまた質實の風をそなへたものにもなるのだと考へられる。これが後撰集に撰ばれた賀之の歌の風である。

かくて後撰集のある部面の傾向をこゝに伺ふことは出来たが、その他の人々はどうか。次に伊勢を観察することにしようと思ふ。後撰集に選ばれた伊勢の歌の半分以上は、人との贈答である。いまその贈答の場合をのぞいて、すこし考察の歩を進めることにする。

人のもとにつかはしける

白玉をつゝむ袖のみなかるゝは

春はなみだもさえぬなりけり

春のこゝろを

あをやぎのいとよりはへて織るはたを

いづれの山のうぐひすかきる

題しらす

うぐひすに身をあひかへば散るまでも

わがものにして花は見てまし

山櫻を折りておくり侍るまで

君みよとたづねて折れる山櫻

ふりにしいろと思はざらなむ

題しらす



木がくれてさ月まつとも郭公

はねならはしに枝うつりせよ

夏の夜しばし物語して歸りにける人の許に又のあしたつかはしける  
ふた聲ときくとはなしに郭公

夜ふかく目をもさましつるかな

女の物見にまかりいでたりけるに、こと車傍に來りけるに物などいひかはして後に遣はしける  
郭公はつかなる音を聞きそめて

あらぬもそれとおぼめかれつゝ

まかる所しらせず侍りける頃、またあひしりて侍りける男のもとより、日頃尋ねわびてうせにたるとなむ思  
ひつるといへりければ

思ひ川たえずながるゝ水のあわの

うたかた人に逢はで消えめや

つらくなりける人につかはしける

いかでかく心ひとつをふたしへに

憂くもつらくもなして見るらむ

なき名たちける頃

清けれど玉ならぬ身の佗しきは

みがけるものに言はぬなりけり

あひしりて侍りける人の稀にのみ見えければ

日をへても影に見ゆるは玉蔓

つらきながらも絶えぬなりけり

男の忘れ侍りにければ

佗びはつる時さへものゝ悲しきは

いづこをしのぶ心なるらむ

題しらす

吹く風のしたの塵にもあらなくに

さもたちやすきわが浮名かな

題しらす

面影をあひみしかずになす時は

こゝろのみこそしづめられけれ

かしら白かりける女を見て

ぬきとめぬ髪のスぢもてあやしくも



へるける年のかずをしるかな

贈答と明かに知られる場合を除いて、凡三十首近いうちの半数を抽出して見た。このうちまだ、嚴密に贈の場合を除けば、對人關係の歌は、たつた八首より無いことになる。これははたして藤岡氏のいふやうに「前略かの集よりもなほ力を四季と戀とを専らにしたるを見る。わけて主力を盡せるは、戀六篇にして、そのうち男女の贈答凡そ半ばを占むべし。古今には戀の部のうち、男女の贈答は、業平、小町、橘清樹、典侍因香等の數首に過ぎざるに、後撰にはいたるところこれあり。男女の間の秘事を暴露して憚ることなし。風俗の時を経てますます淫靡に流るゝや、推して知るべし。さらばこれらの贈答は、實際には古今時代には稀なりしか。何ぞ必ずしも然らむ。かの時代とても、固よりそのことなきにあらず。たゞ公然その秘密を發くを厭ひて、戀の歌も多くは題しらずとおぼめき、贈答ともに載することは少くして、たゞ作品のすぐれたるを選べるなり。後撰に至りては、作品の優劣よりも、むしろ贈答の事實を知らしむるを主とす。過ぎ去りし世には、宇多天皇の御息所たりし伊勢の御が時平との贈答、陽成天皇の後宮にありし大つぶねが皇子元良親王および平仲との贈答、今の世には、大輔が朝忠、道風、敦忠との贈答等、公然これをあらして弘く傳へたるは、その歌の主も恥とせず、讀む人もあはれ深しなど褒められたればなるべし。この點もまた後撰が古今と趣を異にするところにして、古今はなるべく和歌が花鳥の便、交契の媒たらむことをさけて、戀にも情の切に詞の文あるのみ取りしが、後撰は今昔の情話を蒐集して、世間の談柄に供し、男女喜んでこれを己が贈答の模範とせし」ものであるための結果が、こゝにも見られるのであらうか。後撰集に撰ばれた伊勢の歌、六十四首のうち、まづたゞ對人關係を離れて歌はれたもの、八首にすぎないといふ事實は、藤岡氏のいふやうに「男女の秘事を暴露して憚

る」ことなく、「作品の優劣よりもむしろ贈答の事實を知らしむるを主とし、今昔の情話を蒐集して世間の談柄に供し、男女喜んでこれを己が贈答の模範とし」したものであるとまでは言はれないにしても、何かしら新鮮なものを求めようとして、なるべく實感的にといふ心持が先に立つたためであるとも考へられる。古今集の時代にも男女の贈答は盛んに行はれたのであるが、「たゞ公然その秘密を發くを厭ひて、戀の歌も多くは題しらずとおぼめき、贈答ともに載することは少なかつたのに、これが贈答ともに載せて憚らなかつたのは、その事實を知らしむることによつて、一層歌を實感的にしようとしたのであると解釋せられるからである。かういふ傾向に就いては、前節に、萬葉訓釋の企てが、すでに萬葉集に興味をよせるやうになつた事實を物語るもので、何かしら新鮮なものを求めようといふ心の動きを見ることが出来るといふことを述べておいたが、古今集が上品にとりすまして、題しらずとおぼめいてゐるばかりでなく、思ふ心をもおぼろに春の霞と美しく匂はせたやうな表現から、萬葉集の直截に、戀しい、悲しい、寢たい、といふやうに、思ふ心をすば言つてのけるやうな態度に接したならば、たとひ贈答の事實を知らしむるためではないにしても、己が贈答の模範としようとしないうまでも、事實を暴露することに何の憚りをも感じなくなるのは當然であると考へられる。しかも、贈答の事實として明らかにすることが、却つてその歌を實感的にする所以であるとすれば、必ずしも「今昔の情話を蒐集して、男女の談柄に供」したものであるとは言へないのである。

それでは伊勢の歌に、實感的なものを見ることが出来るかどうか。美しく鶯もよそふであらうと想像する機は、青柳の糸よりは、える機で、縁語のうへに巧まれたものにすぎない。だからこの青柳は、模様として織りだされた青柳であつて、生きた青柳ではない。鶯もまた青柳の模様のなかに點出されたまで、生きた鶯ではない。五月を待つて鳴



く郭公であるから、木がくれてまだなかない。なかないにしても、せめて枝うつりする姿を見ようといふに作者の感情がはじめて動く。木がくれに見つけたらしい郭公の姿も出てゐる。しかし歌の姿は古今集の「五月こば鳴きもふりなむ郭公まだらきほどのこゑを聞かばや」の方がはるかに高い。たぐんだ心は「春がすみたつを見捨て、ゆく雁は花なき里にすみやならへる」に比して、青柳の歌ははるかに巧みである。しかしともにしらべの高らかなるは、到底古今に如かないことを思はせる。無き名のたへを玉ならぬ身ゆゑに、みがけるものに言はないと俗ぶる心には、清けれどと辯護しながらも、人間ならば仕方あるまいと思はせるものがある。こゝでは詞書がものを言つてゐることになる。「さもちやすきわが浮名かな」には、浮名のたつがあまり苦にならないやうに見える。たゞ「吹く風のしたの塵」と喩へられて見ると、ちるさく思ふ心が、少しは見えないでもない。「面影を逢ひ見しかず」に思ひなして、心だけはしづめられると言ひながら、しづめられぬ胸の思ひが反語のやうにひびくし、白髪のかすにも老がしのばれる心には、自分をも寂しむ心が「あやしくも」にひびいてゐる。これを古今集の

## 題しらす

人知れず絶えなましかば侘びつゝも

無き名ぞとだにいほましまを

冬がれの野べとわが身を思ひせば

もえても春を待たましまを

あひにあひて物おもふ頃のわが袖に

宿る月さへぬるゝがほなる

ふるさとにあらぬものから我ために

人のこゝろのあれて見ゆらむ

しるといへば枕だにせで寝しものを

塵ならぬ名の空にたつらむ

等の歌に比較して見たら、しらべが低調で、いかにその詠歎が露骨であるかを見ることが出来よう。古今集では「なき名立ちけるころ」とか「男の忘れ侍りにければ」など、ある詞書が、「題しらす」もおほめかされてゐるのも、藤岡氏の批評に指摘されてゐるところであるが、おほかたその態度がつましましやかである。

「いかでかく心」の「憂くもつらくも」見ゆるだらうと恨む心と「ふるさとにあらぬものから」と婉曲に、さうして「人の心のあれて見ゆらむ」とかこつ心、「清けれど」みがけるものに言はぬは「玉ならぬ身」であるから仕方ない。どうせうしろ暗いところが無いとは言へないんだ、と吐きだされるやうにつぶやくかごとと、侘びながらも、人知れず絶えてしまつた仲なら、「無き名ぞとだに」誤解されように、あゝして絶えたのだ。と歎く心には、あの人のふるまひもあまりにあらはにすぎると、人目をはじかる心が動いてゐる。「侘びはつる時さへものゝ——」は古今集には「讀み人知らず」として、結局が「涙なるらむ」になつて出てゐる。それが「男の忘れ侍りにければ」となつては、いよいよ露骨である。つらきながらも、時折に影のやうに見ゆるを恨む心が、つきつめられると、うたかたのやうに東西にながれて頼めない人には、いつそ逢ふまいと心をかたく閉づるかどだつた心にくらべては、「冬枯れの野べとわ



が身を「寂しいものに歎かれても、なほ春を待つ心の方がしほらしく、たをやかに、あるひは女らしくて歌がらも乗かに優しくなる。あるひはまた、月かげに袖もしめりがほにひとりなめがちな心の方が、はるかに歌はしめやかにおちついて来るのである。

かういふ風に觀察して見るに、後撰集に撰ばれた伊勢の歌は、古今集に比較して贈答の場合がはるかに多く、男を相手にしてゐないものは、まことに少ない。古今集に「讀み人知らず」とした歌の作者の名を出してゐるばかりでなく「男の忘れ侍りにければ」と詞書までつけてゐる。故意に伊勢の歌として作者を明るみに出したのか、あるひは伊勢の歌でないものを、伊勢の作としたものか、いづれにしても撰者の態度は明かである。それからまた、後撰集には伊勢の隠れた一面が——古今集では見られなかつた、かどかどしい部面が表はされてゐるやうな歌を見ることが出来る。この點に於いては、藤岡氏の説は相當に後撰集のある部分をつくしてゐる。しかしまた、一方に實感的なるものを要求したために、詳しい詞書をつけてゐる點も認められる。

かういふ風にして後撰集には、それほどの歌でなくても、贈答なるがゆゑに贈答ともに載せてゐるといふ風が、いたるところに眼にとまる。その佳調なるものは

春くれば木かくれ多きゆふ月夜

おほつかなくも花陰にして

たちわたる霞のみかは山たかみ

見ゆる櫻のいろもひとつを

春日さす藤のうらばのうらとけて

きみしおもはゞわれもたのまむ

をしめども春のかぎりのけふのまた

ゆふぐれにさへなりにけるかな

白妙にほふかきねの卵の花の

うくも來てとふ人のなきかな

あひ見しもまだ見ぬ戀も郭公

月に鳴く夜ぞよに似ざりける

つねもなき夏の草葉におく露を

いのちとたのむ蟬のはかなさ

秋風の吹きくる宵はきりぎりす

草の根ごとに鳴きみだれけり

秋萩の枝もとををになりゆくは

白露おもくおけばなりけり

のごとく、淡々たるうちに相當に味をたゞへて、素直に叙景の心をよせてゐるが、多くは故意に縁語、懸詞、譬喩等によつて巧まうとした心の跡を見ることが出来るものが多いやうである。したがつて、古今集のやうに、おなじ縁語や懸詞によつて織りなされるしらべではあるが、自然に流れてゆくものが少ない。



## 第三節 後撰集の歌とその人々 (二)

貫之以下、その歌の多い人々を観察してゆくつもりであつたが、この部分に頁数を多く費してしまふことは謹まねばならないから、以下他の機会に論ずる場合もあらうから、割愛して撰者について一瞥して見ようと思ふ。

梨壺の五歌仙のうち、歌人として自他ともにゆるしてゐたと見られるのは清原元輔であらう。彼は、醍醐天皇の延喜八年に生れ、一條天皇の正暦元年八十三歳で歿してゐる。古今集の作者深養父の孫、下總守春光の子である。重代和歌を善くして元輔に至つて最も世に著はるゝに至つた。八雲御抄に、「能宣、元輔は爲重代之上尤可然歌人なり、又重代にあらずといへども、此道稽古のものなり」とあるが、歌には相當に苦心もし、通達してゐると認められてゐたのである。枕草子に清少納言が、「前略、大臣御覽じて「などか歌はよまで離れりたる、題とれ、」とのたまふを、「さること承りて、歌よむまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず」「ことやうなること、まことさることやは侍る、などかはゆるさせ給ふ、いとあるまじきことなり、よしこと時は知らず、こよひはよめ、」など責めさせ給へど、けぎよう聞きもいれて侍ふに、こと人ども詠みいだして、よしあしなど定めらるゝほどに、いさゝかなる御文を書きて賜はせたり、あけて見れば、

元輔かのちといはるゝ君しもや

こよひの歌にはづれてはをる

こあるを見るに、をかしきことぞたぐひなきや、いみじく笑へば、「何ことぞ何ことぞ」と大臣ものたまふ

その人の後さいはれぬ身なりせば

こよひの歌はまづぞよままし

「つつむことさふらはすば、千歌なりとも、これよりぞ出でまうで來まし」と啓しつ」と書いてゐるのは、元輔の名聲を伺ふに足りるであらう。天曆五年正月、河内權少掾に任ぜられたのを初めとして、應和康保年間少監物、中監物を経て、大藏少丞、民部大丞にいたり、安和二年九月從五位下に叙せられ、河内權守に任ぜられ、更に、周防守に遷り、鑄錢長官を兼ね、天元中從五位上、寛和二年、彼が、

肥後守むねとしがみまかりたる所を人々のぞみ申すときゝ給つてうちの靱負がもとに遣はしし  
たれかまた年へたる身を振り捨てゝ

吉備のなか山越えむとすらむ

とかつて望んだ肥後守に任ぜられたのを最後として、任期のあけた翌年世を終つたのである。

つかさ給はらで、又の日左近藏人の許につかはし侍る

年ごとに絶えぬなみだや積りつゝ

いとよふかくや身は沈むらむ

と歎いたのは天曆の御時であらう。といふのは「紅葉合殿上人にせさせ」られた「村上の御時に」彼は  
わが思ふ倉部の山のもみち葉に

おとらぬものは心なりけり



と訴へかましく詠んだ、同じ御時らしく考へられるからである。かういふ風に官位を望んだ歌は

小野宮の太政大臣の家の池のほこりにて櫻の花を惜しむ

櫻花そこなる影ぞ惜しまるゝ

しづめる人の春かと思へば

藏人所の櫻の花の散るを見てつかさ給はるべき年の春給はらで

櫻こそ雲と散りけれ時雨れつゝ

春とも知らで過しつるかな

つかさめしの子日にあたりて侍りしに、あぜちの更衣の局より松をはしにて物を出して侍りける

ひく人もなくて年ふるみ吉野の

松は子の日をよそこにこそきけ

とか、あるひはまた、

つかさめし頃過ぎて雪の降りて侍りしに兼盛か許に遣はしし

雪深み越の白山われなれや

たが教へしに春を知るらむ

加階まうしはべりしにえ給はらで鶯の鳴く折に

鶯の啼く音ばかりぞ聞えける

春のいたらぬ人のやどには

加階しはづるべき年もれてえしはべらで雪のいたくふる日

憂き世には行き隠れなでかき曇り

ふるはこゝろの外にもあるかな

年頃つかさもえ給らで子日しに人のゐて出でゝ侍りしに

谷深く沈むちかひにひかされて

老いぬる松は人も手觸れず

といふやうに、至る所に、あらゆる機会に歎息をもらしたり、あるひは訴へたりしてゐる。官位の昇進を願つたのは、もちろん元輔ひとりではない。これがこの時代一般の傾向である。貫之とても、

身を歎きてよめる

春やいにし秋やは來らむおほつかな

かげの朽木も世をすこす身は

冠給はりて加賀介になりて美濃の介に移らむと申す間に内の仰せにて歌よませ給ふ奥にかける  
降る雪や花と咲きても頼めけむ

などて彼の身のなりがてにする

世を歎きてありきもせずしてあるあひだ、三月つごもりの日雅正の朝臣のもとより



君こそすて年は暮れけりたち歸り

春さへ今日になりにけるかな

ともにこそ花をも見むと待つ人の

來ぬものゆゑに惜しき春かな

と侍るかへし

君にだにゆかでへぬれば藤の花

たそがれ時も知らずぞありける

八重葎心のうちに深ければ

花見にゆかむいでたちもせず

などの歌はあるけれども、官位を求むるに元輔のやうに露骨ではない。さういふ歌の數もまた少ない。源順も元輔同様、一生不遇で過したらしいが、

ほどもなき泉ばかりに沈む身は

いかなる罪の深きなるらむ

といひ、あるひは、

天つ風空に吹き揚ぐる雲もあらば

澤にぞ田鶴は鳴くと告げなむ

といつてゐるぐらゐのもので、元輔ほどでもないやうである。尤も「應和元年勅解由判官の勞六年古になづらふるにかくしづめる人なしつかれたる馬のかたを作りてつかさの長官朝成朝臣に給ふに加へたる」長歌があつて、すいぶんな念入に官位を望んでゐる。

あら玉の としのはたちに 足らざりし

ときはの山の 山さむみ

風もさはらぬ 藤ごろも

二たびたちし

あさ霧に

こゝろも空に

まどひそめ

みなしら雲と

なりしより

物思ふことの

葉をしげみ

けぬづき露の

葉におきて

夏はなきさに

もえわたる

ほたるを袖に

拾ひつゝ

冬は花かと

みえ紛ふ

木のまゝに

ふり積る

雪をたもとに

聚めつゝ

ふみ見ていでし

道はなほ

身の憂きにのみ

なりければ

こゝも彼處も

葦根はふ

下にのみこそ

沈みけれ

誰こゝのへの

澤水に

鳴く鶴の音は

久方の

雲のうへまで

隠れなく

高くきこえて

かひありと

いひ流しけむ

我はなほ

かひも渚に

みつ湖の

世には比べて

住の江の

松はむなしく

老いぬれど

みどりの衣

脱ぎ更へむ

春はいつとも

白波の

波路にいたく

ゆき通ひ

ゆもとり敢へず

なりにける

船のわれをし

君しあらば

あはれといまだ

沈めじと

あまのつり細

打はへて



引くとし聞かば 物は思はじ

といふのがそれである。藤原氏が親子兄弟、官位の争奪のためには仇敵のやうにしてにらみあひ、あらゆる犠牲を敢てして勢力を得ようとしてゐた時代に、歌よみとしての彼等が、たゞ歌によつて楽しみ、歌によつて慰められるといふやうな、純粹の心でをられなかつたのは、それが時代の姿であつて、彼等を責めるわけにはゆかない。

藤岡氏が「古今の撰者はいづれも卑位下官のもの、しかもみづから撰ぶこと最も多く、前の太政大臣、今の左大臣のごときは、二三首にすぎず、御製は一も見ることなし。」（東常縁は醍醐天皇御歳なほ若くましましによりて、御製を入れさりしにやといへり。されど古今集の奏上せられし延喜五年は、聖算二十一歳なりき）敢て自負するにあらず。他を凌ぐにあらず。文學の前には権力なきなり。後撰の爲すところはこれに異なり。勅撰和歌集に當帝の御製を掲ぐるは、この集にはじまれるが、これは叡聖の御製を仰ぐ所以にして、當然の所置ともいふべけれど、當時著名の歌人を措いて、左右の大臣そのほか、權家の子弟の作を多くとりしは、詠歌の秀逸なるがためか、はた別に故あるか。そも／＼撰者は權要の人にあらずんば、和歌をよくせじと、まじめに考へしか。平安朝の文學は上流の文學なりしことは、われこれを知る。文物の指導者は上流の社會なりしことは、われこれを知る。さはれ皇室の外戚、當朝の執政たるもの、果して第一流の歌人なりしか。嗚呼、文學者みづから悔れり。權力の前に屈せり。かくしてひとり文學の高からむことを望むも得べけんや。後撰は古今を規矩とす。しかもこゝに至りてかの規矩に従ふ能はさりしなり。」といつてゐるやうに、彼等がいらないところに遠慮して、自分の作の撰入を措いた所以は、文學の價値に對する自信よりも、常に榮譽名達を望んでやまなかつた心から、つひに權要官位を崇しとするに至つたものであるといふことが出

來よう。時代の心は、彼等が文學の價値に對する考へをも、根柢からくつがへしたものであるといふことが出来るのである。

元輔とても、前にも言つたやうに相當に腕前のすぐれた歌人である。三月盡を歌つては

風はやみよし野の山の櫻花

ちらぬに春のすきぬてふらむ

とよし野の櫻に思ひを馳せ、「藏人所まかりはなれて後、梨壺にてをのこども、雨ふる日さけたうべしついでに、ともだちにあひて侍りし」を

いそのかみふりにし人に逢ふ時は

うれしかりけり夏のよの雨

と歌つてゐるのは、あるひは梨壺に召しあげられる前に藏人として仕へたことがあるのかも知れない。さうして御歌所の寄人として召されたよろこびもあつたにちがひないと想像せられる。あるひはまた、

さみだれのあまりもまだし時鳥

たゞひと聲にあけもこそすれ

自分の子どもを歌つては、

二葉にて見し面影もかはらぬに

若葉つみける今日にあふかな



おりたちて若葉をいかでつませけむ

膝をはなれしほどもへなくに

と真情を吐露し、「三月ばかり櫻のはなのいとおもしろくさきたるに、風のよるいたく吹きはべりしに」  
くれて後うしろめたきを山櫻

風のおとさへあらくきこゆる

それからまた「くにもちがおなじごと、のぞみならで歎くと聞き侍りしころ」自分のことのやうに同情せられて  
つれづれとながむる春の鶯も

なぐさめてだになかばなかなむ

と思ひやつてゐるのなど、いづれも珠玉のひかりを放つてゐる。

源順字は貝瑋、元輔よりもすこし若く、延喜十一年に生れて、永觀元年七十三歳で歿した。彼は嵯峨天皇の皇子大納言定の曾孫で、左馬允舉の子である。歌仙傳や拾介抄、尊卑分脈にも、詩文を能くし、かねて和歌に通達してゐたことを傳へてゐる。天慶五年元輔等とともに勅をうけて萬葉集の訓釋に従ひ、後撰集を撰進したことは、すでにのべた通りである。大日本史に「伊尹時爲藏人左近衛少將、帝手書敕旨賜之、順行別詞、中有雄劍在腰、拔則秋霜三尺、雌黃自口、吟又寒玉一聲之句、時人焉」と書いてゐるが、この有名な詩句は本朝文粹や和漢朗詠集に傳へられてゐる。進士に及第して天曆七年十月文章生となり、勘解由判官を経て、天曆の末か天徳の初めに任ぜられたものらしい、康保三年從五位下に叙せられ、應保天元年中、民部大丞下總守、和泉守等に歴任して能登守に遷り、從五位上

までになつたが、常に官途の沈滞して進まないのを憂へて、沈鬱の情を詩歌に洩らし、あるひは元輔の條にも述べたやうに、請願の念ひを訴へてゐるのである。前に舉げた疲れたる馬のかたを作りて勘解由の長官朝成朝臣に訴へた長歌のごとき、むしろその沈淪の情に同情せられる。

嘗て勳子内親王のために作つた和名類聚抄は、學者として彼の才識の富贍を物語るものであり、落窪物語や宇津保物語が、彼の作として擬せられ、竹取物語をも彼の作に歸せんとするは、また一方に彼の文學者として才藻の豊かであつたことを知るに足るのである。竹取物語が順の作でないことはもちろん、落窪物語や宇津保物語も彼の作とすべき確證のないことは、すでに述べたからこゝに繰返す要はないが、たゞその作者を順にもつて行かうといふのは、すでに彼の文藻が認められてゐた所以である。規子内親王の野宮歌合の判は彼の手に成つたもので、女房を多く勝としたために、正通が、

霜枯の翁草とはなのれども

女郎花にはなほ靡きけり

と皮肉られた話は有名である。源順集にはこの歌合の序跋ともに載せてゐるけれども、これは源爲憲の作である。彼がことに詩文の才に長じてゐたことは、大日本史に「雅愛橘在列文章、輯爲七卷、作序傳世」と書いてゐるのを引くまでもなく、その本朝文粹に載せてゐる作を見れば、いかに彼がありあまる文才をもつてゐたか想像することが出来る。彼が源融の奢侈を諷刺した河原院賦は、古來嘖々として喧傳せられ、人口に膾炙してゐる。その

強吳滅兮有荆棘 姑蘇臺之露漢々



の句のごとき、吟誦にたへたるものである。

かういふ風な彼が、和歌のうへにどういふ姿を現はしてゐるか。彼の集のはじめに掲げられた、あめつちの歌四十八首は、彼みづから「もと藤原の有忠の朝臣藤六が返しなり。彼はかみのかぎりにその文字をすゑたり。これはしもにもすゑ、時をもわかちつゝよめる」といつてゐるやうに、春夏秋冬思戀の六部に各八首づゝ。

あらさじと折り返すらむ小山田の

苗代水にぬれて作るあ

めもはるに雲まも青くなりけり

けふこそ野邊の若菜摘みてめ

つくば山さける櫻の匂ひをば

いりて折らねどよそながら見つ

ちぐさにも綻ぶ花の匂ひかな

いづら青柳ぬひしいとすぢ

のやうに凝つたものである。あるひはまた、集の最後に「五日さうぶにつけて或る所に奉る」といふ詞書で

こゝろざし

ふかき

進上

深

みぎはのあやめぐさ

ちとせのさつきいつかかるべき

右葉上菖蒲草

千年五月五日可苺

のごときは、彼が詩文における豊かな才藻を、實に巧みに和歌のうへに表はしてゐるのである。かういふ風に和歌にも實に練達した腕前をもつてゐた彼は、「應和元年七月十一日四歳なる文ごを喪ひて同年八月六日又五つなるをの子を喪ひて、無常の思ひにふれておこる悲しびの涙かはかず、古萬葉集中に沙彌滿誓がよめる歌の中に、世の中を何にたとへむといへることをとりてかしらにおきて」よんでゐるがその十首の歌のうち

世のなかを何に譬へむ茜さす

朝日まつまの萩のうへの露

世のなかを何に譬へむ夕露も

またで消えぬる朝顔の花

世のなかを何に譬へむ飛鳥川

さだめなき世にたぎる水の泡

世のなかを何に譬へむ秋の野を

ほのかにてらすよひの稻妻

世のなかを何に譬へむ冬を淺み

降ると降るまに消ぬるあは雪



などのものは、湧くやうに流れいづる胸の思ひを、清新な調のうへに十分に歌ひ出してゐる。しかしながら、これを見てもわかるやうに、彼がいかに才氣煥發であつたか、そのありあまる才をもつて、つひに和歌の正道を進み得なかつたのは、彼の不明からか、あるひは貫之等先輩の罪であらうか。前に貫之が後撰集の撰者たちに及ぼした影響の決して少くないことはこれを指摘しておいたが、順が詩文によつて養はれた詩藝は、たとひ萬葉集を多少さぐつてゐるにしても、それは子どもを失つた悲しみに、多少眞摯の情を傳へ得てはゐるけれども、やつぱり才氣にまかせて歌ひ流してゐるやうに、ありあまる才氣のためにそれと結んで、つひに横道へそれるやうになつたものとしか考へられぬ。

十一月賀茂の臨時祭に

ちはやぶる賀茂の河霧きるなかに

しるきはすれる衣なりけり

調は清新であるが、霧ると着るこの懸け方に、いかにも小手をきかせてそこに得意の顔が見えるところ。

梅の花ある家

朝冰ふきとく風はぬるけれど

いそぎて梅ははやさきにけり

「ぬるけれど」とおいて「いそぎて」とつゞけたところ。

人の家に櫻柳あり

風はわきてくれども青柳の

糸はさくらは亂れあひにけり

の歌では、前の歌と同じ心持でさらに來れどもと繰れどもと懸けて、「みだれ」と出した手ぎはなど、あらゆるところに技巧的用意を忘れない。甚だしきは、

一昨年も去年も今年も一昨日も

きのふも今日もわが戀ふる君

のとき、殆んど見戯に類するものもあるが、

水のおもに照る月なみを數ふれば

こよひぞ秋のものなかりける

のごときは、「照る月なみを數ふれば」のやうに理知的的用意があるにしても、相當に心持の出た歌である。

しかしながら、彼が歌をもつて、眞に詠歌を吐露するものであるとは考へてゐなかつたことは、子どもを失つて世の無常を歌つたり、官途の沈滞を歎いたものゝ外、殆んど全部が、屏風の歌や、遊びの時に詠まれた題詠かであることによつて知られるのである。からいふ彼が野宮歌合に勝負を歌でしてゐるなどは不思議ではない。さうしてまた、歌が一般にひとつの「遊び」と考へられるやうになるのも、必然の勢でなければならぬ。藤岡博士のいふやうに「古今の昔を仰ぎ、これに倣うて及ばざらむことを恐るゝのみ」ではなかつたにしても、「徒らに世とともに浮沈して」正しく歌の精神を理解することを忘れ、貫之が御屏風の歌として奉つてゐるのを眞似てしきりにその才をやつて、つひ



に「一世の崇奉を博した」ために、歌を正しき方向に進展せしめ得なかつた罪の大半は順が負はねばならぬであらうさは考へる。しかし彼が「世のなかを何に譬へむ」と歌つてゐる歌を見てもわかるやうに、正しく萬葉集の精神をつかまうとしたならば、捉み得た人であることは十分明かである。彼の才はそこにふみとゞまつて、内に省察の眼をむけることが出来なかつたのである。しかも時代が、榮譽名達を望まないではをられぬやうに、享樂的に爛熟しきつてゐたことを思へば、そこに投すべく彼の才はあまり都合よく出来すぎてゐたかの感さへあるのである。

大中臣能宣は、中臣氏の後、祭主頼基の子である。代々歌を善くして來たが、能宣に至つてはじめて歌人として著はれてゐる。はじめ藏人所に候し、天曆五年功勞によりて讃岐權掾となり、天徳元年、從四位下に叙せられ、神祇少祐から大祐に轉じ、安和のはじめ少副、さらに大副となり、祭主にまでいたり、位は累進して寛和二年十月正四位下に叙せられ、正暦二年七十歳で卒した。

袋草子や十訓抄に傳ふるところによれば、かつて敦實親王の子日の宴に

千歳までかきれる松も今日よりは

君にひかれて萬代やへむ

と詠んだのを得意になつて父頼基に話したところ、頼基は吟詠して忽ち怒り、汝もし他日昇殿をゆるされて子日の宴などに侍つたならば、いかなる歌をもつて御祝ひするかと、枕を擲げつけられたので、恐懼して退いたといふ話である。

彼の集もまた題詠の歌が大半である。八十首あるうち、御屏風の歌が、三十七首、歌合の歌が三十二首、その他四

首あるから、折にふれて詠んだ歌は僅かに、七首しかないのである。もちろん彼の作が一生を通じてこればかりのものではなかつたであらうけれども、いまはこれによるより外しかたがない。

彌生のつごもりがたに雨のふる夜春のくるゝを惜しみて侍る心をよむに

暮れぬべき春の形見と思ひつゝ

花のしづくにぬれむこよひは

くら人ごころのをのことも花見にまかりいで侍るに藏人になりて侍るがもとへつかはしける

花のいろを見るにつけつゝ諸ともに

をりしむかしの人ぞこひしき

ともに率直に歌つて、態度に浮いたところがない。有名な

みかきもり衛士のたく火の夜はもえて

ひるはきえつゝものをこそ思へ

は、彫琢の跡は十分認められるけれども、しみじみとした心持を出してゐる。彼の歌はいづれもしなやかなしらべで、順の歌に見られるやうな、得意の顔を出してゐるといふ風な所がない。どこか落ちついてゐる。

旅ゆくにかりの聲をきゝて

草枕われのみならずかりがねも

旅のそらにぞなきわたるなる



それほど優れてゐるといふではないが、淡々と歌ひ流してゐる態度がいゝ。これは元輔や順が、官位の進みかたがおそいために、卑官にあつて常に官位のこと苦になつて、内に省みるといふよりも、常に人の顔色を伺ふといふやうな傾きになり勝ちだつたのに對して、さういふ關心の外にをられたためではないかとも考へられるのである。だから、

君がため今日きる竹の杖なれば

またつきもせぬ千代ぞこもれる

といふ風な歌を作つても、いやに上に媚びるやうには聞えない。かういふ態度だつた彼は、戀詞や縁語をたどつて作らうとした歌は殆んど失敗してゐる。率直に、淡として水のごときが彼の自然だつたらしい。

やま河をおち來る瀧のおともせず

いまは氷のとちぞしぬらし

のごときは相當に手練のものでなければ出來ない歌である。かくて、彼の歌風は後撰集の一面を代表してゐると言へるのである。

けれども當時の歌人として優れてゐたのは、平兼盛と壬生忠見である。時文望城のごときは、八雲御抄に「梨壺の五人めでたしといへども、かの古今の四人の撰者に及ぶべからず。能宣元輔は重代のうへもつとも然るべきの歌人なり。順また重代にあらずといへども、この道稽古のものなり。望城、時文は父が子といふばかりなり」と言はれてゐるやうに、望城は是則の子、時文は貫之の子といふだけで、論ずるに足らない。わづかに勅撰集にその歌が見えてゐ

るだけで、その家集もなく、また論ずるに足るほどのものもないから、兼盛、忠見を一瞥したいと思ふ。

忠見は初め攝津に居つて、家が極めて貧窶だつたが、早くから和歌で知られてゐたらしい。醍醐帝から召されたのに、弊衣を著て藏人所に伺候した。時に御製

見しかども何とも知らず難波がた

波のよるにてかへりにしかは

といふを賜はつた。忠見お答申上げていはく、

住吉のまつとほのかに聞しかは

みち來し潮や夜かへりけむ

醍醐帝また、忠見を御厨子所に召されようと望まれたが、勅命がないので忠見は、

櫻花たかきこすゑのなびかずば

かへりやしなむをりわびぬきて

といふ歌を奉つた。醍醐帝これに返されて

をりわびて歸らむものか來しかげの

山のさくらは雲るなりとも

と仰せられて、御厨子所に仕候するやうになつたといふ話が、大日本史に出てゐるが、これは天曆八年である。天德二年正月に攝津大目に任ぜられ、六位を授けられた。天徳歌合に、



戀すてふわが名はまだき立ちにけり

人知れずこそおもひそめしが

といふ歌を作つて、兼盛の

忍ぶれど色に出にけりわが戀は

物や思ふとひとのとふまで

といふ歌に合せた。判者は藤原實頼だつたが、いづれをいづれと定めかねるので、ひそかに天機を伺つてみると、帝は兼盛の歌をひそかに口にせられたので、兼盛の歌を勝とした、忠見は失望のあまり憂死したと傳へられて有名な話である。袋草子には、初めて禁中に召された時、乗物がなくて参上しがたい由を申あげると、竹馬に乗つて参れといふ勅詔だつたので、

竹馬はふしがちにしていゝ弱し

いまゆふかげに乗りて参らむ

と詠んで奉つたと記してゐる。御屏風の歌のうちに、

吉野山に霞立てり、河に船あり

霞たつ吉野の山を越えくれば

ふもとぞ春のとまりなりける

春日野やく

焼かずとも草は萌えなむ春日野を

たゞ春の日にまかせたらなむ

夏、淀のわたりに舟あり、郭公なく

いづかたに鳴きてゆくらむ郭公

淀のわたりのまだ夜ふかきに

秋、須磨の浦に關あり

秋風の關ふき越ゆるたびごとに

聲うちそふる須磨の浦波

冬、武藏野に旅人あり

行きくらす旅の宿りも武藏野の

草むすぶ夜はむつまじきかな

のごとき吟誦に勝へたる珠玉のものがあひ。あるひは

十二月佛名するところ

罪とがは目にし見えねば降る雪の

消えむあしたを見るばかりなり

京のたよりなかりければ、津の國に住まむとて行く道に知りたる人あひて、なにしにかくは行くぞと問ひけ



れば

都にはありわびぬれば津の國の

住吉と聞く里へこそゆけ

など、あるひはしらべ高く、あるひはしほらしく、あるひは心もすむばかりに、あるひはまた、流るゝ水のやうに拘はることなく去つて顧みないといふ風に、詩人の面目の躍如たるをおぼえるのである。

君が世にさかゆくべしと思ひせば

とはましものをたゞみねの道

と父を懐ふの情を歌ひながら、父の時代を希つたけれども、時代の頽勢は、つひに彼の力ではどうすることも出来なかつたのであらう。しらべのうへに心もちが見える。

兼盛は、光孝天皇の皇子是忠親王の曾孫で、父は兵部大輔平篤行、その三男である。本朝文粹に、彼が文才あつて少くして大學にいら、進士に及第してゐることを傳へてゐる。天慶九年從五位下に叙せられ、天曆中越前權守となり山城介大監物を歴て康保三年從五位上に進み、天元二年駿河守に任ぜられ、正暦元年に卒した。子日行幸奉和歌序は扶桑拾葉集に收められ、本朝文粹には彼の詩文を見ることが出来る。忠見と並んで後撰集時代の双璧である。忠見のかざらず巧ます平淡に思ひをやるに對して、兼盛は、詞を巧み、思ひを凝らしてゐるから、歌のおもてがなまめいてゐる。さうしてまた戀の歌のいかに多きことよと思はれるほどである。

雪のいみじうふるに

物思ひよにふる雪の忙しきは

つもりつもりて消えぬばかりぞ

朽ちもせぬ長柄の橋の橋柱

久しきことの見えもするかな

女にいきて物いはむといひければ、來ても何ごとをかといひたるに

蘆の屋のこやともいはゞ津の國の

難波のことか言はずあるべき

女を思ひやみねと言ひければ

ひたぶるに言ひもな果てそ世にふれば

人にくからぬものところをきけ

のやうに、しうねく、油ぎつた歌が、縁語懸詞をわづらはしいまでにあやつつてゐるのである。しかし

かはらの院にてはるかに山の櫻を見る

道遠みゆきてはみねど山櫻

こゝろをやりてけふは歸らぬ

深山いでゝ夜半にや來つる時鳥

あかつきかけて聲のきこゆる



夜もすがら見てを明かさむ天の原

こよひの月を雲なかくしそ

のやうに比較的率直な歌もある。

大將の家にすまひのかへりあるじするに

つまづきも無くて今年は數さしつ

酔ひさまだれて今日は歸りぬ

祭の使のたつところつかひ舞人べいじうなどに中將かはらけとりて物かづく

酔ひにけるわれ等はしらす綾もなし

誰が被けたる罪にかあるらむ

のごとき、され歌に類する感があるけれども、あるひは萬葉集の影響がこんな形で浸みこんで來てゐるのではないかと考へられる。かういふ風に觀察して來ると、兼盛は歌に巧者ではあるが、詩人としての才分に於いては、とうてい忠見の敵ではない。當時かういふ風に、一は巧微、一は平淡なものが相並んで稱せられた事實は、當時の歌の傾向が、このふたつ相並行して進んでゐたことを思はせるのである。けれども忠見が天徳歌合に負け、「都にはありわびぬれば津の國の住吉と聞く里にこそゆけ」と歌ひ捨て、飄然と去つたやうに、兼盛の風がむしろ當時よろこばれたとすれば、歌の大勢は大凡これを想像するに足るのである。

かくて當時すでに會根好忠が表はれ、實方が出でしたが、時代は滔々としておもむくところへ趣かなければやまな

かつたのである。

#### 第四章 拾遺集の時代と叙景的詠風

貫之歿後歌壇に新しく動かうとした機運は、わづかに後撰にその影を見せたゞけで、やがて來るべき時を俟たなければならなかつた。忠見の「いづかたに鳴きて行くらむほととぎす淀のあたりのまだ夜ふかきに」といふやうな歌が、次の拾遺集の時代を俟たなければ世のなかに出ることが出来なかつたといふのは、ひとつには前代の作者の方が何となしに偉く見えるといふやうな、沈滞した時代であつたからでもあるが、拾遺集の出るまでの、歌壇の勢力が、源順や清原元輔などを中心として動いてゐたからであらうと考へられる。彼等の歌一般についてはすでに考察して來たやうに、即興的に機智をもてあそぶこと、言ひかへれば、巧者に縁語や懸詞をあやつつて早口に歌を詠むといふやうな、日常の挨拶の外に歌は歌としてまた敘景的の方面に新生面を拓きつゝあつたのである。それについてには後に述べることにして、まづ新時代の代表者藤原公任について語ることにする。

圓融天皇の永觀元年、源順が七十三でこの世を去つた。七年を経た一條天皇の正暦元年、元輔兼盛が逝き、越えて正暦二年大中臣能宣が亡き世の人の數に入つてゐる。これらの巨匠連が相ついで時代から姿を歿して行つた當時の宮廷は、まさに道長の全盛時代を迎へようとして兼家道隆兼等が、互に鎬をけづつて勢力を争つてゐた時代で、公任の十八歳から廿五六歳に至る血氣の時代である。源順の卒した永觀元年は公任の十八歳の時で、源順の才學を羨望してゐながらも、父頼忠の勢望のもとにあつては、自惚の強い公任にとつては、恐らく順も眼中になかつたかも



知れない。八雲御抄に「公任卿寛和の頃より天下無雙の名人とて、既に二百餘歳を経たり。在世の時はいふに及ばず、經信俊頼以下、近く俊成在世までは、空の月の如く仰ぐ」とあるは、おそらく、彼の若い時、宮中で

しらしらとしらけたる夜の月影に

雪かきわけて梅の花折る

と詠んだのを、主上御感のあまり涙に御袖を潤ほさせ給ひ、彼もまた涙をおとして感激したといふ話が、寛和の頃だつたのではあるまいかと想像せられる。寛和といへば公任の廿歳から廿一歳の時である。或は天元三年十五歳の時清涼殿で元服し、主上御みづから冠を授けられたといふことであるから、もつと若い時であつたかも知れない。彼が「天下無雙の名人」として「空の月の如く」仰がれたのは、ひとへに太政大臣頼忠の嫡子で、珍しくも才學に秀でゝゐた爲であるらしい。むしろ彼の聲名は名聞の出なるが故に、彼の實力以上に傳へられたのではあるまいか。ことに宮中で詠じた彼の詠が、主上の御感にあづかつたなどといふことが、かなり大げさに傳へられたにちがひない。とにかく彼はたちまちにして歌壇における聲望を一身に集めたものらしい。拾遺集が撰述されたと推定される長保三年は、彼の三十六歳の時である。

拾遺集の撰述に關しては、諸説紛々として歸する所を知らざる風であるが、藤岡博士が堀保保己一の言を引いて論ぜられてゐるのが、比較的穩健の見である。

袋草紙曰、抄歌五百八十六首、或云四首、即清輔朝臣所見本異耳、又曰、花山院御撰、而世多爲公任。今試以集中所載作者之官位、推其時、此書之撰、即長德二年後、數經刊修、且稍有所增加、至長保三年、乃爲拾遺集廿卷

也、玩讀兩書、其題書之辭、俱似不出人臣之手也、爲花山法皇製作者、得其實歟、姑書俟識者點竄爾

群書類從所載  
拾遺集抄異書

すなはち従來の説に反し抄を以て集に先だてりとす。頗るその意を得ざるが如しといへども、さすがは眼に盲して心に明かなる名檢校の論、漫に俗説に附和せず、進んで憑據を原書に求め、いふところ的確に、頗る耳を傾くべし。たゞ所説簡約にして、結論のみを擧げて推理の次第を説かず。試みに余が見るところを記して、この説の來由を探り、併せて不同意の點をもあげんとす。果して保己一の意に合へりや否や。

集抄とも、公任の官名を記して右衛門督とす。公任がこの職にありしは、長德二年より長保三年までなり。故に保己一は撰述の期を長德三年の後にありとせしならむ。なほ二書ともに、藤原道綱を春宮太夫とす、道綱がこの職に任ぜられしは長德三年なり。されば保己一の説よりもなほ一年を下すを得べし。ついで集に藤原實資を右大將とす、抄はこの人なし。實資がこの職に任ぜられしは長保三年なり。公任の督は長保三年まで、實資の大將は同年よりとすれば、則ち集がこの年に成れるを知るべく、また抄は長德三年より集の成りし年まで五年の間に成りしものにして、もし同年にあらんば、必ずこれに先だちしなり。更に書中の歌の小序を見ても、集が抄の後を受けたりと思はるゝ由あり。されば集まづ成り、抄ついで出でたりといふ説の、極めて故ありげにきこえ、貫之が古今集の纂を抜いて、新撰和歌集を編したる例も引かるれど、余はなほ抄は長德三年以後に成り、更にこれを増補して長保三年に集を得たりといふの明證あるに従はんとす。抄の稱のごときは、後の命なるかも知るべからず、拘泥するに足らざるなり」と言つてゐるが、和田英松博士は、抄には藤原高遠を左兵衛督——長德二年九月任——公任を右兵衛督——長德二年九月から同三年十月——藤原道綱を右大將——長德二年十二月から長保三年七月——とも、春宮



大夫——長徳三年七月兼から長保三年七月——とも記してある。然るに、藤原行成の權記の長保元年十二月十四日の條に「諸東院、奉返先日所借給拾遺抄、歸宅」とあつて、長保元年十二月には拾遺抄の出來てゐたことが明かであるから、抄は長徳三年から、長保元年までの間に出來たものである。さらに集にはまた長保以後の現官を記し、公任が北山へ謫居した寛弘元年九月以後の事があるばかりでなく、藤原行成を右大辨——寛弘二年六月から寛弘六年三月——と言つてゐる。しかも花山法皇が崩御せられたのが寛弘五年二月であるから、集は寛弘二年から五年までに成つたものであらうと論斷されてゐる。

撰者について藤岡博士は「保己一は集抄ともに花山法皇とす。いまだその理由を知らずといへども、題書の辭人臣の手にいずといふは「侍り」などの敬語多きを以て歌人が原案を奉りたるものを用ひて、帝王の机上に編せられたる故なりといふにあらざるか。或は右大臣師輔、左大臣道長など大臣の名をしるせるは、先例に違へるを今の諸を記さず八雲御抄に言ふところによる。舊語には撰述の疎漏に歸したれども、令世の辨のごとく、却つてこれを以て帝王の御撰の證とすべしといふにあるか。いづれも一理ありといへども、いまだ的確の説にあらず、直ちにこれに左祖しがたし。翻りて思ふに集中所載の歌の百首以上あるは、人麿貫之の二人のみにして、兩者その數相匹敵す。公任は貫之に私淑するもの、具平親王がさりとして人麿には及ばじといへるに平かならず。秀歌十首を闕はせて、人麿の勝となりたるに、いよいよ平かならずして、三十六歌仙を撰せり袋草紙と傳ふることを思へば、集中二聖が衡を争ふが如き、すなはち公任の所爲にあらざるなきかを思はしむ。また集中巻頭の歌は、すなはち公任が和歌九品の上品上生のうちに選べるものなるをも思ふべし。されどいづれも應説にすぎず。勅撰次第には、集を或説に藤原長能、源道濟とし、拾遺

抄物には、花山院は撰にして、二人これを承れりとす。眞否如何を知らず。作者についてしばらく疑を存す」と言つてゐる。

藤岡博士の「題書の辭人臣の手にいずといふは「侍り」などの敬語多きを以て、歌人が草案を奉りたるまゝを用ひて、帝王の机上に編せられたる故なりといふにあらざるか」言つてゐるのはその見るところ詳しからざる憾みがある。題書の人臣の手に出でずといふは「はじめて平野祭に男使たてし時歌ふべき歌よませしに冷泉院の五六のみこ袴着侍りける頃、いひおうせて侍りける。左大臣」などあるのを指す。集抄ともに同様の端書がある點から、いづれも花山院の御撰であるといふのが和岡博士の説である。

公任の歌十三首あるに花山院の御作が一首もないのは、あるひは花山院の御撰とする傍證になりはしないか。もし公任が撰述したとしたならば、當時名手であらせられた花山院の御作を一首も採らないで、自作を十三首もいれるといふことは考へられない。むしろその反對の場合ならばあり得る筈である。

それからまた「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」といふ有名な公任の歌について、原作「ちる紅葉を」であつたのを花山院が「紅葉の錦」と改削して集に入れられたのを、公任は不満におもつて、抄を撰んで「ちる紅葉」として入れたと傳へられてゐる。公任のほどのものが「ちる紅葉」と「紅葉の錦」といづれにつくべきかゞわからぬ筈はない。しかも彼がいかに驕慢だとしても、そのために、しかも花山院の御撰にかゝる集に對して私意をもつてしかも不満のあまりその抄を作るといふやうなことは到底考へられない。かういふことを喜んで傳へたのはおそらく好事家の曲筆にちがひない。信するものが少しをかしい。したがつてかういふ傳説めいた話によつ



て抄が公任撰であるといふ證據にならないのはいふまでもない。しばらく和田博士の説にしたがひたいと思ふ。

いさゝか臆説を加へるならば、八雲は抄に傳へられてゐるやうに「公任卿寛和の頃より天下無雙の名人として」空の月のごとく仰がれて来たことが、やがてかゝる所傳をも生むやうになり、拾遺集と抄との撰者について、花山院であるか公任であるかといふやうにまぎらはしいことにもなつたのだと、考へれば考へられないこともない。それはともかく、公任が拾遺集の時代における歌壇の權威として重んぜられてゐた事實は、これらの事情からも伺ふことが出来る。

歌が即興的に、日常の挨拶としてとりかはされるためには、どうしても敏速に詠まれなければならない。枕草子に「人の歌の返しとうすべきを、えよみえぬほどいと心もとなし。けさう人などはさしもいそぐまじけれど、おのづから又さるべきをりもあり。又まして女も男も、たゞにいひかはすほどは、ときのみこそはと思ふほどに、あいたくひがごとく出でくるぞかし」と言つて、何でも早いのを尊んでゐたことが想像される。さうしてそれが歌として認められるためには、縁語や懸詞が巧にあやつたれてゐなければならぬ。縁語や懸詞をあやつることが巧であればあるほど、秀句として即興の場合に喝采を博したのである。例へば

おなじ人(兵衛の藏人)を御供にて、殿上に人さぶらはざりけるほどたゞすませおはしますに、すびつのけぶり  
のたちければ、「かれは何のけぶりぞ、見てこ」とおほせられければ、見て歸りまゐりて

わたつらみのおきにこがるゝもの見ればあまのつりしてかへるなりけり

と奏しけることをかしけれ。蛙のとび入りてこがるゝなりけり」と枕草子に書いてゐるなど、よき例として擧げら

ることが出来る。

しかしながら、一方に歌を歌として、——かういふ風にたゞ機智と玩ぶことは違つた意味で、——鑑賞もし、制作しようとも努めてをつたのである。公任が和歌上品に、「詞たへにして餘りの心さへある」ものを上品上として、

春たつといふばかりにやみ吉野の山もかすみてけさは見ゆらん

ほのほのと明石の浦のあさ霧にしまがくれゆく舟をしぞ思ふ

を擧げ、「詞とどこほりてをかしき所なき」を下品の下として

梓弓ひきみひかすみこすばこすこばこそは猶こすばこばいかに

よの中のうきたびごとに身をなげばひとひに千度われや死にせん

のごときを擧げてゐるところに、たゞ機智をよろこぶといふとは違つて、よき歌を藝術的に見ようとする文學的の心の動きを見ることが出来るのである。さうしてその佳き歌の主觀的のものより叙景的のものに傾いてゐることが、見のがしてならない現象である。さうしてこの傾向を導いたのは、屏風や障子の繪を詠むことが多くなつたからである。後撰集には屏風や障子の歌として一首も見えない。しかるに拾遺集には「屏風に」とか「障子の繪に何々書きたるところ」といふやうな詞書のあるものが、春七十八首のうち二十首、夏五十八首のうち二十二首、秋七十八首のうち二十二首、冬四十八首のうち十九首、すなはち四季の部だけで、二百六十二首のうち、屏風や障子の繪を詠んだ歌が八十一首で、三割強も占めてゐるといふ事實は、いかに客觀的に景色を寫す傾向を助長したかを證明するものである。



いづかたに鳴きてゆくらむほととぎす淀のわたりのまだ夜ふかきに

は「天曆の御時の御屏風に淀のわたりする人かける所に」と詞書あるものであり、

さつきやみくらはし山のほととぎすおほつかなくも鳴きわたるかな

は「春宮にさぶらひける繪にくらはし山に郭公とびわたりたる所」を歌ひ、源順の有名な

水のおもに照る月なみをかぞふれば今宵ぞ秋のもなかなりける

は「屏風に八月十五夜池ある家に人あそびしたる所」とあるごとき、

ちりぬべき花見るときは菅の根のながき春日もみじかかりけり

のごときも「天曆の御時の屏風」の歌である。かやうにして自然を描寫する方法を、屏風や障子の繪に學んだわけで、そこに客觀的に清新なる新境が拓けて來た。

一方に即興にまかせて早口に、機智だけで歌が作られるといふ、言葉の運用に關した修練が生まれ、一方に自然をありのままに叙景するやうになつてゆけば、歌が平淡になつてゆくのは自然の勢である。長明の無名抄に「拾遺の頃より。その休ことの外にもちかくなりて、理くまなく顯はれ、委すなほなるを宣しとす」と批評してゐるのは、かゝる傾向を指摘したものにちがひない。

公任の新撰髓腦に「凡そ歌は心深く、委清げにて、心にかしきところあるをすぐれたりといふべし。事多く添へ鎖りてやと見えたるがいとわろきなり。ひとすちにすくよかになむよむべき云々」といつて、委の清げに、すくよかに詠むことを尊び、事多く添へ、縁語や懸詞であまり「鎖りてや」と見ゆるを拒けてゐるのは、當時の弊風を

指摘し、その好尙の趣くところを代辨してゐると見て過りはなからうと考へる。

それからまた心深きを第一として特にくり返してゐるのは、長明の「その體ことの外にももの近くなりて、理くまなく顯はれ」といふやうなのを、言ひかへれば、歌が今様になりすぎるためにたゞ言にちかく、平淡に流れるのを戒めようとしたのではないかと考へられる。歌がたゞ縁語や懸詞を弄して、しかも平淡に作られるといふやうになれば誰でもが作れるやうになる。だから「殿上に歌論議といふこといで來り、その道の人々、いかゞ問答すべきなど、歌の學問より外のこともなきに、この大納言殿は物ものたまはざりければ、いかなる事ぞとて、殿の難波津に咲くやこの花冬ごもり、いかに、と聞えさせ給ひければ、とばかり物もたまはで、いみじうおぼし案する様にもてなして、え知らずと答へさせ給へりけるに、人々笑ひてことさめ侍りにけり」と大鏡に傳へられてゐるほどの行成が清少納言の

夜をこめて鳥のそらねははかるともよにあふさかの關はゆるさじ

といつた歌に對して、即座に

あふさかは人こえやすき關なれば鳥もなかねどあけてまつとか

ぐらゐは、苦もなく歌つてのけてゐるのである。

あるひはまた、清少納言が里居してゐるとき、則光が齊信に清少の居所をきかれて困つた揚句、台盤のうへにあつた和布を食べながら一時だけはまぎらしたが、しきりに聞かれるので、どうしたらいかを清少のもとへ相談の



手紙をよこした。清少は何も言はず和布を一寸ばかり紙についでやつた。則光にはこの謎がとけなかつた。清少納言は腹たゞしこのあまり

かづきするあまのすみかはそこなりとゆめいふなとやめを食はせけむ

といふ歌を書いて則光にやると、則光は「歌よませつるか、さらに見侍らじ」と言つて逃げて行つた。則光は常に「おのれをおほさん人は歌などよみてえさすまじき。すべてあだ敵となむおもふべき。いまは限りありて絶えなんと思はん時さることは言へ」と言つてをつたのだつた。そこで少し中が悪くなつたころ則光から手紙が来たのに對して

くづれするいもせの山の中なればさらによし野の川とだに見じ

と言つてやつたが「まこと見ずやなりにけん。返事もせずなりにき」と枕草子に書いてゐるのなどは、極端の例だつたにちがひない。かくて歌が當時の殆んど常識となる程度に一般的の文學となつてゐたわけである。さうして古今集をはじめとして勅撰集の歌ぐらゐは、殆んど知らないものがないくらゐに口にされてゐたのである。

## 第五章 王朝文學における「あはれさ」と散文文學への轉機

こゝでひとたびふり返つて見なければならぬのは、古今集によつて擴かれた物の見方がどういふ風に發展したかといふことである。

糸によるものならぬに別れちのこゝろほそくもおもほゆるかな

といふ歌は、別れの心を歌つた歌であるに拘らず、別れの心は直接にひゞいて來ない。たゞ何かなしの心ほそさである。別れちの心を種としての言葉のあやを作り出したのであつて、作者はわれと作りだした言葉の世界に、たゞほのかに心ほそい、あはれな心もちの匂ふのを陶然として味はつてゐるのである。だから直接に受けた感動よりも、それを種として作りいだされるひとつの感情の世界が、さうしてそのために巧まれる言葉のあやつり方が關心の中心問題である。

青柳の糸よりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける

といふ場合においても、花の爛漫とさきみだれてゐる眼前の光景は直接問題とはならない。それはたゞ歌を作り出す種となればいゝのである。従つて花のさきみだれてゐるみだれを中心として「青柳の糸よりかくる」が考へ出される。自然が自然として表現される前に加工されなければならぬ。加工されて表現されたものは言葉の花である。かくて自然は絢爛なる模様として言葉のあやに織り出される。かういふ風にして温醸された古今集の空氣は美に陶醉してゐる感情の世界である。

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

さつきまつ花たちのばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする

木の間よりもり來る月のかげ見れば心づくしの秋はきにけり

といった歌には、つきつめた心や、切迫した感情のはげしさは見られない。しかし何となくしみみとした、誰にも感ぜられるほのかなものがある。直接なる自然を歌ひながら、しかも自然は直接に表現せられてゐない。しづ



心なく花のちるらむ」とか「昔の人の袖の香ぞする」とか、あるひはまた「心づくしの秋は來にけり」とかいふやうに、うす絹のやうな膜をへだて、ほのかなものとして表現される。さうして自ら柔かい夢心地にこそはれようとする。いはゞ直接な表現をさけて一般的な表現に自らを投げだすのである。これが古今集の時代に拓かれた物の見方である。自然に對して夢のやうに美しく見ようとする。うす絹をへだて、物を見るやうな、おぼろげにして輪廓のはつきりしない美しさが、古今集の作者を支配してゐた美である。黄昏の光に物を見るやうな心もちと一般である。これはある觀念的なものがかけにあつて働きかけてゐたからである。觀念的なものとは、あはれとかはかなさとか言ふ言葉によつて表現される、ひとつの感情である。むしろ觀念的な美である。

このあはれさはかなさは、當時の生活、夜も晝もないやうな日常生活と、ことにお互に顔も見ないで夢のやうに逢つては曉の別れを惜しみ、曉の別れが永久の別れともわからないといつた頼めぬ戀愛生活が、深く彼等の心情に浸みこんだ結果と見なければならぬ。彼等の感情生活は常にこのあはれさはかなさの影におほはれてゐたのである。むしろあはれさはかなさは、彼等の感情生活に常につきまとつてゐた亡靈のやうな陰影だつたと言つた方が適切である。この亡靈のやうな觀念的の陰影に憑かれた彼等の趣くところは、淫蕩な戀愛生活である。竹取物語や、宇津保物語に描かれた當時の生活に、すでに戀に狂奔する人々の姿を見て來た。後撰集の世界にその嘆聲をきいて來た。むしろ戀の贈答の歌にかずかずの戀の場面が繪巻物のやうに展開されてゐるのを見た。さうして女にぐどきよる男のくぜつと、女郎花のやうになびくともなく靡いてゆく女の弱さが、もつれては解け、解けては絡らんで、いかにはかなくもあはれな影のやうな世界を作つてゐることであるか。しかしながら薄明を思はせるやうな戀の世

矢吹

界に影のやうに動きながら、彼等自身の姿を鏡に見ることを知らなかつた。古今集の作者が自然を直接に表現することなしに、たゞそれを種として言葉の美しい模様を織り出し、われと織り出した言葉のうす絹を透して來る光に陶然としてゐたやうに、彼等の戀は、戀によつて作りいだされるあはれにはかかない、影繪の種になればよかつたのである。だから戀の淨火に身も魂も焼きつくすといふやうな情熱はない。戀の影繪を樂しめばいゝのである。いはゞ戀の遊戲である。感情のたはむれである。戀にいのちを捨てるといふやうなことは決してない。死ぬほど苦しいと言つても決して戀のために死を希ふのではなく、この世がつらいから、思はぬ山に入らうと言つても決して美しいこの世を捨てるといふやうなことはない。たゞさういふ觀念によつて、ひとつの感情を創りいだすのである。かういふ風にして、彼等の心は極めて陰影の多い世界を創りだしたのである。王朝時代の言葉に、いかにこの心の影を、それとなく言ひ表はすやうな言葉の多いことか。表現の方法がいかにほのかで影の多い心を表現するやうに發達してゐたか。くだくだしい例をあげることもないであらう。

かういふ心の世界、物の見方が何故に歌と結びついてゆかなかつたか、不思議である。歌はたゞ歌として墮勢によつて押しながされてゐたゞけで、何らかの形で新機運が動きかけても、大勢に押しつぶされてしまつたのは、畢竟彼等に批評がなかつたからである。天徳歌會の歌詞を見るに、「ことばよろしからず」、「ことばはいとよからねどくせなく聞ゆ」すゑあはぬこゝちぞする「歌がらおとれり」歌がらはきよげなり「詞たくみたるやうなり」上下の句の上に同じ文字ぞあめる。にくさげにぞ候べき「などいふのが、批評らしい批評で、しかもたゞ言葉の運用いかに關しての批評である。くはしく言へば言葉によつて作られる音樂的效果に關して關心をもつてゐたらしい。